

Animal Nursing

(アニマル・ナーシング)

Vol. 9 No. 1 (第9巻 第1号)

2004

11

Nov.

動物看護師による多彩な研究報告
小動物看護に関する問題提起
「人と動物の関係学」に関する最新の知見

〈巻頭エッセイ〉

臨床獣医師からのメッセージ—伴侶動物医療における動物看護師（師）の職域と、その国家認定に向けて—

〈行事報告〉 私たちの手で育む、これからの動物看護学

第15回 例会

- ・「学習発表」「一般演題」「教育講演」の詳細
- ・特別寄稿／英国における動物看護師の実情
「子犬のしつけ教室」を上手に行うために
- ・ピーター・ネヴィル先生、ジョー・スコット先生の講演が伝えたもの—動物看護学との接点—
- ・動物行動学を学びに英国へ—私が得た貴重な経験—
- ・新しい情報を持ち帰るよろこび—学会参加の意義とは—

第13回 大会、第16回 例会の詳細

第2・3回 動物看護師資格認定試験、行われる

〈投稿論文〉

動物看護（臨床）

意識レベル評価の院内統一を目指して
動物看護師の役割の一つとしての、術前の酸素化の導入
悪性リンパ腫の患畜における動物看護の検討
院内衛生環境調査と対策

動物看護（スタッフ教育）

院内教育方法を考える

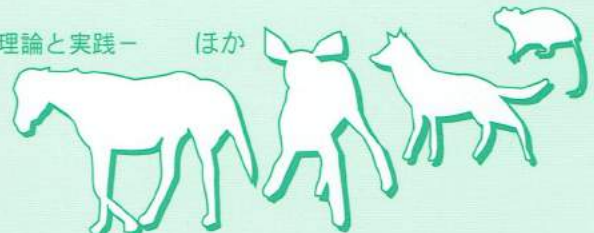
動物看護（接遇マナー）

居心地の良い待合室作りをめざして

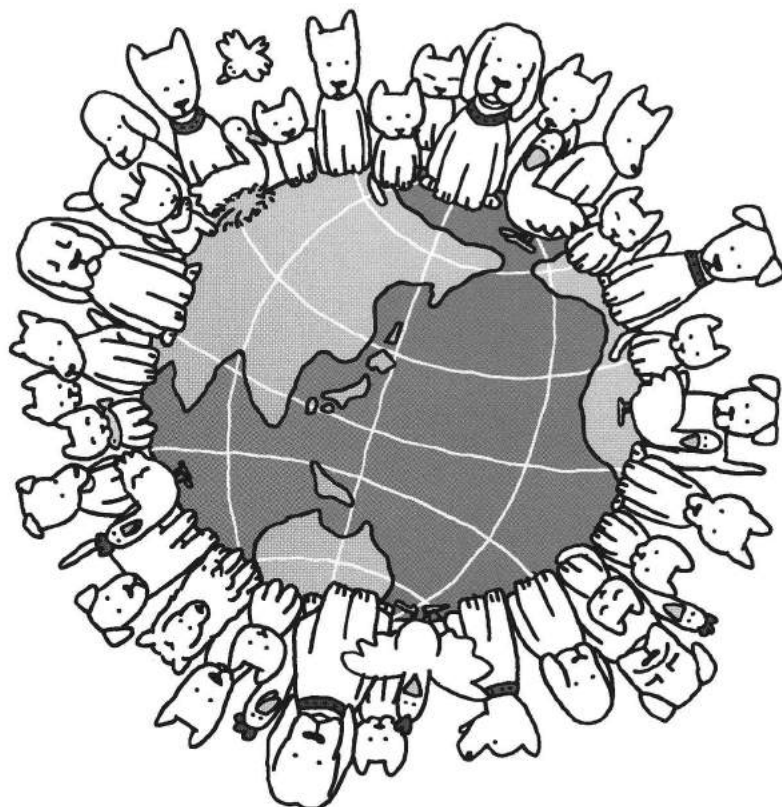
HAB研究

動物介在教育（AAE）の効果と今後の課題
コンパニオンアニマル（犬）喪失後の飼主の心理過程

動物福祉はなぜ必要か—動物福祉の理論と実践— ほか



大日本製薬の小動物用製品



■犬糸状虫症の予防・消化管内線虫駆除に……

カルドメック[®]チュアブル P

〔動物用医薬品〕(要指示)

■犬糸状虫症の予防に……

カルドメック[®]錠

〔動物用医薬品〕(要指示)

■猫の犬糸状虫症予防および猫回虫・猫鉤虫駆虫剤

カルドメック[®]チュアブル FX

〔動物用医薬品〕(要指示)

■犬の慢性心不全に……

エナカルド[®]錠

〔動物用医薬品〕(要指示)

■犬用非ステロイド系消炎鎮痛剤

リママイル[®]チュアブル/錠

〔動物用医薬品〕(要指示)

■3種混合生ワクチン

犬用ビルバゲン[®] DA₂ Parvo

〔動物用医薬品〕(要指示)

■3種混合生ワクチン

猫用ビルバゲン[®] CRP

〔動物用医薬品〕(要指示)

■遺伝子組換え型 猫白血病ワクチン

リュウコゲン[®]

〔動物用医薬品〕(要指示)

■個体識別電子IDチップ

ライフチップ[®]

LIFECHIP

■疾病の食事管理に……

Hill's[®] PRESCRIPTION DIET

■健康維持の食事管理に……

Hill's[®] SCIENCE DIET

■犬・猫用ニューキノロン製剤

VICTAS[®] ビクタス S 注射液5%/錠10mg・40mg

〔動物用医薬品〕(要指示)

■犬用ニューキノロン外耳炎・皮膚感染症治療剤

VICTAS[®] ビクタス S MTクリーム

〔動物用医薬品〕(要指示)

■動物用吸入麻酔剤

イソフル[®]

〔動物用医薬品〕(要指示)

■非ステロイド性抗炎症点眼剤

ティアローズ[®]

〔動物用医薬品〕

■犬老年性初発白内障進行防止剤

ライトクリーン[®]

〔動物用医薬品〕

■犬・猫角膜障害治療剤

パピティン[®]

〔動物用医薬品〕

■犬真菌性外耳炎治療剤

ミミーナ[®]

〔動物用医薬品〕

※カルドメック、エナカルドはメリアルの所有登録商標

《巻頭エッセイ》

臨床獣医師からのメッセージ—伴侶動物医療における動物看護師(師)の職域と、その国家認定に向けて—
細井戸大成 (鶴見緑地動物病院) 3

《行事報告》 私たちの手で育む、これからの動物看護学

- 第15回 例会
- 「学習発表」「一般演題」「教育講演」の詳報 / 6
- 特別寄稿 1. 英国における動物看護師の実情
2. 「子犬のしつけ教室」を上手に行うために
ジョー・スコット (英国獣医師協会認定 獣医看護師) / 7
- ピーター・ネヴィル先生、ジョー・スコット先生の講演が伝えたもの
—動物看護学との接点— 尾形庭子 (どうぶつ行動クリニック・FAU) / 13
- 動物行動学を学びに英国へ—私が得た貴重な経験— 米澤亜樹 (在 英国) / 14
- 新しい情報を持ち帰るよるこび—学会参加の意義とは— 井上三樹子 (くろき動物病院) / 16

第2・3回 動物看護師資格認定試験、行われる / 17

《投稿論文》

動物看護 (臨床)

- 原著 意識レベル評価の院内統一を目指して—動物用CS 考案の試み— 18
清水法子、杉崎香織、尾花礼子、松本美里、加藤美城子、橋本裕紀子、
吉田沙耶子、新宮昌美、倉持三千恵、國宗義雄 (王寺動物病院、まさき動物病院)
- 短報 動物看護師の役割の一つとしての、術前の酸素化の導入 27
—7ヶ月の実施期間を終えて— 瀬戸晴代 (西谷獣医科病院)
- 短報 悪性リンパ腫の患畜における動物看護の検討 30
鈴木加奈子、井上五月、松本恵実、前島朱美、赤池久恵 (赤池ペットクリニック)
- 短報 院内衛生環境調査と対策—その5 静脈留置部位の細菌汚染に関する調査— 35
井上裕美子、広瀬雅子、川上早苗、剣持妙子、八十島利恵、湯本哲夫 (湯本ペットクリニック)

動物看護 (スタッフ教育)

- 短報 院内教育方法を考える—初めて患畜の情報収集をする者の、動物看護への思いを探る— 39
西谷孝子 (西谷獣医科医院)

動物看護 (接遇マナー)

- 短報 居心地の良い待合室作りをめざして 43
木村満知子、藤田理恵子、大谷美紀、佐藤亜也子、斉藤亜紀江、深井麗子、野原宏実、
新井陽子、山田幸子、松沢ふみ、児矢野早紀、庄子さとみ、宮川則子、藤田桂一
(フジタ動物病院)

HAB 研究

- 総説 動物介在教育 (AAE) の効果と今後の課題 49
—幼稚園における AAE を中心として— 木場有紀、谷田 創 (広島大学大学院)
- 短報 コンパニオンアニマル (犬) 喪失後の飼主の心理過程 58
—犬の喪失原因別にみた、飼主の喪失感情— 濱野佐代子 (白百合女子大学大学院)

《連載》動物福祉はなぜ必要か—動物福祉の理論と実践—

- ②心理学的幸福の確立とその方策としての、環境エンリッチメント 63
上野吉一 (京都大学霊長類研究所)
- 人獣共通感染症の主要な病原体—寄生虫についての興味を深めよう 69
《目黒寄生虫館からのメッセージ》 内田明彦 (目黒寄生虫館・麻布大学)

《行事報告》 続き

- 第13回 大会—「教育講演」の詳報 / 73
- 第16回 例会—「学習発表」「一般演題」「教育講演」の詳報 / 73

あなたが考える「動物看護」を教えてください! —学生たちは何を思う... 75

《コラム》闘牛が意味するもの—スペイン 佐和子・コントレラス・中村 (在スペイン) 76

《書評》よりよい動物看護の友として 中島定彦 (関西学院大学) 77

- 投稿を終えて—執筆者からのメッセージ / 78
- BOOK ナビ・ルポ / 79
- 平成16年度 動物看護研究助成金事業 発足のお知らせ / 80
- 第4回「動物看護師資格認定試験」のお知らせ / 81
- 学会規約 / 82
- 投稿規定 / 84
- 編集後記 / 85

死ぬのが怖いから 飼わないなんて、 言わないで欲しい。

おうちを汚すから飼わないというなら、
犬はお行儀を身につけることができる。
留守がちだから飼わないというなら、
犬はけなげにも、孤独と向きあおうと努力する
かもしれない。貧乏だから飼わないというなら、
犬はきつといっしょに貧乏を楽しんでくれる。

だけど・・・死ぬのが怖いからって言われたら、
犬はもうお手上げだ。すべての犬は、永遠じゃない。
いつかはいなくなる。でもそれまでは、
すごく生きている。すごく生きているよ。
たぶん今日も、日本中の犬たちはすごく生きていて、
飼い主たちは、大変であつくるしくって、
幸せな時間を共有してるはず。

飼いたいけど飼わないという人がいたら、
伝えて欲しい。犬たちは、
あなたを悲しませるためにやっては来ない。
あなたを微笑ませるためだけにやって来るのだと。
どこかの神様から、ムクムクしたあつたかい命を
預かってみるのは、人に与えられた、
素朴であって高尚な楽しみでありますよと。



飼い主になったらできることがある。ペットが
健やかな一生をおくれるように、気づかってあげること。
きょう、日本ペットフードは安心ブランドを宣言します。

NPF 日本ペットフード

<http://www.npf.co.jp/>



添加物は、人間に安心な
ものしか使いません。
それは、
大切な家族のためだから。

ドライフードの油脂は熱や光で酸化が進みやすく、酸化した油脂
はペットの健康をおびやかす原因になります。そこで日本ペッ
トフードは、天然成分の「ローズマリー抽出物」でその酸化を防止す
ることにしました。合成の酸化防止剤は使用していません。色素等
の添加物も、食品で許可されているものだけを使用しています。
大切な家族の一員だから、あんしんへのこだわりは人間と同じです。

臨床獣医師からのメッセージ

— 伴侶動物医療における動物看護師(師)の職域と、
その国家認定に向けて —

鶴見緑地動物病院 院長
ほそい と たいせい
細井戸大成



昭和30年生まれ(本籍 大阪市)。昭和54年、山口大学農学部獣医学科卒。ネオ・ベッツ動物病院グループ 鶴見緑地動物病院院長。(社)大阪市獣医師会副会長、(社)日本動物病院福祉協会専務理事、大阪市動物愛護協議会委員。鶴見緑地動物病院は「ヒューマン・アニマル・ボンド(人と動物の絆)」を大切に、人と動物とのすばらしい共生社会実現に向け、常に、最新の動物医療とやさしい看護、そして、飼い主さんに安心感を提供できる動物病院を目指しています。

わが国の伴侶動物医療における看護を担う「動物看護師(師)」とは、VT (Veterinary Technician、ベテリナリー・テクニシャン) なのでしょうか? それとも AN (Animal Nurse、アニマル・ナース)、ANT (Animal Nursing Technician、アニマル・ナーシング・テクニシャン) なのでしょうか?

日本語による名称は、ようやく「動物看護師(師)」に統一されてきました。人の医療では、医師、薬剤師、看護師、臨床検査技師、レントゲン技師、理学療法士といった呼称や職域が、明確な形で社会的に認知されています。「看護師」は「看護師」へと“進化”し、その職域と地位がより重要なものとなっています。

伴侶動物医療の現状と、伴侶動物医療における動物看護師の呼称や職域の統一という観点から、動物看護師の地位向上と社会的認知について考えてみましょう。

(筆者注) 本稿では便宜上、原則的に「動物看護師」の表記にて統一する

●伴侶動物医療とは

近年、「動物の愛護及び管理に関する法律」「身体障害者補助犬法」などの動物に関わる法律の施行、伴侶動物に対する社会の認識とその地位の向上に加えて、HAB (Human Animal Bond、ヒューマン・アニマル・ボンド、人と動物の絆) の理念を大切にするという傾向が社会に広がりを見せる中、人と動物とがより強く絆を深め、よりよい関係で共に生きることができ社会的実現に向けて、われわれ獣医師や動物看護師をはじめとする動物病院スタッフの役割は、非常に重要になってきています。そして、獣医師の職域の中でも、伴侶動物医療に携わる獣医師の割合は確実に増加

しています。

獣医師の職務を大別すると次のようになります。

1) 伴侶動物医療

犬や猫、ウサギなどの伴侶動物の診療。動物病院の獣医師が担当。

2) 公衆衛生

ズーノーシス「人獣共通感染症(狂犬病、レプトスピラ病など)」の予防と管理など、人の健康管理に関わる業務。主に行政(公務員)の獣医師が担当し、民間の獣医師も協力。

3) 経済動物関連

牛、豚、鶏などの診療や、食肉・乳製品などの食品管理業務。大動物の診療所、牧場、食品関連企業の獣医師が担当。

4) 研究・開発、教育

獣医科学生の教育、薬品等の開発、遺伝子研究など。大学、研究所、人の医療機関、民間企業に所属する獣医師が担当。

このうち、1) 伴侶動物医療 の内容としては下記が挙げられます。

「病気の治療」—— 各種手術などの外科的治療や、投薬や入院管理などの内科的治療。

「病気の予防」—— 予防注射、予防薬、避妊・去勢手術、食事管理など。

「定期検診による早期発見と管理」—— 癌や心臓病・腎臓病などの慢性疾患の早期発見と管理。

そして、その他の大切な役割として「人と動物とのより良い共生」へのサポートがあります。誰からも愛され、社会的に認知された伴侶動物と人が、よりよい共生をしていくためのサポートです。つまり動物たちが、動物好きな人だけでなく、より多くの人々に愛され、社会的に認知された伴侶動物として、社会に受け入れられるためのサポートです。

具体的には、「生活環境（住環境や生活時間、家族構成など）に適した動物選び」や「ズーノシスの予防と管理」「動物の健康管理全般」だけでなく、どのような場所でもマナーが守られるための、「飼主と動物に対するしつけ指導」「動物の問題行動の解決」「伴侶動物がもたらす社会的効果（動物介在活動・動物介在療法・動物介在教育など）」の広報、「愛する伴侶動物を亡くした人への心のケア」などです。

獣医師の職務は、「食の安全・安心の確保」「人の健康維持」「研究および教育」はもちろん、「家族の一員としての伴侶動物たちの健康管理」「人と動物の共生サポート」と非常に拡大されてきました。特に伴侶動物医療は非常に多様化しています。このような社会背景の中、獣医師とともに動物看護師の存在は、伴侶動物医療において必要不可欠な存在になっています。

●動物看護師の役割と社会認知

私が動物病院を開院した当時（20年前）も、「動物の命を大切にするという気持ち」や「動物愛護や動物福祉の精神」は存在していました。

しかし獣医師にとって、小動物臨床（伴侶動物医療）という分野はまだマイナー（中心的でない）な職域でした。もちろん、動物看護師という職業もまったくと言ってよいほど社会的に認知されていませんでした。当時は、研修医や代診医、獣医師の家族などが看護や診療補助という役割を担っていました。

やがて、動物看護師の職域や義務と権利、法的環境などに関する整備がなされないまま、全国各地で獣医師関連団体（獣医師協同組合など）や民間企業（学校法人も含む）が、動物看護師養成学校を新設したり、既設の専門学校内に動物看護師養成課程を作り、動物看護師養成に取り組むようになりました。現在、全国で2万人以上（伴侶動物医療に携わる獣医師の数よりも多い）の動物看護師が存在していると言われています。

そして、社団法人日本動物病院福祉協会（JAHA）、日本小動物獣医師会、全日本獣医師協同組合、名古屋市獣医師共同組合などの獣医師関連団体、および後述の日本動物看護学会が、任意に動物看護師認定試験を実施し、動物看護師の職務と知識・技能の標準化に取り組んでいます。

例えば、JAHAでは認定する「動物看護師」を、「動物医療の補助、傷病動物の看護、動物の適正な飼養および公衆衛生の指導ならびに普及啓発にあたることを業とする者を動物看護師（VT）という」と規程しています（同協会の規程より引用）。つまり、動物病院スタッフの一員として、HABを大切にしながら動物看護を通じて社会に貢献するために、必要となる知識と技術を修得している人と定義しています。

そして、修得すべき知識を以下に分類しています——「関係法規に関する知識と職業倫理」「受付業務に関する知識」「薬物に関する知識」「診察補助に関する知識」「臨床検査に関する知識」「生体検査に関する知識」「手術補助に関する知識」「動物看護に関する知識」「救急看護に関する知識」「エキゾチックアニマルに関する知識」「クライアント教育のための知識」。この上で、教育カリキュラムとガイドラインの作成、教科書の指定、セミナー開催の後、認定試験を実施しています。

他団体もそれぞれが、動物看護師の呼称、職務、修得すべき知識・技能を定義しています。そして教育セミナーの実施、教育カリキュラムの作成、参考書の選定などについて試行錯誤の上、認定試験を実施し、動物看護師を認定してきました。

2003年にはようやく、日本動物看護学会の動物看護師資格認定試験が始まり、全国的な公的認定試験制度確立に向けて、大きく動きはじめました。このことが、動物看護師の国家認定につながることを祈っています。

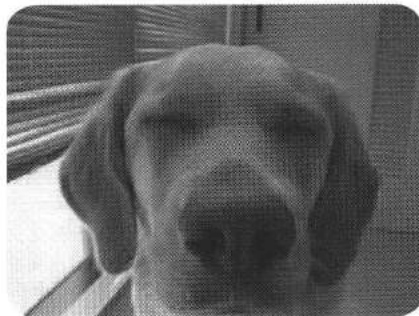
そして今後、動物看護師の国家認定実現に向けて、法的整備はもちろん、関連団体による協議の場を早急に設けた上で、人の医療における看護師制度、米国のVT、英国のANを参考にしながら、日本の伴侶動物医療の現状を考慮、検討した上で、職域、呼称、用語統一を図っていくことが重要です。

現役の動物看護師の皆さんはHABを大切にしながら

ら、伴侶動物医療の中で、飼主にも動物にもやさしい看護と適切な指導ができるように、日々努力してください。皆さんが獣医師、飼主や社会の人々とともに、人と動物の双方がともに幸せに暮らせるような社会づくりに貢献していけば、おのずと「動物看護師」として社会に認知され、地位が向上していくと思います。

最後に、「師」について少し考えてみましょう。「獣医ではなく獣医『師』と呼びなさい」と、『師』を付けるように主張している獣医（獣医師）さんもいます。しかし、そう言っているだけではだめですよね。指導者として国家認定されている限り、獣医師としての知識・技術をより研鑽し、知性豊かな人格者となり、社会から自然に「獣医師」と呼ばれ、地域社会のリーダーになることが大切です。

同様に、いずれ「動物看護師」も「動物看護師」として国家認定されることになると思います。動物と人にやさしく、知性あふれる「動物看護師」をめざしてください。そして、社会から尊敬される「師」として「動物看護師」という職業を確立していきましょう。



写真は、鶴見緑地動物病院のホームページ (<http://www.tsurumi-ah.com/>) にある、「治療を受けた動物たち」より。

行事 報告

私たちの手で育む、これからの動物看護学

2004年2～8月に開催された、日本動物看護学会の行事についてご報告します。第15回例会（04年2月21日）、第13回大会（04年6月13日）、第16回例会（04年8月7日）についてお伝えします

（敬称略。発表時には質疑応答も含む。発表者連名は略。発表内容まとは編集委員会による）。

●第15回 例会●

2004年2月21日（土）

東京・池袋 サンシャインシティ文化会館 日本獣医臨床病理学会2004年大会と共催



第15回例会が開催され、学習発表（学生による発表）3題、一般演題（動物看護師による発表）7題の発表が行われました。今回は、英国より講師の先生お二人をお迎えして、教育講演「犬の問題行動の診療と治療」、VTセミナー「英国における獣医看護の現状」も行われました。

学習発表 発表時間は各15分

「好中球の貧食能検査」

秋庭範子（セビア・ペットケアスクール 看護科2年）

総合的な貧食能をみる検査として、人医にて行われている顆粒球機能検査を、犬猫へ試みた結果の報告。

「残存乳歯」

山口浩美（セビア・ペットケアスクール 看護科2年）

治療方法についての考察。加えて、犬の幼少期における、スキンシップなどを通した歯のチェックの大切さを報告。

「イレウス」

山本陽子（セビア・ペットケアスクール 看護科2年）

イレウス（腸閉塞）の進行に伴う、他臓器への影響、敗血症、ショックなどの重篤な合併症を防ぐための、早期治療の大切さを報告。

一般演題 発表時間は各15分

「地方都市における動物看護師勉強会の立ち上げと

今後の方向性について」

鈴木加奈子（赤池ペットクリニック）

同会の立ち上げの様子と運営状況、ならびに今後の計画に関する詳細報告。地方在住者にとっての、各種セミナーや学会への参加における問題点にも言及。

「動物の防災意識調査」 三嶋淳子（広尾動物病院）

演者は日頃より、災害時に、人と動物が共に安全に避難できることをめざして活動中。アンケート結果から分かった様々な問題点を指摘。日頃の飼主による心がまえの大切さを報告。

「当院における看護計画用紙（看護記録1号用紙）の分析

一看護基準の作成をめざして」西谷孝子（西谷獣医科病院）

近年立案した看護計画の中から、多い2疾患（腎不全、乳腺腫瘍）の看護記録用紙を分析の上、今後導入する看護基準の示唆となる事項を報告。看護ケアの質向上の大切さを述べる。

「当院におけるシャンプーカウンセリングの検討」

瀬戸晴代（西谷獣医科病院）

「飼主に平易に説明し個別指導すること」「トリミングやしつ



秋庭範子さん



山口浩美さん



山本陽子さん



鈴木加奈子さん



三嶋淳子さん



西谷孝子さん



瀬戸晴代さん



金山智子さん



中井江梨子さん



深井麗子さん



ピーター・ネヴィル先生

け、予防医学以外に、カウンセリングやコミュニケーション技術の知識も必要であること」などの重要な課題を指摘。

「犬の歯冠破折の発生と原因」金山智子（Vettec Dentistry）

歯冠破折は、歯髄炎などの歯内疾患や、さらに歯根突端周囲の骨の溶解により顔面に瘻孔を形成することもある。歯冠破折の発生頻度と原因について約750症例を詳細に分析。

「犬の眼内圧変動に関与する要因について」

中井江梨子（どうぶつ眼科 アイ・ベット）

眼内圧の値は測定時の条件により変動する。小動物におけるこの正確な測定には、測定者や機器の要因と同時に保定者の要因も大きい。この点を具体的な数値計測に基づき報告。

「術前準備における動物看護師の役割」

深井麗子（フジタ動物病院）

発表者らは日頃から、術前準備マニュアルを手術室に掲示して、術中の事故や不備などを未然に防いできた。動物看護師による衛生管理の意義という観点から、その詳細を報告。

教育講演

「犬の問題行動の診療と治療」 120分

ピーター・ネヴィル先生 (Dr. Peter Neville)

Companion Animal Behaviour Therapist (英国・コンパニオンアニマルの問題行動療法士) www.pets.f9.co.uk

ピーター・ネヴィル先生のご講演要旨

(当日配布された予稿集より転載)

最新の行動治療と犬に対するアプローチ法

感情の診断・気分の分析・強化の分析
——以上は、犬同士の攻撃行動の契機の評価。

動機と感情のカテゴリー

- a. 捕食行動 (目的: 狩り・食べ物を入手、感情: 平常)
- b. 防衛のための攻撃 (目的: 健康維持・生存、感情: 不快・嫌悪)
- c. 積極的 (競合的) 攻撃 (目的: テリトリー・資源・繁殖の機会確保、感情: 勝つことによって得られる快感)

行動療法による効果的なコミュニケーション

- a. 犬の問題行動における課題: 飼主による問題行動の強化、犬とのコミュニケーションの取り方
- b. 犬とのよいコミュニケーション方法: 犬にとって一貫してわかりやすい方法で行うこと、適切な行動時に「強化」による原理を導入すること

行動療法における感情のシグナル: 「報酬」と「無報酬」

- a. 成功のシグナル: クリッカー (小さな箱に備え付けられたプリキ板を押すと、「カチン」と音が出る道具) (古典的条件付け) を用いた正の強化 (道具的条件づけ)
- b. 失敗のシグナル: トレーニングディスク (響きの出る道具) を用いた方法 (道具的条件づけ)

コントロール下での刺激の導入と、刺激による感情の制御

「報酬」と「無報酬」を用いたリハビリテーション

治療

投薬による攻撃性強化の制御、行動治療を補助する精神薬の使用

● 第15回 例会 —— 特別寄稿 ●

1. 英国における動物看護師の実情

2. 「子犬のしつけ教室」を上手に行うために



例会当日、先生を囲んで



ジョー・スコット先生 (Mrs. Jo Scott)

V. N. (Veterinary Nurse)

——英国獣医師協会認定 獣医看護師 (動物看護師)

A. M. A. C. C. (Associate Member of Animal Care College)

——英国動物看護協会 準会員

Dip CABT. (Diploma Companion Animal Behaviour Theory)

——伴侶動物行動論に関する資格取得者

A. P. D. T. Member (Association of Pet Dog Trainers, Member)

——ペット犬調教師協会 会員

Pet Behaviour Therapist

——ペットの問題行動療法士 (Cedar Pet Behaviour Referral Clinic
http://www.cedarvets.com)

VT セミナー「英国における獣医看護の現状」(120分)にてご講演をいただいたジョー・スコット先生より、ご帰国後に当学会誌へ特別寄稿をいただきました。当日お話しされた内容を、再度わかりやすく、日本の動物看護師の皆様向けに記していただきました。

私の獣医看護師(注: 日本の動物看護師にあたるが、本稿では原文 veterinary に基づき、このように訳す。以下同)歴は21年になります。ここ10年ほどは、行動治療 (behaviour therapy) と犬の訓練 (dog training) を行ってきました。現在は、動物病院から紹介を受けた犬に対する、実践的な行動治療を行う一方で、動物病院に付属した犬のトレーニング・クラブでも忙しく働いています。

4年前に、日本からの留学生である米澤亜樹さんが、私のところに動物行動学を学びに来られました。そして

彼女は、この分野で高い技量を習得されました。彼女は いまでは、私の有能なアシスタントです。

2004年2月、私は光栄にも日本に招かれ、日本動物看護学会の例会において講演を行いました。日本は魅力的な国です。講演先ではとても素晴らしい接待を受けました。また日本では、動物病院も数多く訪問しましたが、これは大変勉強になりました(以下: 写真 は 東京都・辻動物病院にて)。機会があれば、ぜひもう一度、日本を訪れたいと思っています。

1. 英国における動物看護師の実情

英国において獣医看護（動物看護）職は、本人たちにとって大変誇り高き職業です。獣医看護師になるためには、「中等教育修了一般試験（General Certificates in Secondary Education：GCSE）」を受ける年齢、すなわち最低16歳から勉強を始めます。獣医看護を勉強するためには、このGCSEで、グレードC以上の成績を5科目以上（必須科目は英語と数学）取ることが条件となります。

GCSEで十分な成績が収められなかった場合には、「獣医看護学予備コース（pre-veterinary nursing course）」を受講する方法もあります。これは、動物病院で働きながら12カ月間で修了できるコースです（こちらは年齢不問）。

上記のどちらの進路に進んでも、その後は、「英国獣医師協会（the Royal College of Veterinary Surgeons：RCVS）」に属する動物病院で、「認可された実習コース（Approved Training Practice（ATP）」にのっとり学ぶこととなります。なおATPは、どこの動物病院にも適応されるわけではありません。

ATPの期間は2年間です。この間に、獣医看護における「職業能力評価制度（National Vocational Qualification：NVQ）」の資格を取得します。この期間中は必ず、体系的に組まれた養成講座に参加しなければなりません。これには、毎週決まった曜日に受講するタイプと、認定されている学校で1～2週間の集中講義を受けるタイプとがあります。1年目と2年目に、「症例日誌の書類作成」を作成しますが、その内容が一定の水準を満たしていなければなりません。ATPで働きながら学ぶことで、現場の実践的な知識がたくさん身につきます。

1年目の過程と「症例日誌の書類作成」の作成を終えると、選択式の筆記試験がありますが、これに合格しないと2年目に進むことができません。なお、「看護経験に関する一覧表」には、麻酔、無痛法、X線撮影法、薬理学などの広範な分野が対象となります。

2年目の過程と「症例日誌の書類作成」の作成を終えると、筆記試験に加えて、厳しい実務試験と口頭試験（3つとも国家認定試験）があり、ここで真の実力が試されます。

*

すべての試験に合格すると、英国獣医師協会（RCVS）



認定の獣医看護師として登録され、自分の名前の後に「VN（Veterinary Nurse）（注：正式な表記では、V.N.のようにドリオドを付す）」の称号をつけることが許されます。そして、よく目立つバッジと濃い緑色の看護服を身につけるので（上記写真）、ひと目でVNと分かります。なお、実習生の看護服は、緑色と白色のストライプです。

英国の獣医看護師は、その教育課程の水準の高さから、世界的に認められている存在です。この高水準を保つために目を光らせているのが英国獣医師協会（RCVS）です。RCVSは、獣医看護における法的な側面でも責任を負っています。

診療の現場で様々な処置を行えるのは、RCVSによって認定された獣医看護師だけですが、「体腔（body cavity）には触れないこと」「獣医師の監督下にあること」といった条件があります。この点に関しては、RCVSの発行規約第3部に明記されています。RCVS認定による獣医看護師が行うことのできる処置は、次のとおりです。

- 血液資料採取（採血）
- 静脈カテーテルの挿入——頸静脈を含む
- 乳腺腫瘍切除
- 歯科治療——抜歯は許可されない
- 傷口の手当——縫合を含む
- X線撮影
- 包帯をすること
- その他、獣医師の監督下で行えると判断された処置（ただし、犬猫の去勢（避妊）手術を行うことはできない）。

*

VNの資格を得た後は、さらに様々な資格試験を受けることができます。最も有名なものが、「上級獣医看護

師免許(Diploma in Advanced Veterinary Nursing)

(注: diploma(ディプロマ)とは、一定基準の技術を取得し、これを認められた者に発行される資格取得認定書のこと)

するためには、さらに2年を要します。その間に試験を受け、かつ看護などに関する知識を身につけます。その際の実験分野は、

- 内科看護学 (Medical Nursing)
- 外科看護学 (Surgical Nursing)
- 皮膚科学 (Dermatology)

です。AVNのディプロマを取得すると、自分の名前の上に、「VN Dip AVN (med) (内科)」「VN Dip AVN (surg) (外科)」「VN Dip AVN (derm) (皮膚科)」の称号をつけることが許されます。

一方、馬を扱う獣医看護師の資格を取ることでもできます。このための養成過程は2年間で、やはり最後に修了試験があります。しかし、その後さらに、馬を診療する病院で2年間働く必要があります。そうして資格を取得すると、自分の名前の上に、「EVN (Equine Veterinary Nursing)」の称号をつけることが許されます。

また、英国では2001年から、「獣医看護学の学位(獣医看護学士)取得」に関する新しいコースが開設されました。この学位は、特定の大学でのみ取得可能です。「教育修了一般試験(大学入学資格認定のために18歳で受験)」において、Aレベルを取得した生徒を対象とする4年間のコースで、獣医看護師の資格を取得した後、さらに2年間追加して学び、学位を取ることでもできます。なお、実務に従事しながらこの学位を得ることは、まだ実現されていません。

他に、「英国獣医看護協会(The British Veterinary Nursing Association: BVNA)」でも、次の分野の資格認定を行っています。

- 歯科 (Dentistry)
- 動物行動学 (Behaviour)
- 馬の看護 (Equine Nursing)
- 薬学 (Pharmacy)

*

英国における獣医看護は今も発展し続けており、多くの教育課程が考え出されています。将来は、英国獣医師協会(RCVS)の管轄から独立した機構が作られ、獣医看護の仕事は、獣医看護師自身が責任を持って管理する体制になるものと思われます。

なお、「ナース・クリニック(Nurse Clinics)(注: 動物病院内で動物看護師が中心になって行う。相談室・カウンセリングルームのこと。時に、爪切りなどといったグルーミング系統のサービスも行う)」を行うVN

も増えています。ここで扱うものには、高齢動物への医学的対処、歯科、術後対策、そして、最も多く見受けられるものに幼犬のしつけがあります。いろいろなサービスを提供するものであり、獣医看護師本人にとっても大きなやりがいとなっています。

2. 「子犬のしつけ教室」を上手に行うために

(動物病院が行う)子犬のしつけ教室には、多くの利点があります。子犬にとっての利点とは、社会性を身につけ、他の犬や子供も含めた人間に出会った時の、対処の仕方を学ぶことにあります。一方で飼主にとっても、訓練方法だけではなく、犬を飼う上で必要となる寄生虫の予防、ノミの駆除、食事の与え方などの様々な知識を得られる利点があります。飼主にとって、新しくやってきた子犬は家族の一員であり、かわいくて仕方がないことでしょう。子犬に関連するすべてのことが大切なのです。

また、将来何か問題が起きた時に、子犬のしつけ教室の当時から、自分の飼犬のことをよく知っているの、なおさら親身に相談できる人物が動物病院にいることは、飼主に大きな安心感をもたらします。

子犬のしつけ教室は、動物病院の側にとっても多くの利点があります。子犬クラスに参加した犬たちは、楽しい思い出があるので喜んで病院に来るようになるでしょう。「病院は注射や体温測定をする所」と思っている犬のように、治療を怖がったりしません。また、寄生虫駆除薬やペットフード、リード、首輪、おやつ、各種アクセサリー類などの販売を増やす機会も大幅に増えます。

しかし、最大の利点とは、飼主さんとの絆が深まることです。これが、予防接種、一般診療、各種商品の購入





といった来院の機会にもつながることでしょう。子犬のしつけ教室において、社会性を身につけさせる場は、VNにとって絶好の活躍の時です。VNの仕事のやりがいが増すだけでなく動物を扱う技能も向上します。この時は、1クラスで3匹以上の子犬を相手にして、実技、講義や訓練を行う

ので、1クラスにVNが1名では無理があります。1クラスのVNは2～3名が必要でしょう。このように、子犬のしつけ教室を行う上での課題はたくさんあります。各々を見ていきましょう。

訓練を行う場所

広い場所が必要なので、町の公民館などもよく使われます。しかし、適切に消毒された床がよいので病院が理想的でしょう。中でも待合室がよいでしょう。病院内では一番広く、床の状態も適切です。子犬を病院に馴れさせる上でも効果があります。病院見学も行われれば、犬が病院に慣れるだけでなく、飼主にも病院をよく理解してもらえることでしょう。

子犬の数

1クラス4～6匹が理想です。これより多くなると、子犬がおびえたり、飼主の積極性や注意力が薄れたりと様々な弊害が生じます。一方、教える側も、数多くの子犬をコントロールしながら大勢の人に話しかけねばならず、イライラが募ります。逆に、1クラスの子犬の数が少なすぎると、接する犬や人の多様性が乏しくなるので、社会性を身につける上で十分とは言えなくなります。

子犬の年齢

しつけ教室に通わせる際の子犬の年齢については、よく意見が分かれるところですが、1回目のワクチン接種(注:生後2週間)終了後から生後14週目までに、参加させるのがよいでしょう。この時期は、犬が社会性を身につけるために、たくさんの子犬たちや人々、子供たちと接触することが大切です。しかし、多くの飼主は、1回目のワク



チン接種を終えるのを待ちきれずに、子犬をしつけ教室に通わせてしまいます。

参加にあたっての年齢制限を、生後20週までとしている場合が多いようです。なお、同じクラス内の子犬の年齢差は2週間以内に抑えるのが理想的です。

時間

しつけ教室は各回、最大1時間がよいでしょう。また、一般に子犬が最も活動的になるのは午前中と夜の7～8時頃なので、この時間帯に合わせて行うのがよいでしょう。夜のコースは、家族が皆で一緒に参加できるので人気があります。普段の生活で子供と接することの少ない子犬の場合には、その社会化を促す上でも、学校から帰った子どもの参加できる夜のコースがよいでしょう。

コースは飼主の都合に合わせて選択できます。単発のコースもあれば継続して行われるコースもあります。全体期間は4週間が理想でしょう。4週間あれば順番待ちの時間も少なくなるので、待っている間に社会化の適齢期を過ぎてしまう心配がありません。

トレーニング中に気をつけること

子犬たちのリードを一斉に外して、時間まで自由にさ





せるわけではありません。そんなやり方をすれば、小さな子犬や神経質な子犬は、大きくなって強い子犬にいじめられて、おびえてしまいます。いじめられた子犬は恐怖を振り払うために攻撃性を身につけ、一方、いじめた子犬もこれに挑戦するため、成犬時には、どちらも問題行動の治療を受けることになってしまいます。大型の犬種でも、管理の行き届かない環境で乱暴な遊び方をさせると社交が苦手になります。

授業の手順としては、まず初めに各々の子犬の気質を見定めることです。過去の経験をよく思い出しながら、子犬同士の効果的な組合せを考えた上で、2～3頭ずつリードを外します。そして遊ばせている間は、いけない行動や、問題になりそうな行動をしないように、きちんと監視します。リードを外す時間には制限を設け、その終了時間がきたら、飼主の隣で一定の間おとなしくしているように教えます。そして飼主と話を始めるのです。ノミや寄生虫の予防、餌の与え方、グルーミング、出産、去勢（避妊）、トイレのしつけ方や嘔みつきを防ぐ方法といった、様々な悩みに答えます。

トレーニングのコツ

子犬のしつけ教室で行うことは、通常の成犬に対する訓練内容とは異なります。まだ子犬のうちは、訓練に必要な集中力も、訓練を1時間続けるだけの力も持っていません。しかし、「出来たらごほうびをあげる」ことによる条件づけ、つまり「正の強化」による訓練原則を飼主に学ばせるのに、子犬で早すぎることはありません。

最初は、単純かつ必須である「服従のためのトレーニング」、すなわち「お座り」と「伏せ」から始めるとよいでしょう。会場が病院内である場合は、実際にリードを外した後に、呼び寄せたりするのには限界がありますが、原則を知ってもらうことはできるでしょう。

子犬だけでなく飼主の能力も評価した上で、皆で一緒に訓練した方がとまどわずに済むのか、あるいは1匹（1人）ずつ順番に訓練した方が、注意力が散漫にならずに済むのかを判断します。

コース終了時には、上級クラスがあればそちらを紹介しましょう。自分たちが上級クラスを行っていない場合は、他で行われている評判のよいクラスを紹介してあげるとよいでしょう。それらの様子を実際に自分の目で見て、どんな訓練をしているかを確認した上での紹介であれば、なおよいでしょう。

問題のある犬に対して

子犬のしつけ教室では、将来を決定づける重要な時期の子犬を扱います。子犬の時期によくない体験をすると、成長してから、社会化という目的とは全く逆の問題行動を引き起こす可能性があります。この点はいくら強調しても足りないくらいです。

教える側はつねに子犬の行動に目を配り、問題は芽を出す前に摘み取らねばなりません。そのためにも、授業中は1名だけではなく複数名のスタッフを置き、子犬の過度の緊張や攻撃といった兆しを見逃さないことが重要です。折に触れて飼主へアドバイスすることも大切です。継続した相談や個別の相談に応じることも必要でしょう。

ちょっとした工夫

各回ごとに上がった話題を、プリントにして配布するとよいでしょう。飼主はトレーニングの最中、自分の子犬の様子を気にしながらスタッフと話すため、“指導内容を一言も逃さずに聞き取る”というわけにいきません。プリントにしてあげれば、飼主は後で見直して参考にすることができます。動物病院内の様々な話題なども、関連のある範囲内で記すとよいでしょう。コース終了時には、リボンの花飾りと修了証を手渡してあげると、子どもたちには特に喜ばれるでしょう。

子犬のしつけ教室を催すことは大きな喜びです。教える側にとって得ることがたくさんある一方で、授業中は隅々まで目を配らなければならない点では、責任の重い仕事といえます。犬が成長した時の性質のよし悪しは、子犬期の体験によって左右されます。子犬期に身についた問題行動を後から直すことは、子犬期に適切な行動を教えるより、はるかに難しいことなのです。（了）

注と文責：編集委員会

以下は、ジョー・スコット先生の講演時に聴講者へ配られた資料文です。前掲の特別寄稿と内容が一部重複しますが、ご参考までに掲載いたします（一部補筆）。

①英国における「V.N. (Veterinary Nurse : 獣医看護師)」資格の取得方法

一つの方法は、「中等教育修了一般試験 (General Certificates in Secondary Education : GCSE)」において、5科目がC段階あるいはそれ以上である履修証明書を取得することである（数学と英語は必須、受験年齢は16歳）。もう一つの方法は、動物病院で12ヵ月間の「獣医看護学予備コース」を修了することである（こちらは年齢不問）。

その後は、「英国獣医師協会 (Royal College of Veterinary Surgeons : RCVS)」に属する動物病院で、「認可された実習コース (Approved Training Practice (ATP))」ののっとり教育を受けねばならない。その期間は2年間である。これを終えたら、獣医看護師の国家認定試験に合格しなければならない。

ATPでは、体系的に組まれた養成講座に参加せねばならない。また、「症例日誌の書類作成」を1年目と2年目ごとにまとめあげる必要がある（合格基準に達すること）。加えて、病院で多くの臨床補佐業務を習得する。第1年目を終え、かつ1年目の「症例日誌の書類作成」を完成後、2年目が始まる前に筆記試験に合格する必要がある。

2年目を終え、かつ2年目の「症例日誌の書類作成」を完成後、筆記試験と厳しい実地試験・口頭試験（3つとも国家認定試験）を受験する。そして合格した者は、英国獣医師協会 (RCVS) に認定され、自分の名前の後に、V.N. (Veterinary Nurse : 獣医看護師 (日本の動物看護師に相当)) の肩書を用いることが許される。

②獣医看護師の資格を得ると

- ・よく目立つバッジと濃い緑色の看護服を身につけるので、ひと目でV.N. と分かる（実習生のうちは、看護服は緑色と白色のストライプ）。
- ・英国の動物看護師は、そのすぐれた教育プログラムによって、獣医看護分野のエキスパートとして世界から高く評価されている。

③英国獣医師協会 (RCVS) の発行規約 (第3部) に定められている内容

- ・免許を与えられた獣医看護師は、英国獣医師協会 (RCVS) の管轄下におかれる。RCVSが獣医看護に関する責任を負う。
- ・免許を与えられた獣医看護師だけが、獣医師の監督下で、体腔 (body cavity) に入り込まない範囲の様々な処置を行うことが許可されている。

④どのような医療行為を獣医看護師は行うことができるか？

- ・認められている医療行為の目録には次のものが含まれる——「血液資料採取 (採血)」「静脈カテーテルの挿入設置——頸静脈を含む」「乳腺腫瘍摘出」「歯科治療——抜歯は許可されない」「傷口の手当——縫合を含む」「X線撮影」「包帯をするこ

と」「その他、獣医師の監督下で行えると判断された処置 (ただし、犬猫の去勢 (避妊) 手術を行うことはできない)」。

⑤追加資格

- ・免許を与えられた獣医看護師は、他の専門分野について追加の試験を受けることができる。最も高度とみなされるのは、「上級獣医看護師免許 (Diploma in Advanced Veterinary Nursing)」である。それには以下の専門分野が含まれる——内科看護学 (Medical Nursing)、外科看護学 (Surgical Nursing)、皮膚科学 (Dermatology)。この免許取得には2年を要する。
- ・この上級免許を得た獣医看護師は、各自の氏名の後に「VN Dip AVN (med) (内科)」「VN Dip AVN (surg) (外科)」「VN Dip AVN (derm) (皮膚科)」の称号をつけることが許される。

⑥馬を扱う獣医看護師

- ・獣医看護師の免許を取得した後に、馬を扱う獣医看護師になりたい者は、さらに上位の、そのための資格を取ることができる。
- ・この資格取得のためのコースは2年間であり、修了試験もある。試験後は、馬の実地看護に携わらねばならない。
- ・この資格を得たものは、各自の氏名の後に「EVN (Equine Veterinary Nursing)」の称号をつけることが許される。

⑦獣医看護学の学位 (獣医看護学士)

- ・このためのコース (degree course) が英国で2001年より始まっている。この資格は特定の大学でのみ取得可能である。
- ・獣医看護学士の学位は、「教育修了一般試験 (General Certificate of Education : GCE) (これにより大学入学資格を認定。受験年齢は18歳)」において、A段階の履修証明書を有する者を対象とする4年間のコースである。
- ・すでにV.N. を有する者は、さらに2年間学んだ後に、この学位を取得することができる。
- ・実務に従事しながらこの学位を得る特典は、まだ実現されていない。

⑧「英国獣医看護協会 (The British Veterinary Nursing Association : BVNA)」から与えられる資格

- ・英国獣医看護協会は、次の分野の資格認定を行っている——「歯科学 (Certificate of Dentistry Veterinary Nursing 略称V.N. Cert. Dent.)」「動物行動学 (Certificate of Behaviour Veterinary Nursing 略称V.N. Cert. Beh.)」「馬の看護 (Certificate of Equine Veterinary Nursing 略称はV.N. Cert. Eq.)」「薬学 (Certificate of Pharmacy Veterinary Nursing 略称はV.N. Cert. Pharm.)」。

⑨英国における獣医看護職の将来像

英国の獣医看護は発展を続けており、多くの教育課程が行われている。最終的には獣医看護の仕事は、獣医看護師自身が責任を持って管理していく体制になるものと思われる。いずれは、英国獣医師協会 (RCVS) の管轄から離れて自立するようになるであろう。



発表後の活発な質疑風景より (第15回例会)



ピーター・ネヴィル先生、ジョー・スコット先生の講演が伝えたもの —動物看護学との接点—

筆者左

尾形庭子先生 (獣医師、どうぶつ行動クリニック・FAU)
第15回例会 教育講演・VTセミナー通訳

近年わが国でも、「犬のしつけ」や「問題行動の予防、治療」に対する関心が社会的にも高くなっていますね。これらの情報を得るため書店に行けば、多くの書籍や愛犬雑誌がありますし、インターネットのweb ページやテレビ番組も豊富に目にすることができます。

そのため、現役の動物看護師の皆さんにとって、この分野に関する適切な知識や情報を得ることは、単に個人的興味レベルに左右されるものではなく、いまでは職業的にも必要になっているといえるでしょう。

そうした中で熱心に勉強すればするほど、「先生によって方法がちがう」「本によって方針がちがう」「それぞれ言っていることが正反対で、迷ってしまう」という戸惑いも出てきているかもしれませんね。

*

このたび日本動物看護学会の第15回例会で、英国からお招きしたピーター・ネヴィル先生、ジョー・スコット先生のご講演に出席されたみなさんは、どのような印象を持たれたのでしょうか。私自身も通訳をお受けしましたので、通訳の仕方の善し悪しも含めて関心と責任を感じています。

この分野におけるご経験の長い両先生に、まず共通することは、「思いこみ」や「これまでの経験」だけに流されず、「より個体に向き合った形」で「目の前のケースに合ったアドバイス」を目指しておられることであつたと思います。

特にネヴィル先生のご講演の中では、例えば、「攻撃的だからといって、どんな犬でも去勢をすれば効果があるわけではない」とか、「犬に対して犬が攻撃的になる原因には、いろいろなケースがある」ということが例を挙げて示されていました。ご講演ではビデオも使われていたので、映像の力は先生ご自身の説明を超えて（そしてその通訳が不十分だったとしても!?）、十分なものだったのではないのでしょうか。

しかし、もし私が皆さんの立場で、講演を受けて帰宅したとしたら、翌日にはきっと「で、今日病院に来たあの子（犬）には、どう対処すればいいの?」「これから去勢って、やらない方がいいの、やった方がいいの?」と正直なところ混乱してしまったかもしれません。「これまで院長が言っていた『とりあえず、去勢してみましよう』という話はどう理解すればいいのだろう」「ジェントルリーダーはこれから必ず使った方がいいのかしら…」などなど、これまで皆さんが病院で言ってきたこと、やってきたことに対しても、少々不安になった人がいるかもしれません。

*

ここで、少し視点を変えて“例え話”で考えてみましょう。スポーツでも仕事でも何を思い浮かべてもよいのですが、わかりやすい例として、ファーストフードやファミリーレストランを取り上げます。

これらはよく「マニュアル化」の代名詞のように言われ、「アルバイトであろうと社員であろうと、同じ味を作ることができる」「どこの町でどこの店で食べても、チェーン店なら同じ味」ということになっていますね。これらのお店で初めて働く人にとって、マニュアルがあるというのは、とりあえず「牛丼とは何か」「ハンバーガーがどうやって出来上がるのか」を覚えるためには、とてもわかりやすい一定したシステムであり、理解しやすいのだと思います。

そのため、お客さんが「あのチェーン店の、あの味を食べたい」「いつでもどこでも同じ物がほしい」と思っている限り、「できるだけマニュアルに忠実に作ること」「何回でも同じ物をつくること」が望まれます。そしてそのシステムに従えば、アルバイトもすぐ一人前になり、経験の長さにかかわらず同じ物を作ることができるはずですが、つまりマニュアルがある方が、新しいことを覚える際、新人にとっては学びやすく身に付きやすいのです。

しかし動物病院という、動物を相手にし、かつ人と話す仕事をしている私たちの場合には、同じ方法を次の人にあてはめることは、皆無とってよいほど存在しませんよね。同じ量の薬を打っても、副作用が出る個体と出ない個体がありますし、同じゴールデン・レトリバーなのに、“AさんちのAちゃん”と“BさんちのBちゃん”は、性格もしつけの程度もバラバラなはずです。

そのため、行動について予防や治療を行うときには、「個々のケースに向き合えないといけない」というネヴィル先生たちのお話の持つ意味が、大きな力になってくるのだと思います。

例えばスコット先生は、パピークラスを行う時に、「子犬を全頭一斉に放したりしません」とおっしゃっていました。ここでも「個体を見る姿勢」を強調されていたのでしょう。「社会化にとって役に立つ」といわれているパピークラスですが、ある一つの方法が、すべての個体にとってよいわけではありません。パピークラスに来ること自体に、すでにストレスを感じてしまう個体もいるはず。だからこそ、「それらをじっくり見ながら調節しましょう」「個体の反応に合わせて適切な方法をとみましょう」「そのために2、3頭ずつ放すようにし、動きや反応を見落とすことによる事故を防ぎましょう」という話をされたのだと思います。

「えーっ、パピークラスって、まず犬を放すのではないの?」「社会化って、犬の自由に任せるのではないの?」といった疑問を持たれた皆さんも、このように一つ一つの意味を考えて、ネヴィル先生、スコット

先生の講演内容を振り返ってみれば、「両先生のお話は、これまで学んできたこととは正反対?」「去勢っていけないの?」などといった誤解や迷いを持つこともないと思います。

*

さて、当日の通訳者であった私としては、もちろんここに書いたような確認をするまでもなく、ご講演を聴かれた皆さんがすでに、両先生の強調されていたことを理解されたと願っています。そしてそうだとすれば、日頃から看護学で求められる「相手の気持ちを思いやる要素」「よく見て、聞いてあげる要素」は、両先生が強調された「行動学」にそのまま重なる要素であることにも、お気づきになったのではないのでしょうか。

「面倒がらず相手の様子をよく観察し、じっくり話を聞いて、動物だけでなく飼主の悩みも軽減してあげること」が基本である、動物看護師という職業の皆さんにとっては、「個体を見る」「個々のケースに合わせてアドバイスする」ことは、きっと何の抵抗もなくできるはず。そして、行動学で重要なのは、単に「ジェントルリーダーを使うべきかどうか」「去勢をするべきかどうか」なのではなく、「この子には何が必要なのか」「この子はどのように問題を起こすのか」という角度から、すなわち動物側の要素からひも解いてゆくことなのだと思われたい。ただただ認識していただけたことでしょう。

両先生のご講演が示していた「大きな力」が、わが国の動物看護師の皆さんの間で消化吸収され、自然に現場で活かされることと信じています。

両先生のご講演が示していた「大きな力」が、わが国の動物看護師の皆さんの間で消化吸収され、自然に現場で活かされることと信じています。

動物行動学を学びに英国へー私が得た貴重な経験ー

ピーター・ネヴィル先生とジョー・スコット先生のアシスタントとして、英国留学中の米澤亜樹さんも同行して来日されました。米澤さんは両先生の下で、犬の問題行動やしつけについて学んでおられます。米澤さんに、英国留学の近況などを記していただきました。



筆者最左

米澤亜樹さん
(在 英国)

私にとっては、驚くべきほど多くのことが矢継ぎ早に駈けていった。一つ一つを咀嚼する時間も余裕もなく、ただ流されないように、しがみついてゆくのが精一杯だった。

高校を卒業したあと現在の立場にいることは、奇跡に近いといえる。先生である Dr. Peter Neville や Mrs. Jo Scott に出会えただけでなく、この専門職に出会えたこと、さらには、勉強するきっかけになった

2冊の本を手にとったことなど、私の実力では到底起こり得なかった。私がしてきたことに対して、今こうして皆様に興味を持っていただいたことも、何かの縁だと私は感じる。

*

渡英してから、ランカシャー大学で語学を1年勉強した後、Cedar Veterinary HospitalのFerndown surgeryにあるCedar Behaviour Referral Clinicに、生徒兼アシスタントとして通い始めた。

主に“犬浸け”の毎日だが、ここでは猫、少数だがウサギの問題も持ち込まれる。ケースの内容や深刻度は様々で、基礎トレーニングの欠如が原因である比較的簡単な問題から、審判待ちのケースまで多様だ。

犬種の特徴だけでなく、個体の性格や、犬科の感情や情動を踏まえた診断に加え、つねに個々の飼主に適した治療法が施されるため、似ているケースはあったとしても、1つとして同じケースはありえない。また、治療にかかる時間も、30分から1時間で解決するものもあれば、1年以上の長い目で見なければならぬ場合もあったりする。ケース終了とは飼主が満足し、あるいは、こちらが自信を持って「もう大丈夫」と言えるまでとしている。

クリニックやペット・トレーニング・クラス、パピー・クラスでの私の主な役割といえば、トレーニング側のアシスタントの他に、感情や情動を量るテストのアシスタント、カウンセリングやクラスを行う上で必要な雰囲気作りである。また、犬の状態を知るため、犬とつねにコンタクトを取ることも心がけているが、私はまだ見習生徒なので、どんな時も“片手にノート”である。

時間が合えば、アジリティー（犬の障害物競走）のクラスにアシスタントとして参加したり、Mrs. Jo Scottが講師をしているBournemouth CollegeのCanine psychology（犬の心理学）のクラスに、生徒として顔を出したりもする。

他には、Dr. Peter Nevilleらが主宰するCOAPE（Centre of Applied Pet Ethology、ペットの行動学に関する研究会）の、Advanced Diploma in Practical Aspects of Companion Animal Behaviour and training（コンパニオン・アニマルの行動と訓練の、実践面におけるディプロマ〈資格〉）取得コースを履修中だ。9月中の修了予定の頃まで、山のような

課題図書といくつかの課題が私を待っている。

*

英国を学びの地に選んだことは、自分に合った選択だったと今でも思う。もう一つの選択肢であった米国での診療を、この目で見たわけではないが、英国の療法には「この症状にはこの療法」といったような、基本的な枠や範ちゅうに捕らわれることがない。

時には、米国の得意分野ともいえる薬物療法も利用されるが、食事療法も含めてそれらの療法は、個々に組み立てられたトレーニング・プログラムを補助する治療でしかない。犬科や猫科の感情や情動をもとに、彼らが見せる行動を分析し、飼主の了解の下で可能な範囲で行われる治療は、問題行動のために安楽死させられるペットを最少限に抑えることができる。

“動物の感情や情動”という考え方には、まだまだ抵抗を感じる人が多いのではないだろうか。どんな飼主も、動物たちが喜んでいる時や不安な時などを、言い当てることのできるのに、こうしたことを、公然の前ではタブーとする節があるように思う。たしかに時には“擬人化からなるミスアンダースタンディング”の危険もあるが、生き生きとした顔と大きな口に舌を垂らして、全速力であなたのもとにかけてくる犬や、餌の時間でもないのに、喉を鳴らしてあなたに擦り寄ってくる猫に、感情はないと言い切れるだろうか…。

飼主とペットを理解し、“双方が満足のゆく真中のライン”を見つける。“like a bridge”心と心を繋ぐ橋のように…それが、私がこの専門職を知った時、最初に思い浮かんだ言葉だった。

*

今回の一時帰国と講演会は発見と驚きの毎日だった。歴史や独自の文化の中から築き上げてきた、私たち日本人のペットとの付き合い方を、他国と比べて否定するのではなく、その違いからプラスになることを導入し、日本の文化に適した新しいものに発展させてゆくことが必要であると、ひしひしと感じた。

そのためには、それぞれの分野の知識と協力が不可欠だが、今回の講演会がこのような注目を集めたことは、意義のある一歩だったに違いない。機会を下さった関係者の皆様に改めて感謝いたしたい。

新しい情報を持ち帰るよろこび—学会参加の意義とは—

井上三樹子さん

(愛媛県伊予郡・くろき動物病院、「動物看護師」資格認定者No.000176)

2004年2月、東京で開催された日本動物看護学会の例会に出席しました。地方の一動物看護師としての立場から、その時の感想を書かせていただこうと思います。

*

何度か出席していつも感じるのは、「都会は進んでいるなあ」ということです。都会と地方の獣医療の差は、ある意味で年々広がるばかりのような気がします。

今回も、学習発表・一般演題共に、「歯科」「眼科」といった専門に分けられた内容が目につきました。今や獣医療も人間並みに細かな専門分野に分けて、高度な診療を行うのが当たり前の時代になってきたということでしょうか。

また、専門的になってきたのは「医療」の分野ばかりではないようです。「看護」の分野においても、オーナーさんの要求は、ずいぶん高くなっているのではないかと感じました。オーナーさんの多くは、動物看護師を人間の看護師さんと同じレベルで認識しているのでしょうか。つまり動物看護師は、「専門の教育を受け、看護の分野のみならず、動物についての専門の知識を持っていて当然である」というわけです。

考えてみれば、たしかに動物看護師はそうあってしかるべきです。獣医療が専門化、高度化してくれば、それに伴って看護師の仕事も専門化、高度化してくるのですから、それ相応な知識と技術を、きちんと身に付けておかなければなりません。

そういう意味においては、学会で発表される内容が、年々専門化、高度化しているように感じられるのは当然かも知れませんし、また、そうあるべきでしょう。

*

しかし、私のように地方のごく小さな病院に勤務する者にとっては、「専門的な話を聞いても、今すぐには役に立たない」というのが現状です。

私の住んでいる地域のオーナーさんの多くは、動物病院に対して専門的で高度な治療を望んでいるわけではありません。彼らはむしろ、「専門的に診察してもらわなくてもよい」「今の症状さえ緩和してもらえれ

ばよい」と考えているようです。

さらに私たち看護師の仕事も、専門的な技術や知識を要求されることはそれほど多くありません。病院によっては、「掃除」「洗濯」「電話番号」「会計」などが看護師の主な仕事で、「保定」「薬の調剤」「検査」「手術助手」などの仕事は、あまり期待されていないことさえあります。

そんな現状で学会に参加すると、あまりのギャップに現実感が全くなかったり、専門的な話になると内容が理解できないことさえあって、「うちの病院ではできないから、適当に聞いておこう」ということになりかねません。

けれども、ここで考えておかなければならないのは、「都会の問題は、数年後には地方の問題になる」ということなのです。

地方では現在、専門的かつ高度な獣医療はあまり求められていないのかもしれませんが、しかし、メディアが発達した現代のことですから、おそらく数年のうちに、都会のオーナーさんと同じことを望むオーナーさんが地方でも現れるはずですよ。その時に私たち病院スタッフは、慌てず騒がず、オーナーさんの要求に応えられなくてはならないのですが、はたしてそれができるのでしょうか。

*

こう考えると、学会に参加して、他の病院が取り組んでいるテーマに触れることは、たとえその時「今すぐには役に立たない」と感じたとしても、将来決して無駄になることはないと思うのです。さらに言うなら、「うちの病院とはずいぶん違うな」「なんだか難しそうだな」「うちのほうが進んでいるな」などの発見をするだけでも、よいのではないのでしょうか。

そういう観点で学会の発表を聞くと、自分には「何ができて、何がわかるのか」、あるいは「何ができなくて、何がわからないのか」ということが見えてくるはずですよ。

自分の現状を客観的に知ることは、これから私たち

が勉強していく上で最も大切なことではないでしょうか。さらに、自分が「動物看護師として何を求められているのか」も知ることができれば、自分に合った具体的なステップアップの方法を考えることができます。

私も学会に参加して「うちの病院とはずいぶん違うな」という感想を持ち、後日、病院で学会の内容について話し合いました。そこでは、学会での発表内容や私の感想に対していろいろな意見が出され、スタッフそれぞれが「自分に今何が必要か」を考えることもでき、大変有意義だったと思います。

*

私たちにとって学会への参加は、時間や費用がかかりますが、少なからず緊張もすることですが、「他の病院が

どんなことをしているのか」を知り、「何でもいいから、一つでも新しい情報（感想）を持って帰る」という気持ちで参加してみたいかがでしょうか。

《第15回例会の座長（学会外）ご担当順
杉山尚子先生（山脇学園短期大学 助教授）
実森正子先生（千葉大学文学部 行動科学科 認知情報科学講座 教授）
徳力幹彦先生（日本大学生物資源科学部 獣医学科
総合臨床獣医学研究室 教授）

ありがとうございました

（行事報告 p73へ続く）

第2・3回 動物看護師資格認定試験、行われる

わが国における、動物看護師の公的認定試験制度の確立をめざす第一歩として、日本動物看護学会は2003年より「動物看護師資格認定試験」を実施しています。これまでに計3回が行われました。各回の概要は以下のとおりです。

【第1回】

2003年9月28日（日）に東京・大阪の2会場にて実施。受験者総数275名、合格者243名、合格率88%（小数点第3位を四捨五入）。動物看護に関わる実務期間（動物看護専門教育機関での就学年数を含む）が4年以上の者を受験対象としました。

【第2回】

2004年3月6日（土）に東京・大阪の2会場にて実施。受験者113名、合格者81名、合格率72%（小数点第3位を四捨五入）。動物看護専門教育機関の新卒者（または既卒者）も受験対象に加わりました。

【第3回】

2004年9月26日（日）に東京・大阪の2会場にて実施。

受験者総数51名、合格者40名、合格率78%（小数点第3位を四捨五入）。動物看護に関わる実務期間（動物看護専門教育機関での就学年数を含む）が4年以上の者を受験対象としました。

以上3回の試験により、計364名の当学会「動物看護師」資格認定者が誕生しました。当学会がその知識と技術を認定した、適格な資質をもつ動物看護師が数多く生まれたこととなります。当資格認定者の今後の活躍が、わが国の「動物看護教育の向上ならびにカリキュラムの標準化」「動物看護師の人材育成および職域拡大」に大きく寄与するものと確信いたします。合格者の活躍が期待されています。

〈次回、第4回試験の要項をp81に掲載〉



東京会場（第2回）



大阪会場（第1回）

〈試験会場〉

東京——第1～3回 東京都武蔵野市・日本獣医畜産大学
大阪——第1回 大阪市・梅田センタービル

大阪——第2回 大阪市・天満研修センター
大阪——第3回 大阪府柏原市・関西福祉科学大学

意識レベル評価の院内統一を目指して

—動物用CS考案の試み—

清水法子¹⁾、杉崎香織²⁾、尾花礼子¹⁾、松本美里¹⁾、加藤美城子¹⁾、橋本裕紀子¹⁾
吉田沙耶子¹⁾、新宮昌美¹⁾、倉持三千恵¹⁾、國宗義雄¹⁾

Proposal for In-hospital Standardization of Criteria for Conscious Level Assessment
— Establishment of a Coma Scale (CS) for Animals —

Noriko Shimizu, Kaori Sugisaki, Reiko Obana, Misato Matsumoto, Mikiko Kato, Yukiko Hashimoto,
Sayako Yoshida, Masami Shingu, Michie Kuramochi, Yoshio Kunimune

■要約

意識レベルの低下した症例の状態を把握するためには、誰が行っても同じ手順と方法で共通認識できる指標が必要であるため、簡単でなおかつ客観的・信憑性のあるコマ・スケールを考案した。

はじめに

動物看護師が日々看護を行う中で、最も重要なことの一つに「観察」がある。しかし、「観察」を行う看護師が主観的であったり、看護師により表現方法の違いがあったりと、どんなに事細かな観察・記録を行っても統一が困難で、見解の相違を生じている状況である。特に、意識レベルが低下している症例を看護する中で「観察」は重要である。刻一刻と変化する症例の様子を統一された表現と方法で評価し、獣医師に報告を行い、治療と看護を円滑に行うことが大切であると考えられる。

ヒトの医療現場においては、患者の生命の危険度を評価するためにコマ・スケール (coma scale : CS) を用いる。代表的なコマ・スケールには、日本で考案された「ジャパン・コマ・スケール (Japan coma scale : JCS)」(表1)と、国際的に使用されている「グラスゴー・コマ・スケール (Glasgow coma scale : GCS)」(表2)の2種類がある¹⁾²⁾。

動物医療が進歩している今日、動物病院においても意識レベルの評価の統一を図り、症例の状態を院内ス

タッフ全員が把握する必要がある。簡単で、客観的・信憑性のある「動物用コマ・スケール (veterinary coma scale : VCS、以下V-CSとする。VCSではベナキャバシンドロームの略語と同一であるため、ハイフンを入れた)」を作成し、生命の危険度を直接示す尺度として、看護に役立てたいと考えた。

①材料および方法

当院に入院した犬・猫で、意識混濁(障害)と獣医師に診断された症例に実施した。ただし、生理的な老化によるいわゆる「痴呆」症例は除外した³⁾⁴⁾。

V-CSはヒト用の小児用CS(表3)¹⁾を参考に、これを動物用アレンジして作成した(表4)。

V-CSの評価は最低1日に3回行い、必要に応じて細かく判定した。続けてV-CS評価を行う場合には、睡眠と意識混濁(障害)の違いを正確に判定するため、30分以上の間隔をあげた。症例が眠っている場合や、眠っているかどうか不明な場合は、一度起こしてから15秒後に再判定した。

V-CSの判定で迷った場合は重度な方を採用することとした。V-CSの判定結果はカルテの指定場所に記入し、記載場所の統一も図った。V-CS判定は、毎回すべての看護師が同じ手順で判定を行う必要があるため、マニュアル化した手順を参照しながら実施した。

症例が暴れるなど、V-CS判定を行うのが危険な場合は口輪・エリザベスカラーなどを使用し、判定者の安全を確保することとした。それでもなお危険と判断した場合はV-CS判定を中止した。

当院の勤務システム上、夜間の観察は行えないた

1) 王寺動物病院
〒636-0012 奈良県北葛城郡王寺町本町4丁目44番7号

2) まさき動物病院
〒455-0873 愛知県名古屋港区春田野1丁目503番

表1 ジャパン・コーマ・スケール (JCS)¹⁾

<u>一桁 刺激しなくても覚醒 (開眼) している</u>	
1	意識清明とはいえない
2	見当識障害あり
3	名前、生年月日がいえない
<u>二桁 刺激すれば覚醒 (開眼) する</u>	
10	呼びかけて容易に開眼する
20	痛み刺激により開眼する
30	かろうじて開眼する
<u>三桁 刺激しても覚醒 (開眼) しない</u>	
100	はらいのける動作をする
200	手足を少し動かしたり顔をしかめる
300	全く動かない

表2 グラスゴー・コーマ・スケール (GCS)¹⁾

		スコア
1. 開眼 (eye opening)	自発的に開眼する	4
	呼びかけで開眼する	3
	痛み刺激で開眼する	2
	開眼しない	1
2. 言語反応 (verbal response)	見当識の保たれた会話	5
	会話に混乱がある	4
	混乱した発語のみ	3
	理解不能の音声のみ	2
	なし	1
3. 運動反応 (best motor response)	命令に従う	6
	合目的な運動をする	5
	逃避反応としての運動	4
	異常な屈曲反応	3
	伸展する	2
	全くなし	1

3つの項目のスコアの合計点を求め、重傷度の評価尺度とする。
最も重症——3点 最も軽症——15点

め、夜間に死亡した症例に関しては有効症例から除外した。

有効症例とされた27例について退院時点までの予後の経過を、獣医師の判断で全快例、要観察例、予後不良例、死亡例に分類し、V-CSの変化と症例の状態経過とを比較し、今回考案したV-CSの有用性について検討した。

②結果

症例の疾患別の内訳を示した(表5)。犬のてんかん様発作が最も多く見られた。その他にも、広範囲にわたる様々な疾患で意識レベルの低下が見られ、今回考案したV-CSは、脳障害に限らず広く意識レベルの低下した症例に適用することができた。

症例の予後の内訳及びV-CSの経過との一致率を

表3 関西医大小児科方式¹⁾

<u>一桁 刺激しなくとも覚醒している</u>	
1	あやすと笑う。ただし不十分で声を出して笑わない
2	あやしても笑わないが視線は合う
3	母親と視線が合わない
<u>二桁 刺激をすれば覚醒する</u>	
10	飲み物を見せると飲むとする 乳首を見せれば欲しがって吸う
20	呼びかけると開眼して目を向ける
30	呼びかけを繰り返すとかろうじて開眼する
<u>三桁 刺激をしても覚醒しない</u>	
100	はらいのける動作をする
200	手足を少し動かしたり顔をしかめる
300	まったく動かない

表4 王寺動物病院動物用CS (V-CS)

0	<ul style="list-style-type: none"> 全ての環境に反応し、自己の存在、感覚に基づく印象状態などを認識できる 近寄ると目の前の対象物を認識することが出来る 怒る、甘える、避ける、匂いにくるなどの行動を伴う場合もある 	
<u>一桁 簡単な刺激に覚醒する</u>		
→ 刺激を与えることにより V-CS 0 の反応が得られるが、刺激がなくなると、その反応は消失する		
1	容易な呼びかけに	} V-CS 0 の反応が得られる 呼びかけ：名前を呼ぶ、2回 大きな音：手をたたく、2回 ゆさぶり：腰部のあたりを前後にゆらす
2	呼びかけに加えて大きな音に	
3	体に触れてゆさぶると	
<u>二桁 刺激を与えると覚醒するが無関心状態</u>		
→ 刺激を与えると、それに対して防御姿勢を持って反応するが、認識するまでには至らない		
10	体に触れてゆさぶると	} 開眼して頭を挙げる もしくは そのどちらか 痛み刺激：末節骨を鉗子ではさむ
20	ゆさぶりに加えて大きな声(音)に	
30	痛み刺激を与えると	
<u>三桁 刺激を与えても覚醒しない</u>		
100	痛み刺激に対して払いのける	
200	痛み刺激に対して反射がある	
300	どんな刺激に対しても全く反応しない	

示した(表6)。全27症例中、V-CSの経過と症例の状態経過が一致したのは、犬19例、猫3例の合計22例であった。全快症例ではいずれもV-CS三桁ないし二桁の状態からV-CS0またはV-CS1へと意識レベルの改善がみられ、V-CSの経過と予後は完全に一致していた。

要観察症例のうち3例は、現在意識レベルに問題はない。残りの2例は退院数日後と1年後に原疾患で死亡した。予後不良の1例に関しては、退院後もV-CS

の改善は見られず飼主の希望により安楽死となった。

死亡症例については、V-CS判定を開始してからV-CSの値が悪化するか、V-CSの値が三桁のまま改善が見られずに死亡した例がほとんどであった。また、死亡症例の中には、V-CSの経過と症例の状態経過が一致しない症例が5例あった。いずれもV-CSの判定結果が、V-CS0からV-CS20の間であるにもかかわらず、数時間後には死亡するという例であり、犬4例、猫1例であった。今回考案したV-CSと現在の

表5 疾患別内訳

疾患別	犬	猫
てんかん様発作	6	0
交通事故	2	1
熱中症	2	0
伝染性疾患	2	0
肝不全	2	0
子宮蓄膿症	2	0
中毒	2	0
腎不全	1	0
尿道閉塞	0	1
咬傷	1	0
膵炎+肝炎	1	0
不明	2	2
合計	23	4

表6 症例の予後の内訳及びV-CSの経過との一致率

	犬	V-CS と 予後の一致	猫	V-CS と 予後の一致	総計
全快	5	5/5	2	2/2	7/7
要観察	5	5/5	0	—	5/5
予後不良	1	1/1	0	—	1/1
死亡	12	8/12	2	1/2	9/14
合計	23	19/23	4	3/4	22/27

運用方法では、最終判定後から次の観察に至る数時間の間に、急激な状態の悪化によって突然死亡してしまう症例の変化を捉えることはできなかった。

マニュアル化した手順でV-CSを判定することにより、看護師全員が混乱なくV-CS判定を行うことができた。臨床例におけるV-CSの評価方法を写真1に示す。

③考察

動物看護師が日々の入院看護をする上で、入院動物の観察は重要であるが、ややもすると主観的となり、表現に統一性がないなど問題が多い。動物看護師の知識や経験によっても大きなばらつきが生じ、チーム医療として取り組んでいく際の障害となっているのが現状である。症例の状態を、院内の全員が共通の尺度を持って認識するための基準が必要である。特に生命の危機に直面し、意識レベルの低下している例では、刻

一刻と変化する症例の状態を常に観察し把握しなくてはならない。ヒトの医療では意識レベルを評価するのにCSが重要視されている¹⁾²⁾。そのCSを動物医療・看護にも取り入れ、生命の危険度を直接示す尺度として日々の看護に役立てたいと考えた。

現在、動物用のCSはいくつか紹介されている(表7~8)⁵⁾⁶⁾。これらを日常の看護の中に取り入れ評価を行ってみたが、判定方法が煩雑であった。方法や手順だけでなく、例えば「動眼前庭反射」や「間欠性伸筋固縮」など、獣医学専門用語と専門的な診断が障害となり、日常の看護の中で評価を行うには無理があった。看護師である私たちにも使用でき、なおかつ大きな間違いを犯さないCSが必要である。症例の意識レベルを私たち看護師なりに評価し、獣医師と看護師が独立した立場から観察・評価を行うことが、最良のチーム医療となり得るのではないだろうか。

本稿の冒頭に概説したように、ヒトの意識障害の評



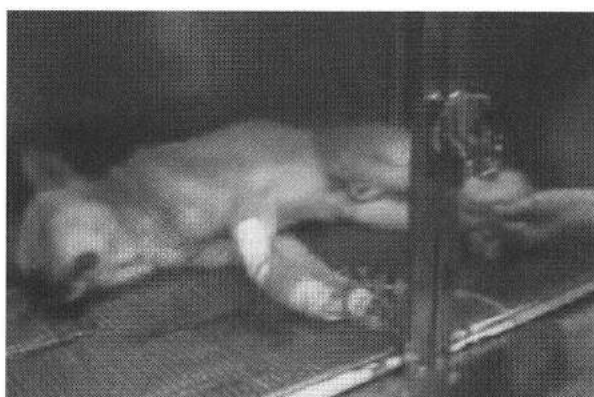
①有機リン中毒により重篤な状態であったため、すぐにエマージェンシー処置がとられた。気管チューブが挿管されている。胃洗浄を行い、その直後にV-CSの判定を行った。



②鉗子を使用して末節骨を挟み、痛み刺激を与えた。



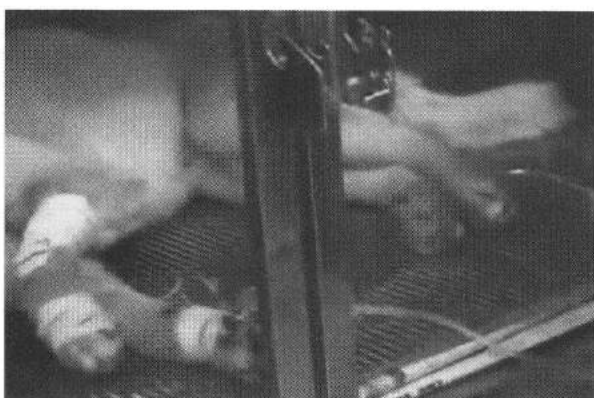
③痛み刺激を与えると、反射が見られたので、V-CS 200と判定した。V-CS 三桁の状態が丸一日続いた。



④入院第2日目。入院犬舎にてCSの判定を行った。V-CS 0から判定を開始した。この写真は、V-CS 二桁の痛み刺激を与えている様子。右側に看護師（測定者）の手が写っているが、これは鉗子にて痛み刺激を与えているところである。

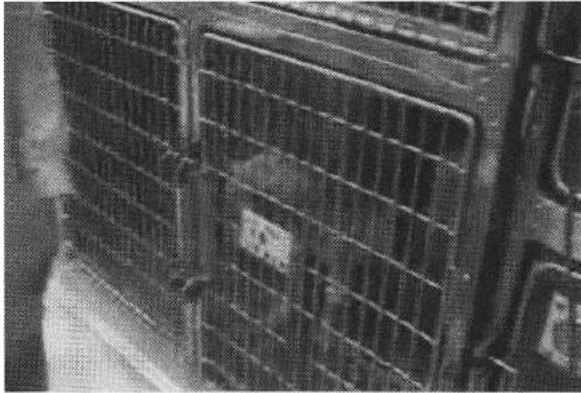


⑤痛み刺激を与えると、頭が持ち上がる。



⑥痛み刺激をやめる（写真内右の鉗子を放す）と頭が下がってしまったので、V-CS 30と判定した。V-CSの改善がみられる。

写真1 臨床例におけるV-CSの評価方法



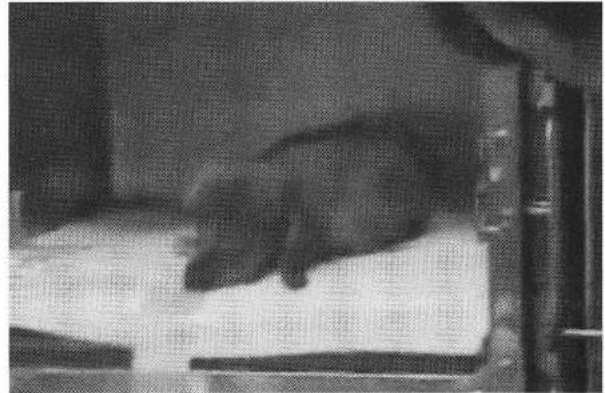
⑦入院第4日目にはV-CS0から一桁と呼びかけに反応があり、さらに回復傾向が見られた。写真は入院第5日目。犬舎の扉の前に看護師（測定者・写真左端）が近づいたりすると目で追う。



⑧扉を開けるとキョロキョロしたり、臭いを嗅ぎにきたりとV-CS0の反応を示している。



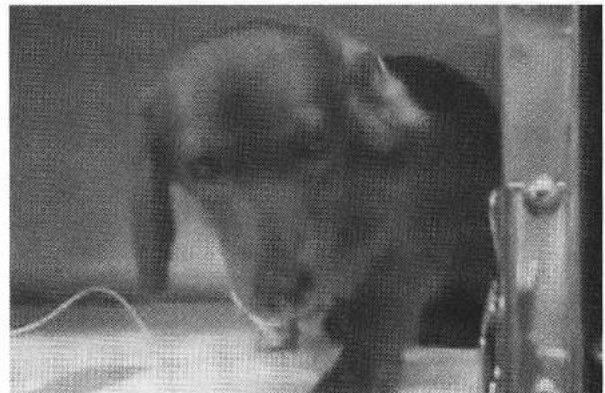
⑨入院第5日目。カメラを持って近づくと寄って来る。本症例はこの日に退院した。



⑩この症例は急性膵炎と肝炎で入院した。来院当初はV-CS二桁であった。写真は点滴を開始し、薬剤投与の後犬舎に移動し、V-CSの再判定を行っている様子。



⑪V-CS一桁の判定中で、腰を揺さぶり刺激を与えている図。揺さぶりで上体を起こし、目で認識しているのでV-CS3と判定（入院第1日目）。



⑫入院の一時間後には犬舎を開けると起立して寄ってくるV-CS0と改善が見られた（入院第1日目）。その後、意識レベルは低下することなく第6日目に退院した。

写真1 臨床例におけるV-CSの評価方法（続き）

表7 頭蓋脳外傷動物の評価法⁵⁾

運動活動	
正常な歩様と正常な反射	6
片不全麻痺、四肢不全麻痺、ないし徐皮質活動	5
横臥、間欠性伸筋固縮	4
横臥、常時伸筋固縮	3
横臥、間欠性伸筋固縮/弓なり反射	2
横臥、緊張低下、脊髓反射低下ないし消失	1
脳幹反射	
正常な PLR と正常な OVR	6
緩徐性 PLR と正常ないし低下した OVR	5
両側性/無反応性縮瞳と正常か低下した OVR	4
点状の瞳孔と低下か消失した OVR	3
一側性/無反応性散瞳と低下か消失した OVR	2
両側性/無反応性散瞳と低下か消失した OVR	1
意識程度	
ときに、生き生きとして、反応性がある	6
抑うつ/せん妄、しかし刺激に反応可能	5
鈍感/昏迷、しかし視覚刺激に反応	4
鈍感/昏迷、しかし聴覚刺激に反応	3
鈍感/昏迷、しかし侵害刺激に反応	2
昏睡—すなわち、侵害刺激に無反応	1
総点	予後
3～8	重大
9～14	良くないから注意を要するまで
15～18	良好

Dr. A. shores (Michigan state University) のものを改変
PLR = 瞳孔の光反射 OVR = 動眼前庭反射

価には JCS と GCS の2種類がある¹⁾。

JCS は分類がきわめて単純で、急性期意識障害を清明度の観点から評価するものであり、意識狭窄や意識変容といった、しばしば正常・異常の分類が困難となる表現を避け、生命の危険度を直接示す実用的な尺度として考案された。

一方、GCS は覚醒という用語の代わりに、開眼・言語反応・最良運動反応の三要素に分解して意識レベルを表現しており、これら三要素を加算しスコア表現をする。三要素のうち一つまたは二つの要素が判定できない場合には、スコア判定はできない。

例えば、気管切開や気管内挿管されている患者では言語反応が、顔面外傷によって眼瞼が腫脹している例では開眼の判定ができない、という問題点がある²⁾。

JCS や GCS は小児、特に新生児や乳幼児などの意識障害例には使用しにくいいため、ヒト用でも乳幼児向けに CS を書き換えて評価している (表3)¹⁾。乳幼児の CS 判定も評価不能な場合があり、その場合は四肢

の運動や授乳状態で判断する²⁾。

ヒト用の CS は一般的に「覚醒 = (ニアリーイコール、...) 開眼」と考えてよいが、開眼しなくても覚醒と認識できることを知る必要がある。しかし、必ずしも「開眼 = 覚醒」でないところに意識レベルの評価の難しさがあるのは否めない。「覚醒」要素はわが国で広く用いられている JCS の骨格であり、各術が覚醒障害の有無と程度をそのまま表現している²⁾。

簡単でなおかつ客観的・信憑性があり、生命の危険度を示す実用的な動物用 CS を考案することを目的として、今回は JCS 方式を採用することとした。ヒトと動物の構造上の違いは否めないため、ヒト用の CS の中でも動物の反応などと類似していると思われた、小児用の JCS を基に考案することになった¹⁾。

CS で意識障害の原因の確定はできないが、進行や改善の程度を評価することが重要である。CS の評価を行う上で心得ておかななくてはならないのが、CS とは脳疾患の重症度を把握するものではなく、あくまで

表8 COMA SCALE FOR DOGS (犬のコーマ・スケール)⁶⁾

<u>Motor response (運動反応)</u>	TOTAL
The animal walks freely (自由に歩く)	5
The animal has difficulty in walking (paretic) (歩行困難がある)(麻痺)	4
The animal cannot walk (歩行不可)	3
The animal with draws its limb after a painful stimulus (痛み刺激にその肢を引っ込める)	2
The animal has no motor response (運動の反応がない)	1
<u>Eye movement (目の動き)</u>	
The animal opens its eyes spontaneously (自発的に(自然に)開眼している)	4
The animal opens its eyes after a noise stimulus (音の刺激により開眼する)	3
The animal opens its eyes after a painful stimulus (痛み刺激により開眼する)	2
The animal does not open its eye (開眼しない)	1
<u>Food intake (食べ物の摂取)</u>	
The animal eats freely (自由に食べる)	2
The animal refuses to eat (食べることを拒否する)	1

も生命の危険度の尺度として、意識レベルを刻々と観察し判定するためのものだという事である。

症例の疾患別内訳からも分かるように、種々の疾患において意識レベルの低下が認められた。V-CSは各種疾患における意識レベルを評価するにあたり、何ら問題なく適用することができた。このことから、本V-CSは脳疾患に限らず生命の危険にさらされている、すべての症例に有用であると考えられた。本V-CSでも意識障害の原因の確定はできないが、進行や改善の程度を評価することが可能であった。そして、今回考案したV-CSを使用すれば、動物看護師にも意識レベルの評価が可能であった。

本V-CSが、症例に迫っている生命の危険度を、間違いを犯すことなく評価できているかを検討するために、V-CSの判定経過と症例の予後との一致・不一致を検討した。27症例のうち22例において、V-CSと

症例の予後が一致していた。このことから、考案したV-CSは意識レベルを評価するにあたって、おおむね大きく間違いを犯していないことが分かった。

死亡した14例のうち5例では、V-CSの値が良好の方向に経過しているにもかかわらず、死の転帰をとった。いずれも最終判定から数時間以内の突然の死亡であった。本V-CSと現在の運用方法では、急激な状態の悪化によって突然死亡してしまう症例の変化を捉えることは、できなかった。症例の変化を捉えるためには、症例の意識状態に合わせたこまめな判定が必要であることが分かった。

今回不一致の5例の状態を、例えば看護師が付きっきりで、刻々とV-CS判定をしていたならば、死亡にいたるまでの意識レベルの悪化を捉えることができたであろうと考えられるが、当院の看護システムとV-CSの運用方法を考えれば、判定から判定の間に空

白の時間が生じるのはやむを得ないと判断せざるを得ない。V-CSの判定自体に問題があったのではないと考えている。

以上のことから、今回考案したV-CSは、脳障害に限らず意識レベルの低下した多くの疾患に有用であり、症例の意識レベルの状態と予後におおむね大きな間違いを犯していないと考えられた。そして、このV-CSを運用することにより、マニュアル化した判定法で意識レベルを評価できた。このことによって、獣医師とのコミュニケーションもきわめてスムーズになり、意識レベルの低下した症例の状態を、院内の全員が同じ尺度を持って共通認識し把握することができた。この事実は、今後の看護・観察評価にとって最も重要なことであり、治療と看護の適切な実施と症例の予後にも大きく影響すると考えられる。

おわりに

V-CSを考案し、日々の看護の中で役立てようと試みた。症例ごとのV-CSの変化と経過、予後と比べてみたが、大きく間違いを犯さず、様々な疾患で意識レベルの低下している症例に有用であることが分かった。

従来煩雑なV-CSに比べ、今回考案したV-CSを使用することで、どの看護師が判定を行っても、混乱なく意識レベルの評価が行えたと同時に、院内での統一が可能であったこと、意識レベルを簡潔に評価できたことについては、看護を行う上でも大きな前進の一步であると考えられる。

今後も常に、意識とは何か、意識障害とは何かを考えながら、今回のV-CSにとどまることなくCSを改良・改善していきたい。

引用文献・参考資料

- 1) 川原千恵美 編著, 片山洋一 監修 (1999) 『脳神経外科看護のポイント220』メディカ出版
- 2) 小川彰 監修 (1999) 『ブレインナーシング1999年夏季増刊 脳神経外科救急看護マニュアル』メディカ出版
- 3) 松原哲舟 監修, 岡公代 訳者代表 『小動物内科学全書 I (第4版)』 p237, LLLセミナー
- 4) 内野富弥 (1997) 『犬の高齢化に伴う疾患』学際企画
- 5) Stephen J. Birchard, Robert G. Sherding (1997) 『サウンダーズ小動物臨床マニュアル (長谷川篤彦 監訳)』 p1245, 文永堂出版
- 6) Marios Kaoutzanis, Masayuki Yokota, Robert Sibilia and John W. Peterson : Neurologic evaluation in a canine model of single and double subarachnoid hemorrhage. *Journal of Neuroscience Methods* 50 : 301-307, 1993

動物看護師の役割の一つとしての、術前の酸素化の導入

— 7ヶ月の実施期間を終えて —

瀬戸晴代（西谷獣医科病院）

Induction of Preoperative Oxygenation as a Role of an Animal Nurse — after 7-month Practices —

Haruyo Seto

はじめに

酸素化とは、麻酔導入前に100%酸素をマスクにて3～5分間吸入させることにより、肺胞レベルでの脱窒素をはかり、かつ、機能的残気量部分も酸素で満たすことである。

麻酔導入前に十分な酸素化をはかることは、導入時や手術時の呼吸循環抑制による影響を最小限にとどめるにあたって、重要になってくる。プアリスクの患者はもちろんの事だが、ハイリスクの患者は、麻酔や手術の侵襲により全身状態が悪化し、低酸素状態に陥り急変する可能性が特に高いため、酸素化を行うことにより、万一呼吸停止しても、低酸素血症に至るまでの時間を引き延ばすことが可能になる。

それらを考慮し、当院でもより安全でスムーズな麻酔導入と覚醒をはかるため、動物看護師の役割の一つとして、術前の酸素化の導入を開始した。そして術中のモニタリングと手術の経過を麻酔記録用紙に記入し、抜管、覚醒までの時間も同時に記録した。

今回、当院で行っている術前の酸素化から手術終了までの手順の実際と、その酸素化を導入した約150症例の中より印象に残った症例を3例、酸素化できなかった症例を1例取り上げ検討し、ここに一考察として報告する。

①酸素化導入実施期間

2002（平成14）年4月1日～10月31日

②当院における術前の酸素化から手術終了までの手順の実際

- 1) 手術日の決定→事前の注意事項を説明する。
- 2) 手術当日、来院時に飼主より手術受け入れ用紙にそってお話を伺い、お預かりする。
- 3) 事前に麻酔記録用紙に、その患者の情報をカルテや手術受け入れ用紙を参考に記入しておく。
- 4) 午前の診療が終わり次第、酸素化（100%酸素使用）を開始すると同時に、麻酔記録用紙に時間と経過を記入していく（写真1）。
犬：マスクにて最低5分間行う（写真2）。
猫：マスクにてネットに入れた状態で、あるいは鎮静後、最低5分間行う。
- 5) 獣医師により麻酔前投薬の静脈注射後、気管内挿管を行ってもらい、吸入麻酔と酸素吸入を開始する。
- 6) モニターを装着し、術野の剃毛と消毒を行う。
- 7) 手術開始。

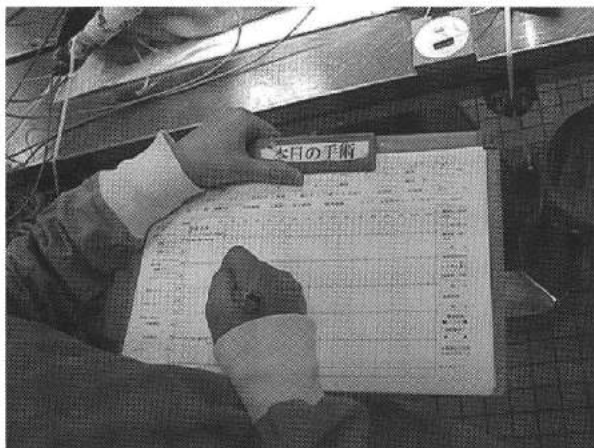


写真1 麻酔記録用紙に時間と経過を記入する



写真2 術前の酸素化を、マスクを用いて犬に最低5分間行なっている様子

8)手術終了後麻酔を切り、そのままの状態ですら約5分間酸素吸入を行う。

9)覚醒後抜管を行い、その後も注意深く観察を行う。
ここまでの作業において、ハイリスクや困難な手術の患者の飼主への説明、麻酔前投薬の投与、気管内挿管、手術は獣医師が行っている。

③症例紹介と抜管までの時間 〈酸素化導入あり〉

1)ラブラドル・レトリバー メス 3歳

BW(body weight)32.0kg 肥満気味 性格：おとなしい
骨肉腫を疑い、左後肢断脚手術を行う。血液検査上は特に大きな問題はなし。トータルコレステロールが217mg/dlと多少数値高い程度。レントゲン検査も肺転移なく問題なし。長時間の手術と出血が予想されたため、術前より止血剤入りの点滴を開始する。酸素化も嫌がらずさせてくれた。

術前の酸素化～術後の酸素吸入終了後まで、約2時間30分にも及ぶ手術だったにもかかわらず、抜管はその3分後とても早かった。

2)ミニチュア・シュナウザー メス 7歳

BW8.9kg 肥満気味 性格：おとなしい、怖がり
左臀部腫瘍切除に加えて、超音波スケーラーにてスケーリングを行う。血液検査上は特に問題はなし。レントゲン検査により、軽度の心肥大あり。酸素化は嫌がらないものの緊張のため体が硬直していた。

術前の酸素化～術後の酸素吸入終了後まで、約1時間10分ほどかかる。抜管はその3分後に行った。肥満

もあるため覚醒に時間がかかることを見込んで、術前術後の酸素化を多少長めに行った。

3)トイ・プードル メス 10歳 BW5.1kg

肥満気味 性格：おとなしい

乳腺腫瘍切除に加えてスケーラーにて歯石除去、および電気メスにて顔のイボ取りを行う。血液検査上はCBC (complete blood cell count、全血球計算〈値〉)は問題ないものの、生化学検査ではトータルコレステロールが270mg/dl、GPT (glutamic-pyruvic transaminase、グルタミン酸-ピルビン酸トランスアミナーゼ)が95と多少数値が高いため、年齢によるリスクを考慮し、術前より強肝剤を加えた点滴を開始する。X線検査は肺転移もなく問題はなし。酸素化は少し顔をそむけるも、暴れるほどではない。

術前の酸素化～術後の酸素吸入終了まで、約1時間40分ほどかかる。抜管はその1分後に行った。

〈酸素化導入なし〉

4)犬雑種 メス 1歳 BW13.4kg

肥満気味 性格：神経質、怖がり

避妊手術のみ行う。他飼主からの要望なし。酸素化は暴れてできず。興奮しているせいか手術開始後20分くらいは血圧安定せず。

麻酔前投薬から術後の酸素吸入終了まで37分かかると。麻酔時間は短時間にもかかわらず、抜管まで21分もかかった。

この4つの症例は、年齢や全身状態、疾患、手術内容、時間において全てが異なっており、血液検査上大きな問題はなかったものの、酸素化できた症例ではどれも中程度の危険性が考えられた。これらを参考に、酸素化導入ありと導入なしを比較し、酸素化の有用性ととも動物看護師の役割の一つとしての手術、麻酔看護を振り返る。

④考察

今回取り上げた症例はどれも肥満傾向にあり、症例2)～3)においては高齢であったため、特に麻酔前投薬による呼吸抑制により低酸素血症になる可能性が高く、十分な注意が必要であった。そのため、術前の酸素化を5～10分と長めに取った。

その結果、酸素化できた症例ではどれも抜管までの時間が短く、最小限のリスクで手術が行われたと考えられる。Jeff C.H.Ko¹⁾は、「酸素化をはかる方法はハイリスクの患者、特に肺機能、呼吸器系に問題のある患者に対しては、導入前に何分か酸素化をはかるのは良い方法です。導入前に肺の中を100%酸素で満たしておく、もしもその患者があとで低酸素の状態に陥った時に、幾分対処に充てる時間がつくれるので、特に呼吸器系に問題のある患者に対して、そうするのは良い方法だと思います」と述べている。

また小出²⁾は、「心肺機能が低下し、導入時に低酸素を起こす危険のある患者に対しては、きわめて有用性が高いと思います。心肺機能の正常な患者では、必ずしも必要ないかもしれませんが、やらないよりはやったほうがいいでしょうね」とも述べている。

酸素化できた症例1)~3)では、性格的にどれもある程度おとなしく、家庭でのしつけがなされており、酸素化導入時も我慢しておとなしくマスクをさせてくれたため、十分な酸素化ができ、リスクが中程度であったにもかかわらず、よい結果に終わったと考えられる。プアリスクの患者であっても最低3~5分間の酸素化は有用性が高く、必要であると思われる。

では、酸素化できなかった症例4)ではどうかというと、避妊手術を希望していたが年齢も1歳と若く、あまり来院した経験がないため、犬舎に入れられるだけでも精神的にかなりのストレスを受けていたと思われる。その結果、暴れて酸素化できず、前投薬の保定時も暴れ、興奮のため手術開始から20分くらいは血圧が安定しなかった。縫合終了を見込んで早めに麻酔を終了し、5分間の術後の酸素吸入を行うも、抜管まで21分かかった。

暴れる患者に対してはその有用的な酸素化を行えず、そのため麻酔導入時や術中のリスクが高くなると考えられる。

多川³⁾は、「避妊手術や去勢手術など健康な動物に対する麻酔管理についても、基本的には種々の疾患を持つ患者管理と異なるものではない。なぜならば、そのような概ね健康状態の良好な症例でも麻酔および手術侵襲を加える事によってホメオスターシスに破綻を生じ、致命的な経過をとる可能性を有している」また、「精神的ストレスを含む外来または入院動物に加わる様々な侵襲による影響も考慮すべきである。とく

に家庭環境で飼育されている動物にとって動物病院という異なった環境変化や注射、採血、種々の検査などを行う際の保定はそれ自体がストレスとなり、重症症例ではショック状態に陥ることもある」とも述べている。このことから、嫌がり興奮する患者に対しては無理に酸素化をせず、ある程度麻酔が導入された時点から始めるほうがよいと考えられる。

これらを踏まえると、酸素化の有用性ととも、動物看護師が積極的に関わって患者への精神的ストレスも考慮した上で、保定や酸素化ができるできないを判断し、それらが最小限のリスクで周術期を迎えられることも重要であると改めて感じた。そして術前の酸素化が行えるような犬にするためには、子犬のときから動物病院に通ったり、色々な所へ連れて行ったり、色々な人や動物に会わせたりするといった社会性や、順応性を養う環境を与え、飼主が動物の習性やその子の性格を理解し、それに合ったしつけを行ってれば、いざ入院や手術などといった場合に、十分な処置、治療を受けることができる。そしてより安静に入院生活が送れ、結果として、患者自身のストレスも最小限にとどめられると思われる。

おわりに

今回、術前の酸素化導入について検討したが、それを行うためには、患者自身の社会化や人に対する信頼感を、仔犬の時から養うことも必要であると実感した。今後も動物看護師の役割としての麻酔管理を充実させていく上で、麻酔記録用紙へのより詳細な記入と、スタッフ全員の知識と技術の向上を目標に、積極的に取り組んでいきたいと思う。

参考文献

- 1) 原 芳樹 (2001) 「“読めばわかる” 麻酔の知識」『エキスパートナーズ』2001年11月号, p19~50, 照林社
- 2) 西村亮平 (1998) 「麻酔学」『リジョンセミナー ハンドアウト』, p10・56~60, 日本動物病院福祉協会 (JAHA)

引用文献

- 1) Jeff C.H.Ko (2001) 「特集 高齢動物に対する麻酔のリスクマネジメント」『CAP』第142号, p5~11, チクサン出版社
- 2) 小出和欣 (2001) 「特集 高齢動物に対する麻酔のリスクマネジメント」『CAP』第142号, p5~11, チクサン出版社
- 3) 多川政弘 (2002) 「周術期における動物の管理」『日本臨床獣医学フォーラム予稿集』, p3-23~3-25

悪性リンパ腫の患畜における動物看護の検討

鈴木加奈子、井上五月、松本恵美、前島朱美、赤池久恵（赤池ペットクリニック）

Considerations in Animal Nursing for Malignant Lymphoma Patients

Kanako Suzuki, Satsuki Inoue, Emi Matsumoto, Akemi Maejima, Hisae Akaike

はじめに

ここ数年、動物をとりまく生活環境の変化により寿命も延び、その結果、腫瘍の患畜の来院も多くみられるようになった。

渡辺¹⁾らは「犬の全腫瘍の7~24%といわれるリンパ腫は、比較的化学療法に反応する腫瘍である」と述べている。しかしながら、全ての症例がよい反応を示すわけではなく、寛解期間の短い症例も多い。

また、鷺巣²⁾は「家族に対する精神的なサポートを無視して動物医療は成り立ちません」と述べているように、生活形態の変化に伴い、動物病院の役割として患畜の治療だけでなく生命の質を考えた医療が求められ、さらにオーナーへの精神的配慮も重大な関わりの一つとなってきた。

今回、嘔吐と多飲多尿を主訴に来院し、リンパ腫と診断され抗癌剤治療を行ったボクサーの経過と、その患畜を支えるオーナーとの精神的な援助について検討したので、ここに報告する。

■ KEY WORD

リンパ腫、クオリティーオブライフ(Q.O.L)、ペットロス

① 症例紹介

〈プロフィール〉

8歳 雄（去勢なし） ボクサー

名前：ランタ（写真1）

〈主訴〉

嘔吐、多飲多尿。

〈既往歴〉

左角膜潰瘍。

〈現病歴〉

2003（平成15）年4月7日に嘔吐と多飲多尿で来院した。その時の血液検査で高カルシウム血症と診断され、点滴治療を行ったところ数日で正常値に戻った。しかしその後、半年程でまた同じ症状で来院し、カルシウム値も高く戻っていたためリンパ腫を疑い、確定診断のため5月初めに大学病院を受診した。

大学病院にて病理検査所見上、肝リンパ節腫脹のリンパ腫と診断され、同部位の生検より悪性リンパ腫と診断された。同時に甲状腺機能低下症も指摘された。甲状腺機能低下症の補充療法とリンパ腫の治療のため、2週間に1度の検査と抗癌剤治療が開始された。その他、抗癌剤投与による副作用について対症療法と食餌管理が併用された。

同年9月5日まで、以上の治療により元気、食欲も維持され、比較的良好に保たれていた。しかしながら



写真1 患畜とそのオーナー

赤池ペットクリニック 動物看護師・トリマー
〒400-0123 山梨県甲斐市島上条746番5号



写真2 点滴来院時のバイタルチェックの様子

呼吸数、体温などの全身状態のチェックをする（写真2）。

〈教育計画〉

上記〈ケア計画〉の観察項目を説明し、家での状態をよく観察してもらい、異常を発見したら早期受診することを薦める。

＃2 激しい嘔吐や下痢などの消化管症状により食欲が低下し、体重が減少する。

〈看護目標〉

食餌の与え方などを工夫して、できるだけ食欲を確保する。

〈ケア計画〉

＃1の〈観察計画〉〈ケア計画〉に加えて、脱毛、吐気、ふらつきもチェックする。

〈教育計画〉

食欲が低下した時にはフードをドライヤーで温めたり、無塩バターを使ってソテーするなど、食餌の与え方を工夫できるようにアドバイスし、また家で異常があった場合などは、早期受診するように薦める。

＃3 治療や処置に伴う苦痛によって、身体的、精神的ストレスが生じる可能性が高い。

〈看護目標〉

観察と共に、触れたり声かけをしたりしてストレスを軽減し、快適に治療が受けられるようにする。

〈ケア計画〉

＃1の〈観察計画〉〈ケア計画〉に加えて、人や動物の出入りの多い場所や時間を避け、室内の温度などにも注意する（写真3）。



写真3 休診時間に行なっている点滴の様子

〈教育計画〉

オーナーが付き添える時はできるだけ一緒にいてもらい、声かけなどしてもらおう。

＃4 患者が悪性度の高い腫瘍のため、それを支える家族のストレスが高い。

〈看護目標〉

オーナーが患者を見守れるような形で治療を続けていけるようにする。

〈ケア計画〉

オーナーとのコミュニケーションの時間を大切に、オーナーが話しやすい状態を整え、家での状況を聞きながら、何を悩んだり困ったりしているのかを聞いて、解決への良い方向性を助言する。

患者の状態によっては、薬を一時休んだり、点滴を見合わせるなどの対応をとったので、オーナーが不安にならないようそのつど理由を説明する。

⑥実践とその考察

＃1については、抗癌剤治療による副作用に白血球減少があり、易感染性となりやすいため、点滴で来院した時に各種血液検査とバイタルチェック、全身状態の観察などを行い、結果に異常がある時は抗癌剤治療を見合わせるなどの対応をした。また、家での状態もよく観察してもらい、異常を発見した時にすぐに連絡

があったので早期対応ができた。

#2では#1と同様に検査やバイタルチェックを行い、オーナーから食欲が低下したと相談を受けた場合など、フードを温めたり、ソテーしたりと工夫できるようにアドバイスする事によって食欲を確保することができた。また、食欲が低下した時の投薬についても、タブ・ポケット®(ウォルサム)を薦める事でその問題にも対応できた。

体重というのは一番目に見えてわかりやすい体の変化であるため、毎回来院されるたびにオーナーも体重の変化をととても気にしていた。体重の減少を看護問題に取り上げた時点でオーナーに食欲が減少する可能性がある事を説明し、その時の対処法を事前に話しておく事で、実際に食欲が低下した時のオーナーの動揺や不安を取り除く事ができたと考えられるため、早い段階でオーナーに指導していく事が大切だと考えた。

#3では、患者はケージに入れられ周りに人がいなくなるとケージを噛む事があったので、スタッフ全員でこまめに声かけやふれあいを持ち、観察を心がけた。また、無理のない程度に気分転換として外での排泄を行った。その結果、ケージの中でもゆっくり眠ったりと落ち着く事ができるようになった。抗癌剤の点滴も休診時間に行い、2人の看護師が付き添うことでリラックスしながら点滴を受けられるような体制を整えることができた。

#3の〈教育計画〉では、オーナーに対して付き添ってもらえるように声かけを行う計画であったが、患者を預かる際、病院が混雑している時などスタッフの体制が整っていない事により、オーナーと落ち着いて会話をする状態が作れなかったため、その時のスタッフの状況や体制も考慮する必要があったと考える。

#4については、来院時には家での状態はどうかなど、なるべくコミュニケーションを図るように心がけ、散歩の状態や夜中には2時間おきに起きてペットシートを取り替えているなどの情報を得る事ができた。オーナー自身が、何を困っているのかなどについて話してくれる事も多く、コミュニケーションがスムーズに取れたので、こちら側からのアドバイスや声かけなどもそのつど行う事ができた。しかし、オーナーの精神状態も症状が進むにつれて不安定なところがみられ、どこまで入り込むべきか悩む事も多く、どういう気持ちであるか理解するだけで精一杯になってしまう事も

あった。

最初の段階では、オーナー自身の気持ちが強く「1日でも長く一緒にいたい」という気持ちから積極治療を望んでいた。しかし、次第に見え始めた抗癌剤の副作用などによる苦痛や病状の悪化により、オーナーから、「自分のわがままだけで治療を続けてもよいのか」という言葉も聞かれるようになった。早期から治療方針についてオーナーと話し合い、方向性について選択してきたが、再度状態の変化に伴い方向性を修正する必要が出てきた。当初、オーナーの強い希望にて開始した抗癌剤治療であったが、徐々に、動物を中心に考えたクオリティーオブライフを重視した治療へと変化していった。

オーナー自身も「本当にこれでよかったのか」と揺れ動く心境のなかで、最終的に自宅で看取りたいという心の変化が生じ、終末期を迎えるにあたって、オーナーの希望により治療を終了とし、安らかに家族にて看取る形となった。

こういった病気に直面したオーナーがペットロスに陥らないためにも、大切なペットの死を受け入れる心の準備ができるよう、スタッフ全員でペットロスに関してさらに知識を広げ、どのようなオーナーに対しても十分なサポートができるよう努力していきたい。

おわりに

今回リンパ腫という病気を動物看護師の視点から、またオーナーの気持ちにより近い視点で観察した事により、看護計画を立てそれをスタッフ全員がしっかりと把握し実行する事で、患者やそのオーナーがその時に何を必要としているのかが見えてきた。

患者の病状の変化に伴うオーナーの精神的負担は大きく、動物看護師としてオーナーの思いを受け止める場面がいくつかあった。時にはオーナーの涙する姿にどのような声かけをすべきか悩んだり、自己の無力さを痛感した事もあったが、共に悲しみを共感する事が大切だと今回を通して再確認した。そして、共に方向性を模索する事が獣医療の大切な役割と感じた。

いつかは訪れるペットの死に対して、オーナーがそれを受け入れる心の準備の段階から、「大切に心の中にしまっておこう」と思えるようになるまでの葛藤を、一緒に共有できるサポーター的役割が果たせるよう、これからの自分の課題としていきたい。

今回の症例においての主治医の意見

近年は飼養管理の向上によりペットの寿命も延び、高齢化した動物が多くなっている。このことは地方都市の当田舎町においても同様で、高齢化に伴う腫瘍のクライアントの来院も多くなった。その中でも、たびたびリンパ腫が診断される。

リンパ腫の治療は完治を目的にするものではなく、寛解期間をいかに長く保てるかという治療である。この病気は、複数の人体用抗癌剤を組み合わせるが、その中には高価な薬剤もいくつか含まれ、また、痛は消耗性疾患のため栄養価の高い療法食の給餌が望まれる。そのため、自由診療である獣医療では積極的な寛解目的治療は、オーナーの金銭的な負担も大きく、それぞれの治療プロトコルにおける生存期間中央値や、我が国の経済状況、また地方都市における動物に対する考え方等からインフォームドコンセントの結果、当院では過去において積極的治療を選択したオーナーはいなかった。

今回の症例は、院内検査の結果から、統計学上検査数値により前縦隔型リンパ腫の疑いが強くもたれ、確定診断のため大学病院を受診しリンパ腫と診断された。オーナーは治療開始当初には1日でも長く生かすための積極治療を望んでいたが、治療を重ねるにつれての診療費の多額さと、白血球減少に伴う抵抗力の低下による皮膚の糜爛^{びらん}や消化器症状の出現などで、次第に苦痛を除く治療へと考え方に変化が見え始めた。

積極的な治療から、クオリティーオブライフを重視した治療へと移行していくにつれてオーナーの心の葛藤を汲み、クライアントがよりよい状態で生活できることがすばらしいことだと理解させる事や、遠からず訪れるペットロスについても動物看護師がアドバイスできるよう、獣医師としては望む。

引用文献

- 1) 渡辺幸彦・信田卓夫 (1997) 『CAP』第101号, p16~22, チクサン出版社
- 2) 鷺巣月美 (2003) 『as』第158号, p 4~15, インターズー

参考文献

- 1) 真下忠久・松川拓哉・岩本竹弘・中西淳・下田哲也 (2000) 『infoVETS』第3巻10号, p 1~19, アニマル・メディア社
- 2) 加藤嘉太郎 (1971) 『家畜比較解剖図説 下巻 増訂改版』,

p502~503, 養賢堂

- 3) 鷺巣月美・伊藤幸代 (2000) 『ANIMAL NURSE』第16号, p 5~14, ファームプレス
- 4) Stanley H. Done 他 (2003) 『ベテリナリー・アナトミー—犬と猫の解剖カラーアトラス—』(浅利昌男 監訳, 浅利昌男・尼崎肇・市原伸恒 訳), p 6 .24~ p 6 .27・p 6 .57, インターズー

院内衛生環境調査と対策

—その5 静脈留置部位の細菌汚染に関する調査—

井上裕美子¹⁾、広瀬雅子¹⁾、川上早苗¹⁾、剣持妙子¹⁾、八十島利恵¹⁾、湯本哲夫²⁾
(湯本ペットクリニック)

Research on Clinical Hygiene Environment and Effective Actions

— Vol.5 A Study on Bacterial Contamination at the Site of Venous Catheterization —

Yumiko Inoue, Masako Hirose, Sanae Kawakami, Taeko Kenmochi, Rie Yasojima, Tetsuo Yumoto

はじめに

私たちは5年前より、「院内衛生環境調査と対策」というテーマで、院内における細菌調査をしてきました。過去の調査内容は、以下のとおりです。

その1 落下細菌の調査

その2 手・指付着細菌の調査

その3 強酸性電解水・中性電解水の調査

その4 病院スタッフの鼻腔内細菌の調査

一日の大半を過ごす職場での環境を調査したことにより、清掃の重要性や適切な手洗いの必要性を再認識し、また、院内衛生環境を継続的に調査することで、「スタッフ全員の院内感染への意識」を高めることができました。

そして今回、入院動物の静脈留置部位の感染により入院を長引かせてしまった例があったのを受けて、静脈留置部位の感染を防ぐにはどうしたらよいかについて、検討してみました。

①調査の概要

調査項目

静脈留置部位の異常について。当院では静脈留置部位の異常を、下記のように1～4にグレード分けしています。

グレード1 発赤・痒み

グレード2 腫脹・浸出液・痛み

グレード3 壊死・化膿

グレード4 潰瘍・びらん

今回は、グレード3～4の症例を中心に調査しました。

調査方法

静脈留置部位の細菌の分離と同定による。いつも通りの洗浄治療法で治癒しない症例からの菌分離を行いました。

静脈留置の際に使用する器材

バリカン・アルコール綿花・テルモサーフロー留置針・インジェクションプラグ・テルモ翼付静注針・エラストポア®・コフレックス®・イソジン®ゲル・エルタシン軟膏®、他。

②成績

症例1

日本猫 年齢：3歳齢 性別：雌

入院時期：7～8月（夏期）

入院の目的：交通事故による横隔膜ヘルニアの外科治療

横隔膜ヘルニア修復術5日後には、皮膚縫合部は良好にみえました。しかし、左前肢の静脈留置部位上部を痛がるので確認したところ、グレード4（発赤・痒み・腫脹・浸出液・痛み・壊死・化膿・潰瘍・びらん）の異常を発見しました（図1）。

留置部位の洗浄をいつも通り、強酸性電解水で1日2～3回行いました。この時、潰瘍・壊死は重度であるので、獣医師の指示に従って抗菌剤の投与を行いました。しかしながら、留置部位の筋肉・皮下組織の修

1) 湯本ペットクリニック 動物看護師

2) 湯本ペットクリニック 獣医師・病院長
〒360-0843 埼玉県熊谷市三ヶ尻2888番地



図1 グレード4の異常の様子



図2 グレード3～4の異常の様子

表1 細菌検査の結果

好気/嫌気性菌 ※培養（真菌の同定は、真菌検査報告書）、同定（目的菌は、陽性時のみ結果報告）							
1. グラム陰性桿菌 <i>Pseudomonas aeruginosa</i> （緑膿菌） 2. グラム陽性球菌 <i>Enterococcus</i> sp.（腸球菌） 3. グラム陽性球菌 <i>Staphylococcus aureus</i> （黄色ブドウ球菌）							
薬剤感受性試験 ※ S：感受性、I：中間、R：耐性、…：検査未実施							
供試薬剤名	1.緑膿菌	2.腸球菌	3.黄色ブドウ球菌	供試薬剤名	1.緑膿菌	2.腸球菌	3.黄色ブドウ球菌
PCG	…	R	R	CFPN	R	R	R
DMPPC	…	R	R	IPM/CS	S	R	R
ABPC	R	R	R	AMK	S	R	S
AMPC	R	R	R	ISP	S	R	S
C/AMPC	R	R	R	EM	R	R	R
ASPC	R	R	R	CAM	R	R	R
PIPC	S	R	R	LCM	R	R	R
CBPC	R	R	R	CLDM	R	R	R
CEZ	R	R	R	MINO	R	R	S
CEX	R	R	R	CP	R	R	I
CCL	R	R	R	VCM	…	S	S
CDX	R	R	R	FOM	R	I	R
CFDN	R	R	R	OFLX	R	R	R
CPDX	R	R	R	CPFX	R	R	R
CEMT	R	R	R	ST	R	S	R

表2 細菌検査と薬剤感受性試験の結果

好気性菌培養同定結果 グラム陽性球菌 (2+)		コアグララーゼ陰性 <i>Staphylococcus</i> (CNS)			
PCG (S)	CCL (S)	MINO (S)	ISP (S)		
ABPC (S)	C/AMPC (S)	CP (S)	CFDN (S)		
AMPC (S)	CPDX (S)	VCM (S)	CEMT (S)		
DMPPC (S)	AMK (S)	ST (S)	CPR (S)		
PIPC (S)	EM (S)	OFLX (S)	SPFX (S)		
CBPC (S)	LCM (S)	CPFX (S)	LVFX (S)		
CEZ (S)	CLDM (S)	FOM (S)	CDTR (S)		
CEX (S)	CFPN (S)	IPM/C (S)			
CDX (S)	CAM (S)	ASPC (S)			

〈表1・2の供試薬剤名(略語ABC順)〉

ABPC: アンピリン、AMK: アミカシン、AMPC: アモキシシリン、ASPC: アスポキシシリン、CAM: クラリスロマイシン、C/AMPC: クラブラン酸アモキシシリン、CBPC: カルベニシリン、CCL: セファクロル、CDTR: セフジトレン、CDX: セファドロキシム、CEMT: セフェタメト、CEX: セファレキシン、CEZ: セファゾリン、CFDN: セフジニール、CFPN: セフカペン、CP: クロラムフェニコール、CPDX: セフボドキシム、CPFX: シプロフロキサシン、CPR: セフピロム、CLDM: クリンダマイシン、DMPPC: メチシリン、EM: エリスロマイシン、FOM: ホスホマイシン、IPM/CS: イミペネム・シラスタチン、ISP: エクサシン、LCM: リンコマイシン、LVFX: レボフロキサシン、MINO: ミノサイクリン、OFLX: オフロキサシン、PCG: ペニシリンG、PIPC: ピペラシリン、ST: トリメトプリム・スルファメトサザール、SPFX: スパルフロキサシン、VCM: バンコマイシン

復は見られないため、壊死組織の外科的切除を行い、その際に菌分離を依頼しました。細菌検査により、MRSA (メチシリン耐性黄色ブドウ球菌)・多剤耐性腸球菌・多剤耐性緑膿菌が分離されました(表1)。薬剤感受性試験成績により投与薬剤を変更し治療を続けましたが、完治までにはその後1カ月間の治療が必要となってしまいました。

症例2

ゴールデン・レトリバー 年齢: 7歳齢 性別: 雄
入院時期: 3月(春期)

入院の目的: 腹腔内腫瘍(平滑筋肉腫)の外科治療
腫瘍摘出術4日後には皮膚縫合部は良好であるので仮退院としました。この時、腫瘍であったため、静脈留置針を残しての退院としました。その後、こちらの指示通り通院が行われず、結果21日後の来院となりました。そこで静脈留置部位のグレード3~4の異常を発見しました(図2)。その際に菌分離を依頼しました。細菌検査では常在菌であるコアグララーゼ陰性ブドウ球菌が分離され、薬剤感受性試験では全ての薬剤に感受性が示されました(表2)。

しかし、飼主さんの同意が得られないため、いつも通りの洗浄処置ができず、また来院も途絶えがちであったので、良くなったり悪くなったりを繰り返してしまいました。

③考察

症例1は気性の荒い猫だったため、十分な観察ができませんでした。多剤耐性菌のために治療を長引かせてしまった訳ですが、早い時期に留置部位の異常に気付いていれば、多剤耐性菌といえども十分な対応ができたのではないかと考えられます。

症例2は、当院の指示通りによる来院の必要性を、飼主さんに理解してもらえませんでした。その原因としては、来院されなかった時点での連絡不足など、当院の説明不足が考えられました。

細菌検査結果・薬剤感受性試験成績とも相対する2つの症例ですが、どちらも長期にわたる治療が必要となってしまいました。

長期治療を必要とする動物の静脈留置針は、長く入れたままになりがちです。静脈留置針は、前腕部や下腿部に施すことが多く、血管を確保するために数日間の静脈留置はやむをえない場合があります。しかし、静脈留置部位の感染が重度となった場合、この治療のため、より長い入院や通院の負担を動物や飼主にかけってしまうことになりかねません。ヒトの病院では、カテーテル留置部位からの多剤耐性菌の全身への感染が報告されています。

そこで、現状の静脈留置の際に使用している器材とその使用方法について、スタッフで話し合いました。静脈留置針を入れた動物に対しては、静脈留置部位の確

院内教育方法を考える

— 初めて患畜の情報収集をする者の、動物看護への思いを探る —

西谷孝子 (西谷獣医科病院)

From In-hospital Educational Points of View

— What Animal Nurses Think When They Gather Information on Their First Patients —

Takako Nishiya

はじめに

看護は実践の応用科学であるため、看護過程の展開能力は、臨床の現場でその大部分が啓発されることになり、院内教育のもつ意義は重要である。

当院の動物看護師およびアシスタントの特徴としては、基礎教育で動物看護教育を受けている者がいないため、当院では、その点を考慮した院内教育の目的・目標・方法を考えている。

当院における院内教育の目的は、「自らの人間性を養い自立できる」と同時に、「獣医療の進歩と当院に来院される飼主のニーズを踏まえ、各々の動物看護観に基づく知識と技術と態度を駆使していくことができる」。そして、「対象にあった看護が実践できる専門職業人としての人材を育成すること」としている。特に、看護過程が展開でき、自己の看護観が持てることを核として院内教育を実施している。

今回、動物看護に携わる者が看護過程を学習する前に、対象動物の情報収集からどのようなことを考え、感じたかなど、動物看護に対する思いが明らかになった。その結果、対象動物と看護に対する姿勢が明らかになり、今後、看護過程を学習させていく上での、院内教育指導上の示唆が得られたので報告する。

【当院の院内教育目標 (就職して2年後の目標)】

- 1) 患畜の看護上の問題をとらえ、自ら解決するために必要な基礎知識と技術と態度を身につける。
- 2) 獣医療の一員としての自己を知り、学習を生涯

続けるために、自己啓発、自己評価の態度を養い、習慣づける。

- 3) 自己の動物看護観を持つことができる。

①研究目的

初めて動物看護に携わる者が、患畜の情報収集の内容より、考えたこと・感じたことを明らかにする。その結果、院内教育指導における示唆を得る。

②研究方法

- 1) 対象：初めて動物看護に携わる、動物看護師を目指すアシスタント2名。
- 2) 当院の「思考過程用紙 (患畜の全体像をとらえ必要な看護を導き出すため、看護過程を習得する期間に、当院にて使用している記録用紙)」を用いて、一症例の情報、知識から考えたこと、感じたこと、全体を通しての感想を記入してもらおう。
- 3) 症例の情報：猫、雑種、オス、年齢1～2歳、交通事故による左側骨盤骨折、治療内容、外科手術と術後の管理、内服薬、点滴あり。
- 4) 分析方法：アシスタント2名と、当院在職4年目の動物看護師2名の記録を比較しながら、看護の対象のとらえ方の傾向を検討する。

③結果および考察

これから看護過程を学習していくアシスタント2名に、当院の「思考過程用紙」を用いて、感じたこと、考えたことを記入してもらった。そして、当院で在職4年目の動物看護師2名 (以下、看護師という) の者と比較しながら (表1)、初めて動物看護に携わる者

表1 「思考過程用紙」における記述内容の比較

項目	情報	動物看護師をめざすアシスタント(2名)	当院在職4年目の動物看護師(2名)
年齢	H13年頃の生まれ。	1歳くらいなら、成長期で好奇心が旺盛なのだろう。	一番活動的であるので、いろいろ興味を持つ時期。雑種なので、猫エイズ、猫白血病に感染している可能性のため、検査を勧める必要あり。
品種と性別	雑種(拾い猫)、オス。	——	術後創部の出血などにより、被毛の汚染が考えられるので、刺激を与えないようにしながら、湯拭きを行う。
診断名	右側仙腸骨脱臼、左側骨盤骨折。	いつ、どんな状態になるか分からないので、こまめな観察が必要。	外猫のため、術後安静が保てない可能性がある。後肢の痛覚、排泄の有無、歩様など麻痺の有無を確認していく。疼痛により、看護の際に暴れる可能性もあるので、必要であればエリザベスカラーをする。
現病歴	H14.11.13「交通事故かけんかにより動かない」と来院する。X-Pの結果即入院。	普段は家にいることが多くても、発情期近くになれば、外に出ることも多くなると思う。	外に出る習慣があるため、猫エイズ、猫白血病に感染の可能性が高い。交通事故と思われるので、他に異常がないかどうかともチェックする。尿の色、触ると痛がる場所なども確認する。膀胱破裂していないか。
生活習慣	交通事故に遭う環境あり。	外へ自由に出ている猫は、いつ何があるか分からないので、家の中で飼うようにしたらよいと思う。	退院時に飼い方指導の必要性あり。猫エイズ、猫白血病について、ワクチンの必要性について指導の必要あり。室内飼いをすすめる。
既往歴	けんかで膿瘍になって受診歴あり。H14.2去勢手術。	きちんと管理してあげようと思っても、猫自身も本能で生きているので、けんかをすべて完全に防ぐことはできないと思う。メス猫を妊娠させなくてよい。家の中でマーキングしなくなるのがよい。	猫エイズ、猫白血病の可能性ますます高い。外に出る癖がついているので、退院後自宅でケージレストでの管理は困難か。退院時に管理の仕方を説明する必要がある。
性格	以前にけんかでけがをしている。	オスだから仕方ない？ 気が荒い猫なのかな？	少し警戒する性格なため、術後の疼痛や入院中のストレスにより、暴れてしまいスムーズに治療が受けられない可能性あり。入院中のストレス、緊張により凶暴化、逃走する恐れがある。
治療方針	骨盤骨折による外科手術。	骨盤にプレートを入れる大きな手術なので、治ったらまた今までどおりに歩けるようになるんだな。手術のリスクはどのくらい高いのかな？ 高齢じゃないので大丈夫？！	骨盤骨折手術のため、手術時間が長くなると考えられ、麻酔によるリスクが高くなる。モニタリングを確実にを行い、術中の変化の早期発見に努める。低体温に注意する。術後、ヒーターが必要。
治療内容	プレート手術の術後の観察。18日退院予定。	退院後も同じようなケアを続けていけるだろうか、飼主さんが心配。	術後は安静を保つ必要があるため、ケージレストで管理する。疼痛により、食欲不振になり、回復が遅れる恐れがある。肥満のため、後肢に負担が大きく、減量の必要性がある。術後出血がなければ、レーザー治療する。また、獣医師に鎮痛剤の確認もする。
薬物	電解質の点滴20ml/h。抗生剤経口投与。	薬の名前や内容が詳しく分からないので、もっと知識を身につけなければならない。	術後痛み等により、暴れる可能性があるため、点滴治療をスムーズに受けられない可能性あり。必要ならカラーをする。外猫で、けんかなどしているため、入院のストレスにより、狂暴化する可能性があり、点滴ルートがはずれる可能性もある。暴れて投薬困難な可能性もある。副作用により、嘔吐・下痢などしていないかどうか観察が必要。
食事	家では市販の安いフード。入院中は栄養バランスのとれたフード。	フードもできれば、よいものに変更してもらえればいいのに。食事もその猫によって、よいフードを飼主さんにすすめたり、アドバイスができればいいと思う。もっと勉強が必要だ。	安いフードを長期にわたり与えていると、肝臓が悪くなったり、またオスなので、尿石症、尿路疾患を起こす可能性がある。退院時に食事指導が必要。サンプルフードを渡し説明する。肥満ぎみなので、骨盤骨折で足腰に負担がかかぬように、減量指導も必要。
書き終えた感想	——	自分の知識がほとんどないため、手術方法も分からなくて、正直難しかったです。飼主さんにきちんと説明できるようになるためには、もっと勉強しなければならないのだなあと思いました。	情報をもとに考えたこと、感じたことと言われても、今までどおりの看護上の問題点や看護として必要なことを書いてしまった。

の思いを明らかにした。

〈患者像について——表1における、年齢・品種と性別・既往歴などの項目〉

まず、アシスタント2名（以下、アシスタントという）は、「1歳くらいなら、成長期で好奇心が旺盛なのだろう」「本能で生きているので、けんかをすべて完全に防ぐことはできないと思う」。また、去勢手術をしていることで「メス猫を妊娠させなくてよい。家の中でマーキングしなくなるのがよい」と、自分なりに、猫に対する思いや去勢手術による効果などを理解している知識の範囲で答えている。つまり、情報の言葉そのものを自分なりに理解しようとしている様子が明らかになった。

しかしながら、看護師においては、「雑種なので、猫エイズ、猫白血病に感染している可能性のため、検査を勧める必要あり」「術後創部の出血などにより、被毛の汚染が考えられるので、湯拭きの必要性がある」など、情報一つ一つを言葉で理解するのではなく、この状況における患者の全体像をとらえながら、また、今後の成り行きも考えながら、一つの情報から必要な看護に結びつく内容を表現している。

〈生活像について①——表1における、生活習慣・性格などの項目〉

アシスタントは、「外へ自由に出ている猫は、いつ何があるか分からないので、家で飼うようにしたらよいと思う」。また、以前にけんかでケガをしていることに対しては、「オスだから仕方ない？ 気が荒い猫なのかな？」と今後の猫の生活を気にかけて、猫の性格的な面に触れるなど、疑問に思ったことを素直に表現している。

一方、看護師は、「少し警戒する性格なため、術後の疼痛や入院中のストレスにより、暴れてしまいスムーズに治療が受けられない可能性あり。入院中のストレス、緊張により凶暴化、逃走する恐れがある」と、性格が治療や入院に与える影響を考えている。

〈生活像について②——表1における食事の項目〉

アシスタントは、「フードもできれば、よいものに変更してもらえればいいのに」「食事もその猫によって、よいフードを飼主さんにすすめたり、アドバイス

ができればいいと思う。もっと勉強が必要だ」。普段、診療の補助に就いて獣医師の食事指導を聞いているためか、食事指導の必要性を明らかにしている。そして、自分で食事指導をするためにも知識の必要性を明らかにしている。

しかし看護師は、「退院時に食事指導が必要。サンブルフードを渡し説明する。肥満ぎみなので、骨盤骨折で足腰に負担がかからぬように、減量指導も必要」と、具体的に、いつ、どのようなことを指導すべきかまで明らかにしている。

〈病像について——表1における、診断名・現病歴・治療方針・治療内容・薬物など〉

本項についてアシスタントは、「いつ、どんな状態になるか分からないので、こまめな観察が必要」「普段は家にいることが多くても、発情期近くになれば、外に出ることも多くなると思う」「骨盤にプレートを入れる大きな手術なので、治ったらまた今までどおりに歩けるようになるんだな」「手術のリスクはどのくらい高いのかな？ 高齢じゃないので大丈夫?!」「退院後も同じ様なケアを続けていけるだろうか、飼主さんが心配」「薬の名前や内容が詳しく分からないので、もっと知識を身につけなければならない」と記している。

ここには、詳しい知識がないながらも、手術および術後の管理は大変そうであること、また、飼主によるケアは大丈夫だろうか、相手を思いやる言葉が表現されている。また、自分にとって、薬の知識も必要であることを明らかにしている。この思いこそが、看護をしていく者にとって必要であり、相手の立場にたって考えることこそ、看護の広がりに通じるように思う。

ウイーデンバック¹⁾は、「看護婦が看護しているときに何を感じ何を考えているかということは重要である。——中略——看護婦の考えたり感じたりすることは、ほとんど目に見えてこないものでもあるにかかわらず、看護実践のなかで最も重要な意味をもつ部分である」と述べている。このような思いを、指導のきっかけとして、きちんと評価し、必要な看護に結びつけるように指導したい。

「思考過程用紙」を書き終えた感想として、アシスタントは、「自分の知識がほとんどないので、むずか

しかった。飼主さんにちゃんと説明出来るようになるには、もっと勉強しなくてはならないのだと思った」の旨を述べている。知識がないことで、情報を読みとることの限界を感じ、また、自分が動物看護師として働く上での、自分自身の学習の必要性を明らかにしている。

このように、自分自身で学習の必要性を明らかにすることで、主体性のある姿勢につながると考える。見藤²⁾は、「知識や技術を与えられたままにつめ込むことの好きな学生は、就職後もそのパターンが抜けず、人に与えてもらわないと、自分から学ばないという人になりやすい。それより、いつまでも好奇心を失わず、わからないことは人に聞き、本で調べ、と自己学習できるの方が望ましいと考える。医療の世界の変化にいつもついていけるのには、人につめ込まれるのを待つ人ではむずかしい」と述べている。

このように、看護過程を学習する前に、その動物の情報に対する考えや思いを明らかにすることで、自分自身の学習の課題を明らかにし、主体性のある姿勢につなげることができる。また、その考えや思いに対する理解をきっかけとして、指導を展開することができる。そのためにも指導は個別に行い、一人一人の思いをくみ取るような院内教育が必要と考える。

おわりに

臨床の現場という現実的な制約の中で、全人的な職業である看護職を育成するには、いくつかの問題や課題がある。単に願望だけでなく、各自が院内教育の目標となる2年後の姿をめざし、やりとおすという強い意志や、その目的のためにはどうすればよいかなど、主体的な姿勢を持つことが大切となる。どのような教育方法でスタッフの能力や資質を十分にのばしていくか、今後も検討していきたい。

引用文献

- 1) アーネステイン・ウィーデンバック (1984) 『臨床看護の本質 - 患者援助の技術 -』 p21~22, 現代社
- 2) 見藤隆子 (1987) 『人を育てる看護教育』 p70, 医学書院

居心地の良い待合室作りをめざして

木村満知子¹⁾、藤田理恵子¹⁾、大谷美紀¹⁾、佐藤亜也子¹⁾、斉藤亜紀江¹⁾、深井麗子¹⁾、野原宏実¹⁾、新井陽子¹⁾、山田幸子¹⁾、松沢ふみ¹⁾、児矢野早紀¹⁾、庄子さとみ¹⁾、宮川則子¹⁾、藤田桂一²⁾ (フジタ動物病院)

To Make Our Waiting Room More Comfortable

Michiko Kimura, Rieko Fujita, Miki Otani, Ayako Sato, Akie Saito, Reiko Fukai, Hiromi Nohara, Yoko Arai, Sachiko Yamada, Fumi Matsuzawa, Saki Koyano, Satomi Syoji, Noriko Miyakawa, Keiichi Fujita

はじめに

私たちは自分が患者として病院に行く場合、長い時間を待合室で過ごすことが多い¹⁾。この際、待ち時間ができるだけ長くないことを望んでいる¹⁾一方、動物病院でも同様に、動物を連れて飼主が待合室で待つ時間が長くなる場合も多い。このことに対して、飼主が待ち時間にどのようなことを考え、何を求めているのかを知る必要がある^{2~4)}。

そこで、動物看護師として日常の仕事の1つである受付業務を行う上で、飼主にアンケート調査を実施し、その結果を反映して、できる限り居心地の良い待合室作りをめざす目的で本稿をまとめた。

①方法

1) 調査背景

当院は、獣医師12名、動物看護師13名、総スタッフ25名からなり埼玉県上尾市に位置する。病院の敷地面積は約260坪で、1階が駐車場20台、2階に待合室が位置し、階段あるいはエレベーターで2階に上がることができる。待合室の広さは約30坪、診察台6台、待ち時間は1分～2時間で平均的には約20分である。

待合室の施設環境としては、25人が座れる椅子、BGM (ホテルのロビー用の軽音楽)、テレビ (ノミ、フィラリア予防、しつけのビデオを含む)、10種類の動物一般情報誌、3社の新聞、飲み物の自動販売機、多く見られる病気に関するリーフレット類、陳列した

療法食および化粧室などを装備・設置している。

掲示物は、犬と猫の種類表、診察・トリミング料金表、フィラリア予防、混合ワクチン案内、ノミ対策、狂犬病予防注射案内、当院での学会・論文発表実績およびペットの里親募集コーナーなどである。

2) 調査対象

本アンケート調査は、当院に来院した飼主を対象に行った。平成15年8月28日(木)から9月11日(木)までの2週間の間に来院した、初診を除く181名に、著しく忙しい時間ではアンケートに関わる時間がないため、あまり忙しくない時間帯に来院された患者さん無作為に抽出して、アンケート用紙を配布し、全員から回答を得た(犬の飼主116名、猫の飼主35名、その他小動物12名、2種類以上の多頭飼い18名。そのうち男性42名、女性139名。回答率100%) (表1)。

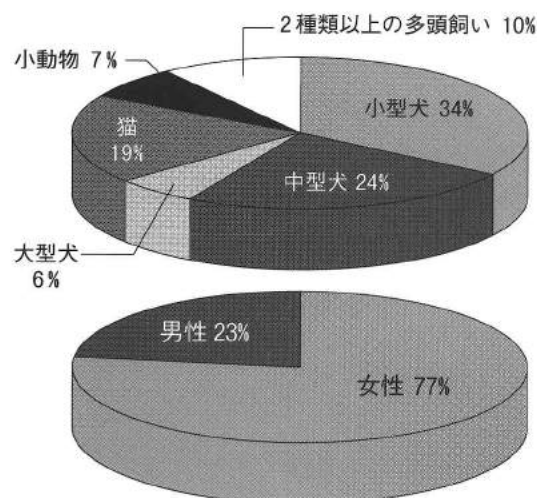


表1 調査対象動物の割合と飼主の男女割合

〒362-0074 埼玉県上尾市春日1丁目2番53号

1) フジタ動物病院 動物看護師

2) フジタ動物病院 院長・獣医師

3) 調査の手續きと内容

受付の際あるいは待ち時間に飼主にアンケート用紙を配布した。内容は、事前に動物看護師ミーティングで綿密に協議して決定したため、全員がアンケート用紙の内容を把握した。主に受付業務を行っている動物看護師が飼主に配布し、配布した動物看護師が用紙を回収した。

アンケート内容の質問1～4は「待ち時間についての意識調査」、質問5～8は「待合室についての調査、質問」、質問9～11は「具体的な要望に関する調査」、および質問12～13は「当院の設備に関する調査」とした。

なお、回答時の飼主の負担を考え、原則としてアンケート内容の記述方法は選択制としたが、一部は、当院に対する要望があった場合に記述する箇所も設けた。

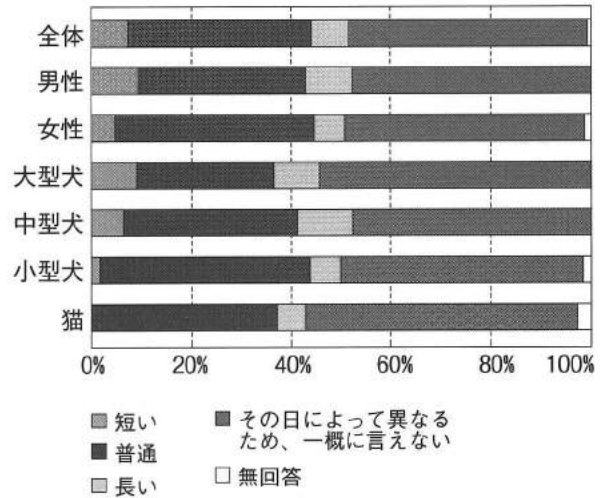
②結果

1) 各質問事項は下記のとおりであった。

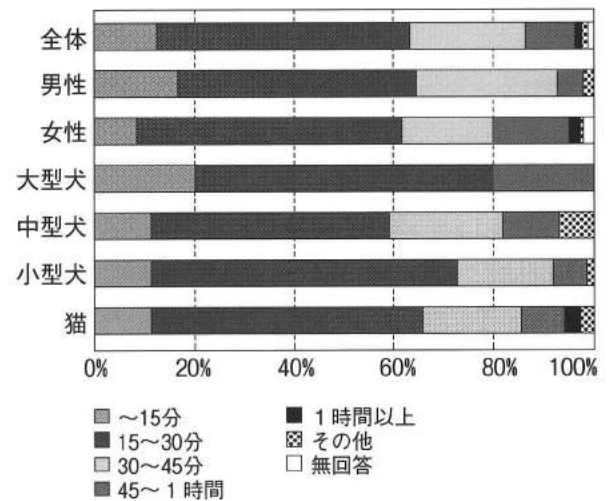
- 質問1 当院での診察および検査中の待ち時間について
- 質問2 待ち時間の限度について
- 質問3 待ち時間の過ごし方について
- 質問4 待ち時間の感じ方について
- 質問5 待ち時間に感じるスタッフの対応について
- 質問6 待合室に入った際の雰囲気について
- 質問7 スタッフの雰囲気について
- 質問8 待合室の臭いは気になるか否かについて
- 質問9-1 BGM (音楽) の有無について
- 質問9-2 BGM の種類の要望について
- 質問10 動物種類別に待合室を分けるべきか否かについて
- 質問11-1 待合室の新聞・雑誌・掲示物について
- 質問11-2 雑誌・掲示物の要望について
- 質問12 当院の受付が2階であることが不便か否かについて
- 質問13 2階の受付に上がってくる手段について

2) 各質問事項に対する回答は以下のとおりであった。

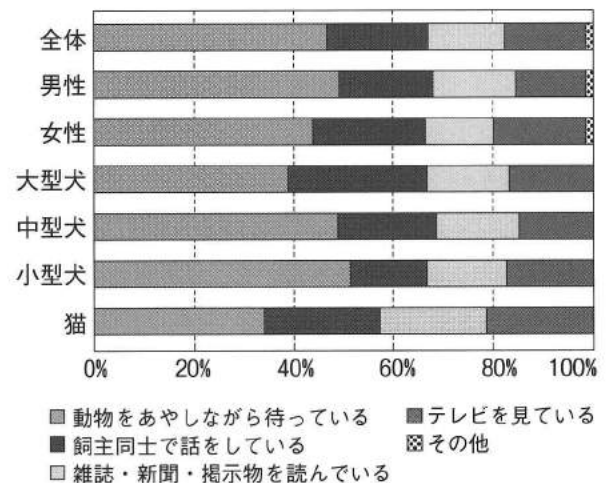
質問1 当院での診察および検査中の待ち時間の長さについて



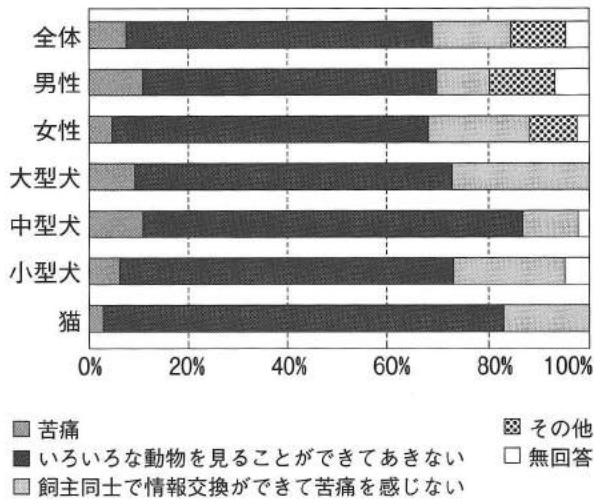
質問2 待ち時間の限度について



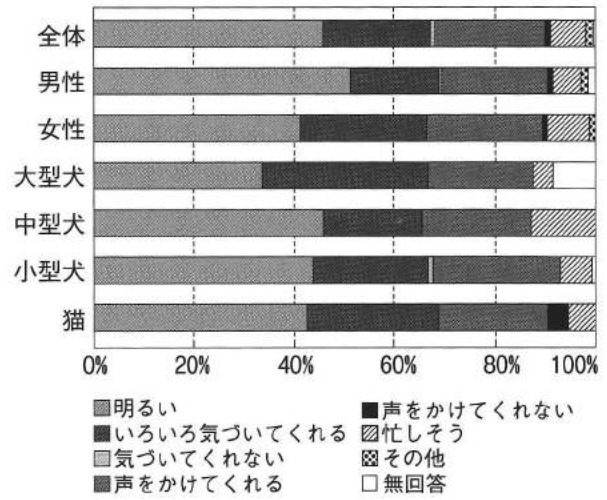
質問3 待ち時間の過ごし方について



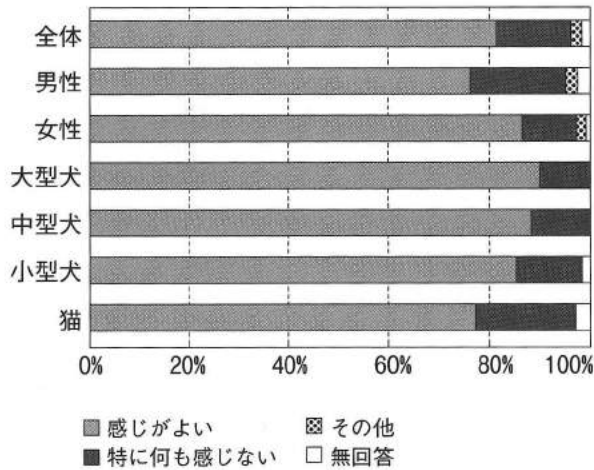
質問4 待ち時間の感じ方について



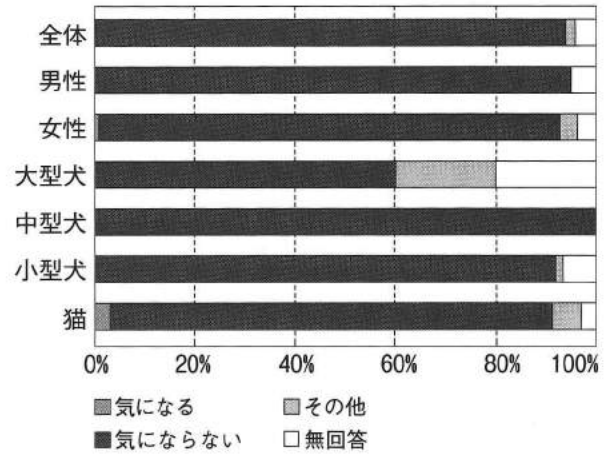
質問7 スタッフの雰囲気について



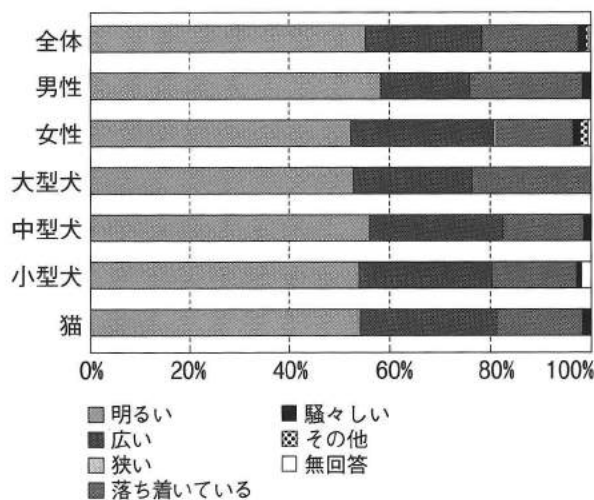
質問5 待ち時間に感じるスタッフの対応について



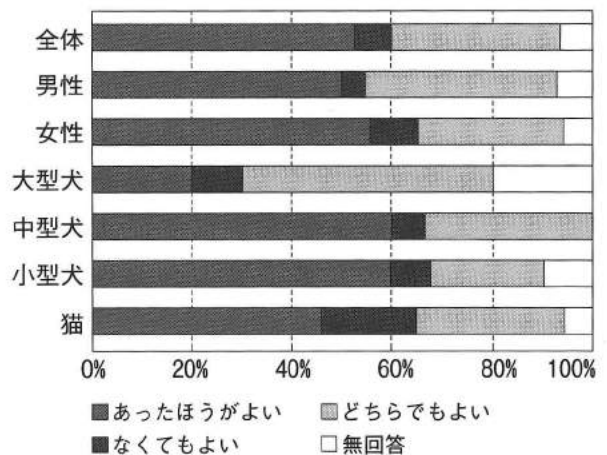
質問8 待合室の臭いは気になるか否かについて



質問6 待合室に入った際の雰囲気について



質問9-1 BGM (音楽)の有無について



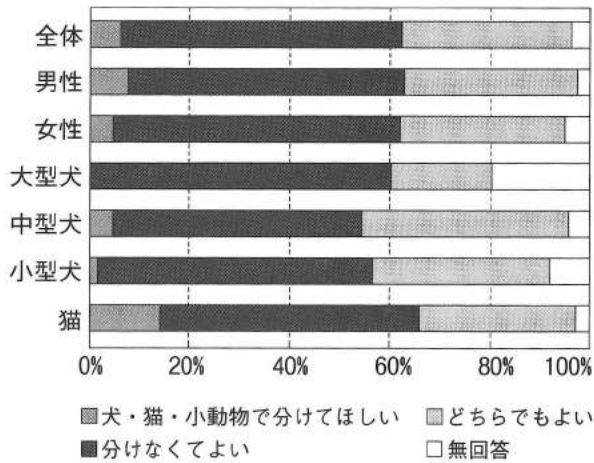
質問9-2 BGMの種類の要望について

現状のままでよい 9.7% クラシック 15.9%
 落ちついた音楽 10.6%
 ゆっくりした音楽 4.4%
 おだやかな音楽 0.9%
 癒し系の音楽 12.4% オルゴール 1.8%
 ジャズ系 0.9% 心地よい音楽 1.8%
 静かな音楽 15.9% きれいな音楽 1.8%
 声がない音楽 3.5% 最近のヒット曲 5.3%
 リラックスできる音楽 5.3%
 さわやかな音楽 0.9% 何でもよい 4.4%
 ピアノの音楽 0.9% 小鳥のさえずり 0.9%
 映画音楽 0.9% 病院にふさわしい音楽 1.8%
 であった。

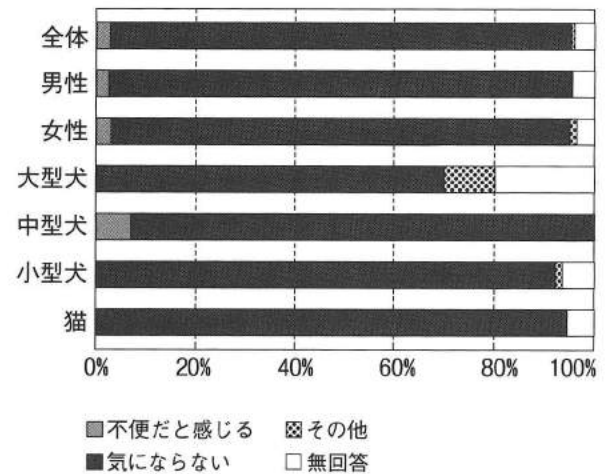
質問11-2 雑誌・展示物の要望について

猫の本・雑誌 12.9%
 動物以外の一般情報誌 16.1%
 現状のままでよい 9.8%
 犬の本・雑誌 12.9%
 手作りペットフードのレシピ 3.2%
 小動物の本・雑誌 12.9%
 しつけの本 6.5%
 ドッグラン関連の本 3.2%
 学会誌 3.2%
 ペットとの旅行・宿泊の本 6.5%
 料理の本 3.2% 犬の服のカタログ 3.2%
 地域のペット情報 3.2% 病気の本 3.2%
 であった。

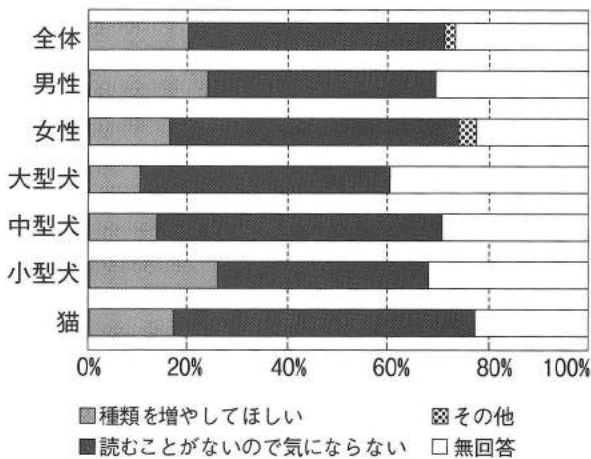
質問10 動物種類別に待合室を分けるべきか否かについて



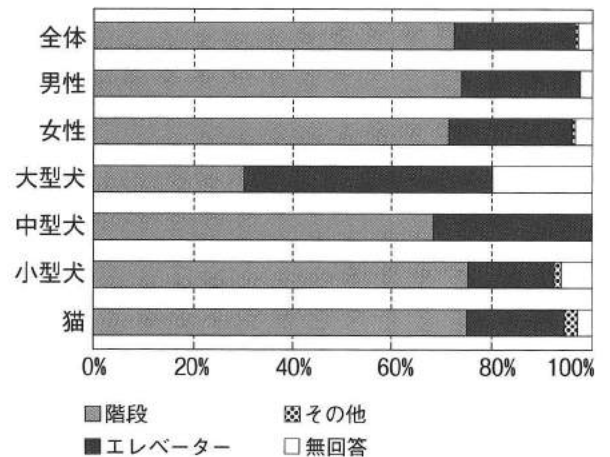
質問12 当院の受付が2階であることが不便か否かについて



質問11-1 待合室の新聞・雑誌・掲示物について



質問13 2階の受付に上がってくる手段について



③考察

今回の調査の目的は、飼主が待ち時間をどのように感じているかを、十分に理解することであった。飼主は、診察までの順番待ち、および担当獣医師待ち、そして病状により、さらに検査結果待ちとなり、そのうえ内服薬および会計待ちと、相当な時間を待合室で過ごすこととなる^{2~4)}。

このような状況の中で私たち動物看護師は、待合室で過ごす飼主にできる限り声をかけて、動物たちの様子に変化はないかなど、気を配ることは当然のこと、各々の獣医師に対しても、飼主の待ち状況を伝えるようにしている⁴⁾。しかし、待つということは、なかなか苦痛なものである。その時間を、いかに苦痛に感じさせないようにするかが、私たちにとって大きな課題であった。

このアンケートで得られた、“待つこと”に関する質問1の待ち時間の長さについては、飼主が感じ取る「普通」と「短い」をあわせた43.8%以外の「一概に言えない」と「長い」を含めると、56.2%の人は苦痛に感じることもあると解釈すべきと思われた。

さらに、質問2の待ち時間の限度については、「15分まで」と「15~30分まで」の合計63%の人が30分以上待てない結果となった。当院では診察システム上、一般血液および血液化学検査、あるいはレントゲン検査や尿検査などは、20分程度で結果が出るようになっているが、検査すべき症例が続いた場合や混雑時には約2時間かかることもある。したがって、重篤の病気や初診時に検査の必要がある場合には、担当獣医師からも飼主に対して、時間がかかる理由とその時間を、可能な限り具体的に説明するよういっそう努める必要があると認識した。

さらに現在、当院で行っていることであるが、混雑時に比較的近隣から来院している人に対しては、飼主の希望により検査結果が出るまでの間、帰宅を指示し、結果が出てから再来院するような工夫や、混雑状況を事前に電話確認した後に来院するよう促すことも必要であると思われた。

しかし、質問1の結果とは矛盾して、質問4の当院での待ち時間の感じ方では、意外にも76.6%の人が苦痛を感じない結果となった。

これらの結果から、単に待っているだけであれば苦痛を感じるが、飼主同士で話をしたり、テレビを見た

りあるいは雑誌を読んだり、動物看護師や獣医師が声をかけたりするといった環境を整えることで、多少なりとも、長く待たされたという印象を緩和する効果があったものと考えられた。

次に、質問3の待ち時間の過ごし方では、犬の飼主のうち約半数が、猫では30%強の人が、動物をあやしながら待っていることが判明した。猫の場合は、ほとんどの人が猫をキャリーバックに入れて連れて来るため、猫の飼主の70%は、待合室ですっと自分の猫を見ていなくても、他のことができる余裕が生じていると考えられた。また、その他のほとんどの人も、何もせずに単に待っているのではないことも判明した。

待合室から見たスタッフの雰囲気に関しては、“明るい、声をかけてくれる、いろいろ気づいてくれる”という回答が90%の割合で得られた。この結果により、普段私たちが心がけている“明るい声かけ”が飼主に伝わっていることが確認できた。一方、“声をかけてくれない、気づいてくれない”という回答が2%弱あった。このことから、待合室から私たちがどのように見られているのか、常に飼主の視線を意識することの大切さと、平等な心配りの重要性を再認識した。

待合室の雰囲気に関しては、80%の飼主から“明るい、広い、落ち着いている”との回答が得られた。しかし、当院の待合室は前述のごとく比較的広く設計しているが、それでも1.6%の飼主からは“騒々しい、せまい”という回答が得られた。この結果は混雑時の状況によるものと考えられた。なお、この結果に加えて、混雑時には臨時的に階段付近や1階フロアに仮設のイスを設置してほしいという要望が得られたため、改善点として2階階段付近に仮設のイスを増設した。

“待合室での臭いについて”は、約94%の飼主から“気にならない”との回答を得ているが、0.3%の飼主から“気になる”との回答があった。また、階段と1階入口付近について“臭いが気になることがある”と指摘を受けた。この結果から、「排泄物を放置されることが多々あるので、飼主のマナー不足に対する教育」「私たちの目の届かない所への配慮」および「排泄した時の対応を工夫して、清潔感のある病院作りをしていくこと」の必要性を感じた。

この対策の1つとして、院内に“おしっこ禁止マーク”の表示を増やして飼主の意識を高めるとともに、1階入口付近には“おトイレセット”と称し、排泄時にビニール袋、ペットシート、ウェットティッシュ、およびトイレトーパーを使用できるように、これらを設置した。

その他、BGMや展示物の要望などに関する調査結果からは、心地よい音楽で癒しの雰囲気大切に、生活情報誌の設置などの充実をはかる必要があると思われた¹⁾²⁾。

また、動物の種類別に待合室を分けるか否かの質問では、5.9%の人のみが分けてほしいとの結果であった。この件については、「混雑時においても大型犬や神経質な犬や猫は、受付を先に済ませた後、診察までの間、飼主が動物とともに病院の外や駐車場で待つといった工夫をする場合もあること」「キャリーバッグに入れられて来る動物も多いこと」に加えて、「犬用のリードを掛けられるフックを待合室に設置したことで、犬が動ける範囲を限定したこと」などによって、他の人や動物に迷惑をかけないように工夫した結果、待合室を分ける必要性を感じられずに済むのではないかと思われた。

最後の質問の、2階の受付まで上がってくる手段については、大型犬以外は20～30%の飼主がエレベーターを使用しているにすぎないが、大型犬では半数の飼主がエレベーターを使用している。これは、何度も病院に来るにつれて病院に来ることを躊躇^{ちゆうちゆう}する犬が多く、大型犬のリードを引いて2階に上がるのは飼主にとって負担となるので、エレベーターを使用する人が多いためではないかと思われた。

以上、これらのアンケート結果は、さらに居心地の良い待合室を作るための貴重な資料となった。この結果を踏まえ、改善すべき点は改善して、今後ともさらに飼主の立場に立って考えられる動物看護師として経験を積み、創意工夫をして、より良い環境を整えていかなければならないと感じた。

参考文献

- 1) 伊香俊子 (1989) 『患者サービス対応マニュアル』 p48～58, 産業労働出版協会
- 2) 石田卓夫・北村和泉 (2003) 「受付業務に関する知識」『動物看護師のための知っておきたい基礎知識』 p12～20, 日本動物病院福祉協会
- 3) 西川芳彦 (1999) 『動物病院の経営と設計実例集』 p22～23, 学窓社
- 4) 小宮山典寛 (1993) 『実践 AHT マニュアル講座』 p20～44, インターズー

動物介在教育 (AAE) の効果と今後の課題

—幼稚園における AAE を中心として—

木場有紀、谷田 創 (広島大学大学院 生物圏科学研究科)

Educational Benefits and Risks in Animal Assisted Education: AAE for Children in Kindergartens

Yuki Koba, Hajime Tanida

はじめに

筆者らは2004年4月に広島大学附属幼稚園の教諭らとともに、「幼稚園における動物を通じた教育のためのガイドブック」¹⁾を出版しました。この本には、全国の幼稚園を対象とした動物介在教育の実態に関するアンケート調査の結果とともに、教諭の実体験に基づく幼児と動物との触れ合いのエピソードの数々、そして動物介在教育を巡って繰り返された、私達と教諭との度重なるディスカッションの詳細がおさめられています。

ガイドブックと銘打ってはいますが、動物介在教育を行う際のマニュアル本ではありません。むしろ、幼稚園の教諭や保護者、そして動物介在教育に興味を持っておられる方々に、幼稚園の動物飼育についても一度考えていただき、独自の動物介在教育を作り出していききっかけを提供することを目指しました。

①農場の家畜達との触れ合い

筆者らは、広島大学大学院生物圏科学研究科に所属し、主に人間動物関係学、家畜行動学および家畜福祉に関する研究を行っています。私達の研究室は本研究科の附属農場にあり、春と秋には、たくさんの小学生や幼稚園児が遠足で農場を訪れます。その際に、子ども達に農場と家畜について説明しながら案内をしています。

子ども達と一緒に農場を一周しながら牛、豚、羊を見せると、子ども達は、「うわー、牛だー、大きい

ねー!」といった歓声をあげ、家畜が鳴いたり、排泄したりする度に驚いたり、笑ったり、鳴くまねをしてみたり、とても楽しそうな表情を見せてくれます。中には、餌をあげてみたい、触ってみたいなど、家畜に対してとても積極的になる子どももいます。遠足後、先生が指導したわけでもないのに、家畜の絵を熱心に描く子どもがいるという話を、幼稚園の先生から伺ったこともあります。

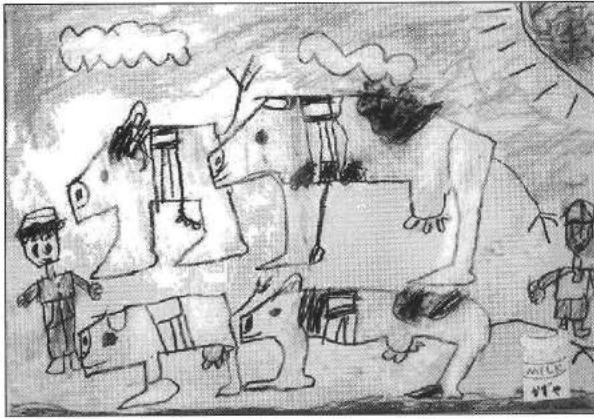
図1に園児が描いた2枚の絵を載せました。牛が人間の大人よりも大きかったという驚きや、子牛に寄り添うお母さん牛の様子が、とても生き生きと描かれていると思います。

また、図2は社会見学の一環で農場に来た、ある小学生の表情の変化をとらえたものですが、バスから降りて畜舎に入ったとたんに農場の匂いに嫌悪感を示していた子どもも、子牛を見るうちに笑顔を見せ始め、自ら手を伸ばして触れ、「また子牛さんに会いに来たい」と言うまでに変化しました。

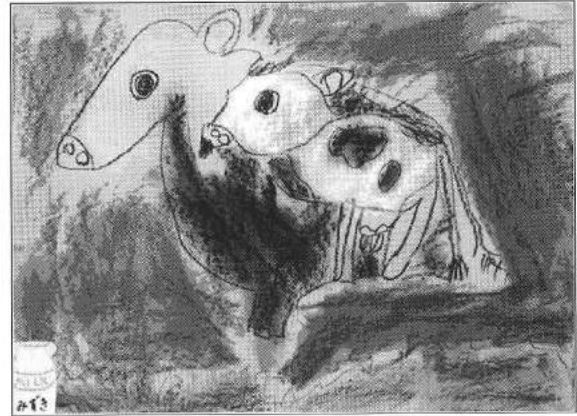
動物との触れ合いを通して子どもの芸術性が刺激されたり、対象に積極的に関わりたいという意欲が引き出されたりする現場に立ち会って、生きた動物との触れ合いが子ども達を変える力を持っていることを実感しています。

しかし、動物は子どもの好奇心や興味を引き出すだけではないという事例も見えています。バスを降りてからすぐにハンカチで鼻を押さえ、最初から最後まで鼻を塞ぎっ放しの子もいます。サイレージ(牧草地で刈り取った牧草を保管して干やすように加工した飼料)など飼料のにおいが嫌なのと牛が怖いために、畜舎に入るのを拒否したり、家畜を怖がって泣き出してしまいうちの子もいます。また、羊を山羊

広島大学大学院 生物圏科学研究科
附属瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター
〒739-8528 広島県東広島市鏡山1丁目4番4号



a

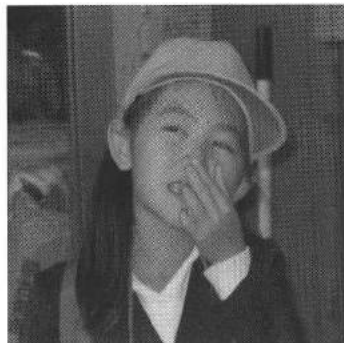


b

図1 幼稚園児による農場遠足の絵

aの絵では、線が堅く、牛の尻尾も写実的に描かれているとはとても言えないが、乳牛の特徴である大きな乳房が描かれ、牛の乳頭はきちんと4つ描かれている。大きな太陽が描き込まれていること、牛の口元が微笑んでいるように描かれていることなどから、この幼児は農場での遠足に好ましい印象を持ったものと推測される。またこの幼児は、乳牛がたくさんいたこと、それらが人間の大人よりも大きかったことに強く印象づけられていたことが伺える。

bの絵では、子牛に寄り添う母牛の様子が描かれている。子牛は見学者に囲まれることに慣れておらず、少し不安そうだが、母牛は伏臥姿勢でゆったりとくつろいでいる。しかし母牛も目は見学者から離さず、警戒は怠らない。親子牛のこういった光景は、実際に遠足の見学中によく見られるもので、子どもの鋭い観察眼に驚かされる。



a



b



c

図2 ある小学生の農場見学中の表情の変化

写真aでは、鼻をふさぎ、農場の匂いに顔をしかめている。しかしその後、写真bでは友達が子牛を撫ではじめたのにつられて、自分から手を伸ばして子牛に触れようとしている。口元や目元が徐々にほころんできているのが分かる。写真cでは、そばにいる友達と「子牛かわいいね」と言い合いながら、微笑んでいる。写真aと比較するとその表情の差は歴然である。

だと言ったり、牛を見て馬だと言ったりする子もいます。

筆者らにとっては身近な家畜も、子ども達にとっては動物園の動物と同じくらいめずらしい生き物になっているということなのでしょう。

私達の食生活に貢献し、私達が生きて行く上で欠かせない家畜という動物が、子ども達にとってはこんなにも遠い存在となってしまっていることに驚きを隠せませんが、やたらと触りたがる子ども、糞の匂いを極度に嫌う子ども、怖くて泣き出してしまう子どもの存在は、家畜に慣れていないというだけではなく、「動物の存在そのものに慣れていない」ことを表しているのではないかと思います。

②動物介在教育とは何か

まず動物介在療法と動物介在活動の定義を簡単に説明しておきます。

動物介在療法 (Animal Assisted Therapy : AAT) は、医療施設において医師など医療に関わる資格を持った人が患者の心身の機能を回復するための「治療」として、動物との触れ合いによって到達すべき治療目標を設定し、計画的に実施するものと定義されています。

一方、動物介在活動 (Animal Assisted Activity : AAA) は自由意志で参加した人々が動物との触れ合いを楽しむ活動で、ボランティアが中心となって様々な施設や屋外で動物と触れあう場を提供します。ですから、レクリエーションの要素が強く、医療行為ではありません。

AATとAAAでは定義が異なるとはいっても、動物を治療やレクリエーションの場に存在させることによって、患者または参加者の社会性の改善、精神的効用、生理的・身体機能的効用を期待している点では共通しています。動物に対するポジティブな感情を利用し、動物を媒体として患者または参加者の精神の安定化をはかり、社会参加の欲求や治りたいという意欲を引き出して効果を挙げようとする点では同じです。

そこで、AATとAAAを厳密に区別しなくてもよいのではないかという意見もありますが、AATがセラピー(療法)であると謳う以上、方法論を確立・洗練し、普及させるためには、両者を区別してそれぞれに発展させていく必要性があります。また、AAAが

レクリエーションであるからこそ、動物との触れ合いによって効果が生まれているのも事実ではないでしょうか。

動物介在教育 (Animal Assisted Education : AAE) には、「教育に動物を導入することによって、子どもの成長を促進させる」という期待がかかっているものの、AATとAAAに確立された定義や目標、効果、仕組みがあるのに比べて、何を目的に、誰が、どのように行うのか、といったことは現時点では明確に定義されていません。

それを象徴するように、AAEと呼ばれている活動には、様々な活動があります。

まず真っ先に思い浮かぶのは、幼稚園や小学校などの教育施設で動物を飼い、世話をするという活動でしょう。また、教育施設に移動動物園や動物を伴ったボランティアが訪問し、動物愛護教育や動物との付き合い方をレクチャーする活動もあります。

海外では、刑務所での受刑者の再教育の一環として行われることもあります。アメリカのシアトルの刑務所では、捨てられて飼主のいない犬の世話を受刑者に行わせ、家庭向きのペットにしたり、介助犬や聴導犬に訓練したりするプログラムを実施しています。この教育を通して受刑者は、生命に対する慈しみの心や、社会の役に立つことができたという自尊心を取り戻すことができるとされています。

反社会的青少年の更生教育プログラムの一環としてAAEが用いられることもあります。アメリカのニューヨーク郊外にあるグリーンチムニーズは、暴力行為などの反社会的な行動を繰り返す子どもたちの寄宿施設です。

ここでは家畜の飼育や、傷付いた野生動物の治療や世話をさせることによって、情緒の安定や社会復帰の意欲や自信を取り戻させる教育を行っています。グリーンチムニーズには児童臨床心理学者、セラピスト、特殊児童教育の専門家、野生動物保護士、獣医師、動物飼育の専門家などがいてAAEに関わっています。

また最近では、動物園でのAAEも行われています。動物を展示する場所としてだけではなく、動物に関する知識、自然の歴史、自然保護の大切さなどを学べる場所にしていこうという取り組みです。海外の動物園には動物園教育専門の部署を設置しているところもあります。

さらに近年、BSE (牛海綿状脳症) や畜産食品の表示偽装事件など、食をめぐる問題が頻発していることから、食と農を一体化して教える食農教育が注目されており、全国各地の農場で教育ファームなどの活動が定着し始めています。これは、子どもたちに畜産の現場を肌で体験させるということが主目的となっています。

このように、動物介在教育の形態や目的、手法、効果、教育の受け手、動物介在教育を行う人たちの主体やその資格も様々なのが現状です。

本稿では、特に幼稚園における動物介在教育についてお話ししますが、まず、以下の3点について整理しておくことが必要であると思われます。

- 1) 今何故、動物介在教育が必要なのか？
- 2) 日本における動物介在教育の目標および効果とは？
- 3) 動物介在教育の担い手は誰か？

1) 今何故、動物介在教育が必要なのか？

筆者らが通っていた幼稚園と小学校には、飼育小屋があったことを今でも記憶しています。おそらく読者の大部分が幼稚園や小学校で動物飼育を経験しているのではないのでしょうか？

わが国の幼稚園や小学校における動物飼育はとりたてて珍しいことではありません。その歴史は古く、例えば、旧文部省発刊の『幼稚園教育百年史』には、幼稚園の動物飼育は70年以上前の1926 (大正15、昭和元) 年ごろにすでに行われていたという記録があります²⁾³⁾。広島大学附属三原幼稚園でも、1950 (昭和25) 年の創立当初から生き物を飼育していたということが、三原幼稚園研究紀要に記されています⁴⁾。

このように、わが国の教育機関において動物との触れ合いを教育に活かそうとする試みは、動物介在教育という言葉が誕生する以前から行われてきました。それでは、従来の教育機関における動物飼育と、本稿で取り上げた動物介在教育 (AAE) とは同じものなのでしょうか？ 何故、動物介在教育という言葉が生まれ、注目を浴びているのでしょうか？

その背景には、AAA、AAT が確立されてきたこと、Humane Education (人道教育、愛護教育) の必要性が見直され始めたこと、動物が子どもの精神的発達に

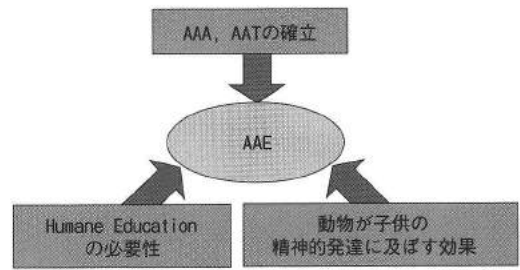


図3 AAEが注目される背景にある3つの要因

及ぼす効果が明らかになってきたこと、の3つの要因が考えられます (図3)。

まず、AAAやAATが定着するに従い、この活動や療法に参加した子どもたちが見せる劇的な変化が広く認識されるようになり、教育関係者の関心をひきつけるようになりました。

AATの先駆者として名高いB.M. Levinsonが、子どもの心理療法において動物が大きな役割を果たすことに偶然気づき、「ペットによる子どものための心理療法」に関する研究と実践に身を投じたのは有名な話です⁵⁾。彼は、長期に渡るカウンセリングでは改善が見られなかった内向的な少年が、偶然診察室に居合わせたLevinsonの愛犬と触れ合うことによって、治療者に対しても心を開くようになり、治療が劇的に進展するという経験をしたのです (しかし彼が、「動物は子どもにとって魔法の水ではない」と警告していることも付け加えておきます)。

また、1980年代のアメリカおよびイギリスでHumane Education (人道教育、愛護教育) を見直す動きが始まったことも関係していると思われます。子ども時代に動物虐待を繰り返していると、将来、暴力的犯罪を犯したり、人に対しても攻撃的になる可能性が高くなるなど、動物虐待と犯罪との関連を示す研究が報告され始めたのを受けて、犯罪抑止のためには、他の生命に対する共感や愛護の念を社会全体に広く教育していく、愛護教育 (Humane Education) が必要であり、なかでも子どものうちから、動物を愛護する気持ちを持たせるように教育することが重要であると考えられるようになりました。

日本でも動物を通した愛護教育、道徳教育に関する関心は高まっています。

1997 (平成9) 年の警察白書によれば、刑法犯少年の補導人員は約15万人に達しており (前年比14%増)、

犯行内容の粗暴化、薬物乱用者の増加、低年齢化が著しく進んでいることが報告されています。また、宮崎勤事件、酒鬼薔薇聖斗事件、ごく最近で言えば長崎の4歳児連れ去り事件でも、犯行を犯す以前に、動物の虐待や惨殺を習慣的に行っていたことがメディアを騒がせました。

中央教育審議会が1998（平成10）年に発表した「新しい時代を拓く心を育てるために」と題した答申では、「子どもの心を育てる教育」を行うことが急務であり、その具体策の一つとして、「生き物との触れ合いを意図的に設け、生き物との触れ合いを通して命の大切さを実感させよう」との提言がなされています。

しかし、空前のペットブームが起こっている昨今にあっても、家庭でのペット飼育率は36.6%に留まっています（内閣府：「動物愛護に関する世論調査」2003年⁶⁾）。また、自然環境の減少も伴って、家庭や自然の中で動物との触れ合いを通じた教育を行うことは難しいのが現状です。

そこで、幼稚園や小学校などの教育施設において動物を飼育し、子ども達に飼育体験や触れ合い体験の機会を与える「動物介在教育」が注目を集めているのです。7～12歳の子どもの持つ保護者世帯におけるペット飼育率が47.7%であるのに対して、6歳以下の幼児を持つ保護者世帯における動物飼育率は27.6%と非常に低いこともあって⁷⁾、幼稚園における動物介在教育は、動物と日常的に触れ合い、心を育む礎を得る機会として重要であると考えられます。

さらに、動物を飼育することが子ども達の精神的発達を高めるという研究結果が最近数多く報告されるようになってきました。

現在のところは、教育機関よりも、家庭でのペット飼育による効果について調査したものが多いたのですが、3～6歳の子どもの対象とした調査では、家庭でペットを飼育していない子どもよりも、飼育している子どもの方が感情移入の能力が高いということが報告されています⁸⁾。

家庭におけるペットの役割と効果については、主に海外で活発に調査が行われています。家庭で飼育されているペット動物は、兄弟や友達の役割を担うと言われています。動物は人間の言葉を喋らないため、子どもは毎日ボディランゲージを読み取る訓練をすることになります。その結果、感情移入や、共感能力を育む

効果が生まれるのではないかと考えられています。また、動物が悩みを打ち明ける相手としての役割を担っているという報告もあります⁹⁾。

思春期の子どもは、人間（周囲の大人や友人など）に悩みを打ち明けることを、自分の弱みをさらけ出すことであると受け止め、他者に心情を吐露することは少ないのですが、動物なら秘密の話を他の人に喋ってしまうこともありませんし、動物は話の内容にかかわらず黙って聞いてくれます。

感情を言語に置き換える作業は、精神的発達にとって非常に重要で、動物に向かって悩みや心情を思いきり話すことができれば、情緒的な支えとなります。また、動物は毎日世話を必要とします。餌をあげるというのは当然の義務ではあるのですが、動物の命を預かる大切な作業を親にまかされているという責任感や、毎日きちんとやり遂げているという達成感、動物が自分のことを信頼してくれるようになったという自尊心を育む助けになると言われています。

このように、子どもと動物が密接なかかわりを持つことで、自尊心が高まり、人格や社会性、責任感が育まれ、精神的な発達が促進されるという研究結果が次々と認知されるようになってきたことから、教育機関においても、動物を飼育することで同様の効果を得ることができるのではないかと期待されているのです。

2) 日本における動物介在教育の目標および効果とは？

2001（平成13）年にブラジルのリオで開催された、「第9回 人と動物との関係に関する国際会議」で、IAHAIO（イアハイオ）がリオ宣言として、「The IAHAIO Rio Declaration on pets in schools: 動物介在教育実施ガイドライン」を発表しました。この宣言で、動物を教育に導入することによって効果を得ようとするならば、AAEに導入される動物が適切かつ安全に飼育されていること（動物福祉）が前提条件であり、その上で、明確な学習目標を設定しなければならないとしています。

欧米でAAEに対する注目が高まっている背景には、愛護教育の充実や、精神的な発達を高めたいという目標があることを説明しましたが、日本の教育機関における動物飼育は具体的にこれらの学習目標を設定しているのでしょうか？

筆者らは2000 (平成12) 年に、広島県にあるすべての幼稚園342園を対象として、29項目からなるアンケートを郵送しました。アンケートでは、各幼稚園の概要と動物飼育の現状について質問しました。主な内容としては、創立年度、宗教的背景、園児の人数、教諭の人数、動物を飼育しているか、飼っている場合にはどんな動物を飼育しているかなどです。さらに、動物を飼育していると回答した幼稚園に対しては、「園内で動物を飼育することの教育的効果に満足しているか?」「満足している理由」についても質問しました。

342園の幼稚園のうち、196園の幼稚園から回答を得ることができました (回答率は57%)。アンケートに応じた幼稚園のうち、園内で動物を飼育していたのは169園で、動物飼育率は86%にのぼりました。

動物を飼育していると回答した幼稚園に対して、幼稚園で動物を飼育することによる効果に満足しているかを尋ねたところ、「非常に満足している」「満足している」を合わせて82%の幼稚園が満足していると回答しました。さらに、「満足している」と回答した幼稚園に対してその理由を尋ねたところ、「思いやり、責任感、優しさが身に付く」という心の教育に関する効果を強調する幼稚園が最も多くありました (74園)。

また、「死とは何か、生きているとはどういうことかなどを伝えることができる」といった「死生観」を教育できるという回答も多くあげられました (48園)。

死生観を伝えるという効果に関しては、飼育していた動物が死亡した場合に、89%もの幼稚園が園児に対して何らかの説明を行っていました。その中には「生命があるものには必ず死があること、それゆえに生命が尊いこと」など、「生命の大切さ」を伝える機会としている幼稚園が最も多く、「死亡したという事実」や「病気や老衰など死亡した原因」を伝える幼稚園も多く見られました。また「皆で葬式をする」という幼稚園も多く、幼稚園では実際の経験を通して心の教育ができることを、動物を飼うことの大きな意義として捉えているということが出来ます。

さらにその他の理由として、動物と触れ合う機会を与えることそのものが、教育的効果として重要であるという回答もありました。その他、「動物が身近にすることで、幼稚園になじめない園児の心を癒し、園での生活に自然に溶け込ませることができる」という癒しの効果や、「生き物の生態や理科的な知識を直に教

えることができる」という回答もありました。

広島大学附属三原幼稚園で、1986 (昭和61) 年から2001 (平成13) 年までの間に発行された学級便りをもとに、動物の登場する学級便り102事例を抜き出して、その中から教諭らが考える動物介在教育の効果を抽出する調査も行いました。学級便りとは、各クラスの教諭がおよそ月に1回程度、クラスの保護者全員に向けて、連絡事項や幼稚園での子どもたちの様子などを書いた手紙のようなものです。

動物の登場するエピソードの一例を資料1に示しました。カエルをめぐる3人の子ども達の関わりがよく分かります。

1996.6.10 5歳

タイトル このカエルは誰のもの?

A君がカエルを持ってきたが、どんなエサをやってもいかに分らず、そのままになっていた。A君ときちんと話をしなかったことが悔やまれたが、連休に入るので裏庭に逃がしてやった。連休があけてA君に「ごめんね、何日もエサを食べてなくて、かわいそうだったから逃がしてやったんだよ」と話した。

ミニトマトを観察していたB君が、アマガエルを見つけ捕まえた。それに気づいたA君は「これはぼくのカエルだ!」と言い、B君も「ぼくがみつけたから、ぼくのだ」と言って2人とも譲らない。そこへC君も来て、「A君のに似るとよ」と加勢し、パンチやキックが出そうなほど険悪なムードになった。保育者もどのように解決してよいか悩みながら、「(飼うにしても) アマガエルって何を食べるのかねえ」とつぶやくと、

「スーパーで図鑑を見つけたよ!」
「カエルはアメンボを食べるんよ!」
「アメンボを探しに行こう!」

と会話が進展した。ついには「2人の物にしようや!」とどちらからともなく言い出し、2人が交代でカエルを飼うことになった。アメンボを捕まえて、カエルと一緒にしてみたら、アメンボがカエルの血を吸ってしまうことが分かったので、結局アメンボは放してしまった。

周囲の大人が「けんかをしてはいけません」「カエルは仲良く2人の物にしましょう」と先に解決してしまっていたら、友達を気づかうC君の存在もなかっただろうし、自分達で2人のものにするという解決方法を見つけたしたり、アメンボがカエルの血を吸うという発見など、「学びの場」も閉ざされてしまっただろう。

資料1 動物の登場する学級便り

(注) 本来の学級便りは、口語体で書かれ親しみやすい文章となっているが、紙面の都合上、簡略化した。この事例では、アマガエルが3人の「人間関係を深めるきっかけ」となっており、また、アマガエルの飼育方法を知りたくなり自ら図鑑を調べ始めるなど「科学的な興味を引き出す」役割も果たしている。

これら102事例に対する調査の結果、「心を育む」「想像力を豊かにする」「科学的な興味を引き出す」「生き物に親しませる」「動物の飼い方や扱い方を学ぶ」「人間関係を深めるきっかけとなる」「死生観を伝える」といった効果も期待されていることが分かりました。

以上、アンケートと学級便りに関する調査結果は、幼稚園で実際に動物を飼育することで、教育的効果があがる可能性を十分に示唆しています。

しかし、動物介在教育を「独立した教育目標」として設定し、具体的な教育プログラムを設けている幼稚園はありませんでした。むしろ、日々の生き物との関わりを通して、そのつど何かを学ばせたり、偶発的に起こる動物の死などを通して、それらを自然に心の教育につなげるという捉え方をしています。この点において、IAHAIOが提唱している「明確な目標を設定する」AAEとはかなり異なっており、西洋とは異なる日本独特の動物介在教育の可能性が見えてきます。

3) 動物介在教育の担い手は誰か？

幼稚園で動物介在教育を実施する責任は、一般的に幼稚園の先生にあると思われれます。しかし、その先生達が主体的に動物を通した教育に関わろうとしているかという点、現実にはどうもそうではないようです。

先ほどの広島県の幼稚園を対象とした調査で、動物を飼育していない幼稚園にその理由をたずねたところ、「長期休暇中に動物を管理するものがないから」「動物が死亡した時どのように説明すればよいか困る」「教師全員の合意が得られない」「教師自身に動物飼育の経験がないことが影響しているのではないか」など、動物飼育によって、教師の負担が増えるのではないかと懸念が、動物飼育をためらわせている原因の一つであることが分かりました。

また、動物を実際に飼育している幼稚園に、「動物を飼育していて、これまでに問題が起きたことがありますか？」という質問も行ってみました。その結果、90%以上の幼稚園が何らかの問題を経験し、中には複数の問題を抱えている幼稚園もあり、やはり日常管理、特に動物を飼うと教師の負担が増えることが問題として挙がっていました。

また、衛生管理に関する問題、飼育数の繁殖コントロールに関する問題を挙げた幼稚園も多くありました。

衛生管理に関する問題では、動物からの病原菌の感染を心配する幼稚園が多かったのですが、人畜共通感染症などについての正確な知識に乏しく、論理的な裏付けなしに、病気の感染を心配して、園児に動物に触らせないようにしている幼稚園もありました。

飼育数の繁殖コントロールでは、「数が増え過ぎてしまい、餌や場所が幼稚園で飼える許容量をこえてしまう」という回答や、「近親交配のため動物の子どもが育ちにくい」という回答もあり、動物の生殖や育種に関する知識が乏しいことが明らかになりました。

「生き物の飼育方法が分からない場合に、助言を受けられる人がいるか」について質問したところ、「質問できる人がいない」と回答した幼稚園は50%にのぼり、動物に対する理解不足や知識不足による問題を抱えながら、試行錯誤しつつ動物を飼育している実態が浮かび上がってきました。

これらの問題が発生する背景には、ほとんどの幼稚園が多様な種の動物を複数飼育していることがあげられます。動物種は、鳥類、哺乳類、魚類、は虫類、甲殻類、昆虫類、腹足類、両生類で、全種類数は70種以上におよんでいました。動物に関する知識に乏しい幼稚園の教諭が多いにもかかわらず、動物園のように多様な動物を複数飼育することは、教諭にとって負担になるだけでなく、「飼育動物の福祉の低下」にもつながります。

教諭の知識不足・対策不足から動物の福祉が低下している現状は、日本全国の国立幼稚園を対象としたアンケート調査からも見受けられます。国立の幼稚園は全国に49園あり、その中でアンケートに回答して動物を飼っていると回答したのは37園でした。

「強く抱き過ぎた」など園児の行動が原因で動物が

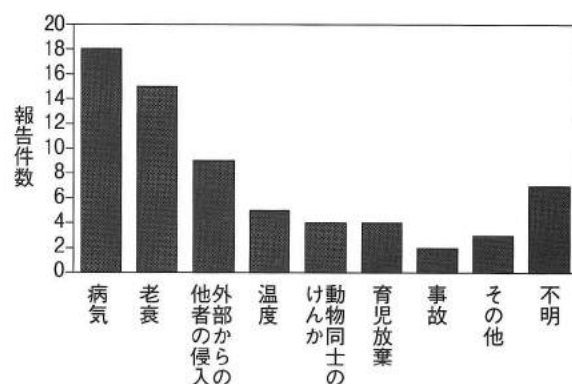


図4 園児の行動以外の要因で動物が死亡した際の理由



図5 ある教育施設で飼育されているウサギ
異種の混飼と密飼いが見られる。U字管の中のウサギは、動物同士の闘争もしくははじめによって、目と首筋に怪我をしている。(2003年撮影)

死亡した場合を除いて、死亡した理由は何かという質問に対する回答を図4に示しました。

老衰は健康な動物であっても生命あるものには必ず訪れる現象ですが、外部からの他者の侵入による殺傷、温度管理のミス、動物同士のけんかが原因で死んでしまう背景には、飼育に関する知識不足と不十分な管理対策があると思われます。

例えば温度管理に関しては、「生まれた子ウサギが寒さで死んでしまったが、子どもたちには自然の中で生きていくことの厳しさを教えることができた」と回答した幼稚園がありました。生まれたばかりの子ウサギは毛が完全に生えておらず、寒さに弱いということは、ウサギ好きなら、出産に立ち会った経験がなくとも飼育書等を通じて知っていることであり、また子ウサギの誕生を楽しみにしているのであれば、ウサギを思いやり、無事に育つよう事前に暖かい産室や敷きわらなどの準備をするのではないかと思います。この幼稚園では、ウサギが妊娠していることや寒い季節に出産を迎えるということも、実は把握していなかったようです。

図5は、ある教育施設で見かけたウサギです。20～30羽のウサギがひしめきあい、その他ニワトリ、チャボ、クジャク、アヒルも同じ小屋の中で飼育されていました。傷の手当はされず放置されているようでした。このケースは、知識不足・対策不足以前の問題です。この施設は、動物を飼育することで子ども達にいったい何を伝えようとしているのでしょうか。

③今後の課題

リオ宣言では、具体的な教育目標の設定を必要条件としていました。しかし、日本における動物を通した教育のスタイルとしては、あえて完全な教育プログラムを作らない幼稚園があってもよいのかもしれませんが。

「動物と触れあうことそのものが教育的効果」とアンケートに回答した幼稚園があったように、日々の生き物との自然な関わりの中で、子どもたちが生き物を身近に感じるチャンスを与えることこそが、必要とされている場合もあるようです。また、教育プログラムを作るにしても、なるべく自然な形で動物と触れ合わせる形に工夫することが必要でしょう。

上述のように、動物介在教育にとって重要なことの一つは、自然な形で生き物に関わるということです。動物を介在した教育プログラムを考える前に、教諭と子ども、動物とが自然にコミュニケーションを図り、触れあうということが重要です。

幼稚園では、動物と子どもを機械的に教育プログラムに当てはめては、かえって問題でしょう。教諭が生き物と自然に触れ合っているところを見た子どもたちが、自然に動物に興味を持ち、そこから教諭とのコミュニケーションも自然に生まれ、動物もゆったりと子どもたちに反応するというのであれば、先生たちの負担も少なくなりますし、効果も期待できるのではないかと思います。

動物福祉とは、「動物が、肉体的にも精神的にも良好、幸福な状態にあること」「動物が、肉体的、精神的に良い生活がおくれること」と定義されています。幼稚園の飼育動物の福祉を向上させるためには、適切な餌と水の給与、適切な飼育スペースの確保、適切な飼育環境の確保（光、温度、湿度等）、不必要な苦痛を与えない等の具体的な項目を一つ一つ解決していくことが必要です。

先ほど紹介したように、たくさんの種類の動物を複数飼育している現状では、それぞれの動物種全てに対して適切な飼育を行うことは難しいですし、数が多ければ、個体毎に目を配れず、福祉を保証できません。そこで、飼育動物の種類と数の見直しが必要です。

1つの幼稚園で飼う動物の数を少なくすれば、金銭的にも労力的にも負担はぐっと軽くなり、1頭（匹、羽）ずつの動物に対する先生や子ども達の愛着も高まるはずですが、先生達が動物への配慮、思いやりを持た

ずに、子どもに動物への慈しみを教えることはできないわけですから、先生達が動物の福祉を思いやれる環境づくりが必要だと思えます。

また、保育士や幼稚園の教諭になろうと考えている学生に、実際に動物の世話をさせたり、基本的な動物の飼育方法や動物福祉の概念を学ばせることも有効だと思えます。

近年、首都圏の小学校を中心に学校獣医師制度を導入する教育施設が増えてきました。動物飼育に関する助言をしたり、動物触れ合い授業等で、幼稚園や小学校を訪れられたりした経験をお持ちの方もいるかもしれません。

幼稚園は、幼児を教育することが主目的であり、動物は幼児を取り囲む様々な環境要素、教育ツールの一つであると捉えられる傾向にありますので、読者の皆さんの動物に対する思い入れとの間に、少し隔たりのある場合もあると思えます。

幼児教育では、幼稚園における生活のすべてが教育であり、幼児は保育者や周りの子ども達との関係や、音楽、絵画製作、遊びなどさまざまな活動を通じて成長していくと考えられています。幼稚園の教諭は、幼児を取り巻く環境を豊かにし、幼児が伸びやかに成長していけるよう援助をする立場に位置付けられています。

しかし、幼稚園にとっては教材の一つである動物達も、命ある生き物としてノアの箱船に乗り合わせた私達の仲間でもあります。動物介在教育に関わる人々が、幼稚園における動物飼育について、特に動物達の健康と命について真剣に考えることが必要とされているのではないのでしょうか。

参考文献

- 1) 谷田 創・木場有紀編著 (2004) 『幼稚園における動物を通じた教育のためのガイドブック』 広島大学動物介在教育研究会
- 2) 文部省編 (1979) 『幼稚園教育百年史』 ひかりのくに
- 3) 峯 克政 (2001) 「領域「環境」をめぐる保育史の変遷」『新保育講座9 保育内容「環境」』(柴崎正行・田中泰行編) ミネルヴァ書房
- 4) 広島大学附属三原幼稚園 (1950) 『広島大学附属三原幼稚園 紀要』
- 5) B.M.Levinson (2002) 『子どものためのアニマルセラピー (原題 "Pet-Oriented Child Psychotherapy")』(川原隆造監修、松田和義・東豊監訳)、日本評論社
- 6) 内閣府大臣官房政府広報室 (2004) 「世論調査報告書 平成15年7月調査 動物愛護に関する世論調査」『ヒトと動物の関係学会誌』第13号, p113~126. ヒトと動物の関係学会
- 7) 尾崎裕子 (2004) 「飼育動物の選択には何が影響を与えるか - 日本版総合社会調査を用いて -」『Animal Nursing (アニマル・ナーシング)』、第8巻2号, p12~24. 日本動物看護学会
- 8) Poresky, R.H. and Hendrix, C. (1989) 「Companion animal bonding, children's social development」, Paper presented at the Biennial Meeting of the Society for Research in Child Development, Kansas City, MI
- 9) Bachman, R.W. (1975) 「Elementary school children perception of helpers and their characteristics」『Elementary School Guidance and Counselling』, Vol.10, No.2, p103~109

※参考文献1)のお問合せについては、こちらのホームページアドレスをご参照ください。

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/htanida/thometop.html>

コンパニオンアニマル(犬)喪失後の飼主の心理過程

—犬の喪失原因別にみた、飼主の喪失感情—

濱野佐代子 (白百合女子大学大学院)

The Owners' Psychological Process of Loss of Their Companion Animals (Dogs)
— the Owners' Sense of Loss According to the Pet Loss Factors —

Sayoko Hamano

■ KEY WORD

コンパニオンアニマル、ペット・ロス、喪失感情、喪失原因

■ 要約

コンパニオンアニマルを喪失した飼主48名に、喪失後の感情について質問紙調査(自由記述法)を行った。喪失直後と現在の感情について、想起し回答してもらった。そして、喪失原因別に喪失感情を検討した。

その結果、犬の喪失直後では、どの喪失原因の飼主も、愛する犬と別れたことに対する悲しみ、辛さ、寂しさ、ショックなどの感情を抱えていた。現在の喪失感情を喪失原因別にみると、次のような結果であった。

病死では、埋葬をし、これでよかったと自身を納得させ、喪失を受容していた飼主と、現在も自責感情を抱えていた飼主がいた。老衰では、犬が苦しまずに寿命をまっとうしたことに対する満足感を示しており、犬は幸せだったと認識していた。安楽死では、死を選択したということに対する責任感から、自責感が現在も苦痛を伴って続いていた。失踪では、当時の出来事を詳細に記述し、ショック、自責感を抱いており、時間の経過とともに、喪失したことを実感していったことが示唆された。

はじめに

近年、欧米諸国を中心に、ペット(愛玩動物)がコンパニオンアニマル(伴侶動物)と呼ばれるようになってきた。コンパニオンアニマルとは、人生を共にする伴侶という意味である。これは、飼主が家庭内飼育動物を、人生の伴侶として捉えるようになってきたためと考えられる。

「日本においても、ペット動物が伴侶動物(コンパニオンアニマル)と呼ばれるようになって約10年が経過した」(桜井 2000)¹⁾といわれるように、ペットから

コンパニオンアニマルという呼称への移行がみられつつある。また、「飼主の約7割が、犬を家族と捉えている」(濱野 2000)²⁾。つまり人は、家庭内飼育動物を単なる動物として捉えているのではなく、家族の一員として飼育しているのである。

このように心理的な距離が近づいてきたことにより、コンパニオンアニマルを喪失したときに、家族を亡くしたような深い悲しみに陥る飼主がおり、これが『ペット・ロス』として獣医療でも問題になっている。

DSM-IV(執筆者注:米国精神医学会の診断基準第4版)では、「少なくとも死別後2ヶ月間、不眠、食欲不振、体重減少などの主要な抑うつのエピソードを特徴とする症状が続く場合、死別を精神医学的障害とする」(American Psychiatric Association 1994)³⁾と定義している。また、「日常生活機能の減損、緩慢な動作、無価値感へのとらわれが長引いた場合に、その悲嘆経験は病的な状態に移行する場合がある」(Harvey 2000)とする定義もある⁴⁾。日本において、この『ペット・ロス』という言葉を使う場合の多くは、以上のような病的な状態に移行した場合を示していると考えられる。

しかし実際、コンパニオンアニマルに対して愛情をもっているどのような飼主も、喪失後に悲嘆を経験すると考えられる。「悲嘆とは、『喪失という出来事に対する情動反応』(Despelder, L.A. and Strickland, A.L. 1992)⁵⁾とか、『現実だと実感する過程、すなわち、外的な現実ですでに生じた出来事を自己の内面において現実のものと感ずる過程』(Parkes 1972)⁶⁾と定義されている」(Harvey 2000)⁷⁾。

そこで本研究では、飼主がコンパニオンアニマル喪

白百合女子大学大学院 文学研究科 博士課程 発達心理学専攻
〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1丁目25番地

失後、どのような喪失感情を抱き、それが変化していくかについて探索的に調査した。

濱野 (2002)⁸⁾の研究結果より、喪失直後の感情と現在の感情に違いがあると考え、感情がどのように変化したかを捉えるために、本研究では、コンパニオンアニマル喪失直後と現在の感情について調査した。

一方、コンパニオンアニマルを喪う状況には、大きく分けて、動物の死と生き別れがある。死には病死、事故死、そして人の場合と大きく違い安楽死がある。生き別れは、住宅事情、近隣とのトラブル、飼主の身体上の問題、飼主の生活状況の変化、動物と家族とのトラブル、災害、失踪などがある。喪失原因の中でも安楽死は、飼主の怒り・罪悪感を増強させることがあり、飼主の喪失感情の受け入れを遅らせたり、遠ざけたりする要因となっていた。つまり、コンパニオンアニマル喪失後の感情に違いをもたらす要因として、喪失原因が考えられた (濱野 2002)⁸⁾。

そこで本研究では、コンパニオンアニマル喪失直後と現在の感情について、飼主の喪失後の心理を、犬の喪失原因別に検討することを目的とした。

①方法

1) 調査期間

2002 (平成14)年 5月～2003 (平成15)年 5月まで。

2) 調査回答者

犬を喪失した経験のある48名の飼主。表1に回答者

表1 調査回答者の属性 (特徴)
(N(データ数)=48)

回答者の平均年齢	42.9歳 (SD:16.15) (範囲:19歳～68歳)	
回答者の性別	男性15人 女性33人	
回答者の職業	会社員	13人 (27.1%)
	公務員	6人 (12.5%)
	自営・自由業	1人 (2.1%)
	学生	8人 (16.7%)
	専業主婦 (パートも含む)	14人 (29.2%)
	無職	2人 (4.2%)
	その他	3人 (6.3%)
家族の構成人数	4.50人 (SD:1.61) (範囲:1～10人)	
犬の飼育期間 (年数)	9.82年 (SD:5.06) (範囲:1ヶ月～18年)	
喪失時の回答者の年齢	31.1歳 (SD:18.74) (範囲:5歳～68歳)	
喪失時からの経過年数	7.73年 (SD:6.48) (範囲:6ヶ月～27年)	
犬の喪失原因	病死30人 (62.5%)	老衰13人 (27.1%)
	安楽死2人 (4.2%)	失踪3人 (6.3%)

SDとは標準偏差のこと (統計学用語)。データの散らばりの度合を表す数値。

の属性 (特徴) を示す。喪失原因は11選択肢中、表1に示す4カテゴリのみであった。

3) 質問紙調査法 (自由記述法)

この方法を用いて、「犬を喪失してどのような思いを抱いているか、犬や自分や他の人に対して、あるいはその他の何かに対して、思っていること、感じていること、考えていること」について、喪失直後を想起して回答してもらい、また現在についても回答してもらった (直後の感情を想起して記述するという方法に問題があると考えられるが、死を経験した飼主に直後のことを調査することは、倫理的に困難であるので施行しなかった。しかし、妥当性に疑問があるので今後の課題としたい)。

4) 分析方法

喪失原因別に、回答者の喪失後の感情を検討する。病死、老衰については、飼主の喪失感情を分類した。一方、安楽死は2例と少ないため回答者の記述を事例として示した。また、失踪の飼主は3例だったため共通点を選び出した。

②結果

喪失原因別に、記述内容を検討した結果を以下に示す。

1) 病死・老衰

飼主の喪失感情を表2に示す。

〈喪失原因が病死の場合〉

直後の感情では、「悲しみ」「辛さ」「自責感」などの死に対する感情面の悲嘆を示し、「泣く」「眠れない」「やる気がしない」などの身体面での悲嘆を示しており、死に直面したときの衝撃を述べていた。

一方、現在の感情では、「責任感が身に付いた」「子どもの情操教育に役立った」など、「犬を飼っていてよかったことを多く述べていた飼主」と「治療や世話に関して後悔を述べた飼主」がいた。前者の飼主は犬を埋葬し、「これでよかった」と思うことにより犬の死を自分なりに受容し、さらに「犬を飼っていた意義」「犬の死の意味づけ」を自分なりに考えていたことが示唆された。後者の飼主は犬の死をまだ受容できずに、「後悔」や「自責感情」を抱いていたと考えられた。

表2 病死、老衰によって犬を喪失した場合の感情

喪失原因	喪失直後	現在
病死	<ul style="list-style-type: none"> ・ショック、衝撃 ・後悔 ・泣く ・自責感、罪悪感 ・寂しさ ・辛さ ・悲しさ ・むなしさ ・何もやる気がしない ・眠れない ・犬を探してしまう 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しかった、良い思い出 ・また会いたい ・責任感が身についた ・子どもに対して死の教育に役立った ・いま飼っている犬を可愛がろう ・懐かしい ・また犬を飼いたい ・子どもの情操教育に役立った ・犬に感謝している ・それ以来飼えない ・後悔
老衰	<ul style="list-style-type: none"> ・悲しさ ・辛さ ・悲しみより、苦しまずに逝けてよかったという安堵感 ・寿命をまっとうさせてあげたという満足感 ・悲しいけどしかたがない ・徐々に弱っていったので、死ぬまでの間に心の準備をすることができたのでショックは少ない 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しいことばかり思い出す ・ちゃんと世話をしたし、かわいがってあげて満足 ・古い、死を覚えてもらった ・幸せな犬だった ・飼ったことは良い経験 ・自分が犬から得たものを子どもにも経験させたい

〈喪失原因が老衰の場合〉

直後の感情では、「悲しさ」「辛さ」などの感情面の悲嘆は述べるものの、徐々に犬が弱っていくのを見ており死を予期できたことから、犬を最後まで看取ってあげたという満足感を述べていた。

一方、現在の感情では、「犬を飼っていた意義」「犬の死の意味づけ」を自分なりに考えていた。

なお、喪失原因が病死の場合、飼主は「これでよかった」と回答するにとどまっていたが、老衰で喪失した飼主4人が、「あの犬は幸せだった」と回答していた。つまり老衰では、犬を最後まで看取ったという満足感から「犬は幸せだった」と納得でき、病死では、「これでよかった」と自分を納得させる努力をしていることが示唆された。また、病死で喪失した飼主10人、老衰で喪失した飼主2人が、葬儀や埋葬を行っており、それが「喪失感情を受容するのに役立った」と述べていた。

2) 安楽死

本研究では2例のみであるので、回答内容を記載す

表3 安楽死によって犬を喪失した場合の感情

〈〉内は左から順に、回答者の性別・回答者の年代・安楽死に至った原因・安楽死からの経過年数・飼育年数

<p>〈男・50代・癌・2年・9年〉</p> <p>淋しい思いをした。癌のため安楽死をさせたが、苦しむかもしれないが、最後まで生かしてやった方がよかったのか今も残念に思っている。</p>
<p>〈女・30代・てんかん・9年・4年〉</p> <p>死んだ直後は「本当に悪いことをしたなあ」と思った。「本当にこれでよかったのか？」という思いで頭がいっぱいだった。自分たちを責める思いの方が、「これでよかった」という気持ちより強かった。その時は、「まさかあの獣医師は、金もうけのために安楽死をすすめたんじゃないか？」と疑ったりもした。今は、本当にあの獣医師は犬のことを考えてくれたと思ってるけど。</p> <p>「本当に安楽死でよかったのか？」の問いに対する答えは今もでていない。安楽死させなければ、今も生きている可能性も大きいし。だから、犬の介護用オムツのCMを見ると、ちょっと辛い。最後まで看なかったから。犬は幸せだったかな？ やっぱ不幸だと思って死んだのかな？ 今も分からない…。</p> <p>最近、近所の犬がみんな年老いて、次々と死んでいっている。飼主は本当に悲しいだろうと思うけれど、私たち家族のように、自分を責めなくていいからまだましだと思う。犬も天寿を全うしたのだから幸せだと思う。</p>

る(表3)。2例とも共通して、安楽死が正しい選択であったかどうかについて、いま現在も自問自答を繰り返し、「犬に対して悪かった」と自責感を抱いていた。

3) 失踪

本研究では3例のみであった。他の原因で喪失した飼主よりも、失踪した当時、必死になって、家族で犬を探す努力をしていた出来事を詳細に記述していた。また、ショックを表し自責感を抱いていた。ある飼主は、「直後は悲しいとも思わなかったが、しばらく後に、いなくなったことを実感した」、別の飼主は、「いなくなったときを見ていないので、そうかなあと思った」と回答している。失踪直後は喪失を否認し、時間の経過とともに喪失したことを実感していくと考えられた。一方、回答者の現在の感情では犬との思い出を記述していた。

③考察

本研究では、コンパニオンアニマルの喪失直後と現在の感情について調査した。すなわち、喪失の原因別に分けた上で飼主の感情を検討した。

〈コンパニオンアニマルの喪失直後について〉

犬を喪失した直後において、愛する犬と別れたこと

に関する「悲しみ」「辛さ」「寂しさ」「ショック」などの感情は、どの喪失原因の飼主も共通して回答していた。

特に、「病死」「失踪」が原因で喪失した飼主は、「衝撃を受けて」「犬を探してしまう」が、「しばらく後に、いなくなったことを実感した」というように、喪失を実感するのにしばらく時間がかかっていた。目の前で喪失を体験していない「失踪」の飼主は、失踪当日の搜索の様子を詳細に述べている。すなわち、いなくなったことが信じられずに探しまわったと回答していた。

一方、「老衰」が原因で喪失した飼主は、犬が古い、徐々に弱っていく姿を目の当たりにするため、死への心の準備が緩やかにできていたと考えられ、喪失をすぐに実感していた。そして、犬が穏やかな死を迎えることができたため、悲しみよりも満足感を抱いていた。

「安楽死」が原因で喪失した飼主は、本研究ではわずか2例であるが、2例の共通点は、死を選択したことに対する責任感から、自責感を強く語っていることである。安楽死を選択したことに対する自責の念が、現在も苦痛を伴って続いていた。また、安楽死の選択の責任は獣医師にあると考え、怒りが獣医師に向けられる場合もあった。

人の医療と違い動物の医療では、飼主がコンパニオンアニマルの代弁者となって、「安楽死」という選択をするために、後々まで飼主を苦しめることとなる。そこで、「安楽死」の選択の際には、動物病院との信頼関係を基に、納得するまで動物病院側の説明を受け、家族の間で安楽死選択の意見を統一することが、その後の自責感情をサポートするのに役立つと考えられる。

〈現在の感情について〉

現在の感情について考察すると、「病死」の飼主は、「犬との楽しかった良い思い出」や、「責任感が身についた」「子どもに対する死の教育に役立った」など、犬を飼ったことに対する肯定的な感情と、「もっと可愛がってやればよかった」「もっと治療してやればよかった」「もっと散歩させてやればよかった」「もっと一緒にいてあげればよかった」などの、後悔や自責感などの否定的な感情を抱えていた。

現在、肯定的な感情を持っている飼主は、自分なりに

に「これでよかった」と考え、また、犬を埋葬し自分なりに喪失を受容した後に、「犬を飼っていて良かったこと」「犬の死を通して学んだこと」「良い思い出」を語っていた。

一方、現在、否定的な感情を持っている飼主は、後悔や自責感を述べるに留まっていた。つまり、犬の生存中から納得のいく世話や医療を行うことが、その後の喪失感情受容に役立つと考えられる。また、埋葬や葬儀を行うことが喪失感情受容に役立っていたと考えられる。

「老衰」の飼主は、「満足感」「達成感」「子どもに対する死の教育や情操教育に役立った」などと、どの飼主も回答していた。なお、「病死」の飼主が「これでよかったのだ」と自分自身に納得をさせていたのと比較して、「老衰」の多くの飼主が「あの犬は幸せだった」と記述していた。これは、老いを傍^{そば}で見ることにより自然に死を受け入れ、また、最後まで看取ったという満足感から、犬の一生を幸せなものとして捉えていたということが示唆された。

おわりに

コンパニオンアニマルの死を経験することは、「悲しみ」だけではなく、「老いや死を教えてもらった」「家族の死を迎えるときの練習となった」というように、「死の教育」や「人や動物を亡くした人の気持ちがわかるようになった」といった共感性の発達に関する効果があったと考えられた。したがってコンパニオンアニマルは、核家族化が進んだ現在において、家族に対して「死の経験」を与えてくれる存在として役立つことが示唆された。

引用文献

- 1) 桜井富士朗・尾形庭子・斎藤 徹・岡ノ谷一夫 (2000)『ペットと暮らす 行動学と関係学』アドスリー
- 2) 濱野佐代子・林洋一 (2000)「飼い主とコンパニオンアニマルの愛着の質的アプローチ」『どうぶつと人』第9号, p25~35. 比較心身症研究会
- 3) American Psychiatric Association (1994)『Diagnostic and statistical manual of mental disorders (4th ed.)』American Psychiatric Association, USA
- 4) Harvey, John H. (2000)『Give sorrow words: Perspective on loss and trauma』Brunner/Mazel, USA
- 5) Despelder, L.A., and Strickland, A.L. (1992)『The last dance : encountering death and dying (3rd ed.)』Mayfield

Publishing, USA

- 6) Perkes, C.M. (1972) [Bereavement: Studies of grief in adult life] Tavistock Publications, UK London: Tavistock
- 7) Harvey, John H (2000) 『悲しみに言葉を - 喪失とトラウマの心理学 -』 (安藤清志 監訳), p60~94, 誠信書房
- 8) 濱野佐代子 (2002) 「人とコンパニオンアニマルの愛着 - 人はコンパニオンアニマル（犬）をどのような存在と捉えているか -」 p 1~158, 白百合女子大学大学院修士課程文学研究科 発達心理学専攻 修士論文 (未公開)

動物福祉はなぜ必要か—動物福祉の理論と実践—

②心理学的幸福の確立とその方策としての、環境エンリッチメント



上野吉一（うへの・よしかず）

1960年、岩手県生まれ。北海道大学農学部卒業後、同大学大学院博士課程文学研究科（行動科学）修了。現在、京都大学霊長類研究所 人類進化モデル研究センター 助教授（生命倫理研究領域）。専門は、霊長類の味覚・嗅覚の知覚・認知。主な論文に「グルメ」の生物学的起源（『科学』1999年4月号、岩波書店）、「味覚からみた霊長類の採食戦略」（『日本味と匂学会誌』1999年8月号、日本味と匂学会）などがある。著書には『グルメなサル 香水をつけるサル—ヒトの進化戦略—』（講談社選書メチエ）がある。

前回は、動物福祉を考える前提として、ヒトと動物の違いやその関係、あるいは福祉の概念について考えた。今回は、「動物への福祉の配慮を実践するための視点とその方策」について考えたい。

動物福祉と科学との関係

動物、少なくとも脊椎動物は、環境に対し単に受動的ないし機械的に反応しているのではなく、さまざまな要求をもとに能動的に関わりを持つ存在である。そしてなかには、ヒトとは程度や質に関し同じではないとしても苦痛を感じることができ、情動を示すことができる動物もいる。したがって前回示したように、動物を“より良い状態に置く”という動物への福祉の配慮は、「個体自らが置かれた環境に対し“上手く対処する（coping）”ことが可能な状態に動物を置くこと』だと考えられる。そしてこの根本は、動物が置かれた生活の質（QOL）をより良好なものにすることだと言える。

しかし、動物の福祉すなわち「上手く対処することが可能な状態」というのは、誰もが同じように理解し納得できるような、自明な基準として示すことはできない。というのも、この概念は、たとえば「質量」や「速度」といったように一次元の尺度として捉えることはできない。福祉は、疾病、傷害、栄養、寿命、繁殖、恐怖、苦しみ、痛み、要求などのさまざまな要素により構成される“生活している”状態を扱うのであ

る。それぞれの要素もあるいはそれらの関係についても、測定はできたとしても評価は単純ではない。こうした数多くの要素の関係を一義的に評価することは難しく、また、その判断基準は基本的に、科学的・客観的というよりは社会的・価値論的である。

このように、客観的に扱うことが難しいため、またヒトの場合と異なり、“当事者”である動物自身の評価や要求を直接“聞くこと”ができないため、動物への福祉の配慮は合理性に欠け、非常に独善的なものとししばしばみなされてきた。事実、動物福祉に関する議論は、古くから「動物をどう扱うべきか」という方法にのみ目を向け、その妥当性はヒトが「動物にとってよかれ」と思う気持ちにしたがった、擬人的なあるいは情緒的と解される視点で判断されてきた。

たしかにその根底には、非常に重要な姿勢である、相手を自分の身に置き換えて考えるという“他者への思いやり”がある。しかしこれだけでは、「好き／嫌い」の判断のように、人それぞれの判断以上のものにはならない。相互に“言葉”で通じ合えない動物に対してはなおさらである。すでに述べたような、ヒトがはるか昔から持っている、動物を慈しむ意識（図1）にのみ依存する動物との関わりを越えた、新たな視点で、動物との関わりの中において、動物への福祉の配慮をより確かなものとするためには必要である。

動物に対する福祉の配慮への意識は、科学の世界で



図1 ペットへの愛、永遠に
——カイロのエジプト博物館
で展示された、3500~4000年
前のサルのみイラ。古代エジ
プト人はペット(サル)を愛
し、死後の世界にもペットを
連れていきたがったという。
(朝日新聞 2003年7月8日付 夕刊)
転載許可済

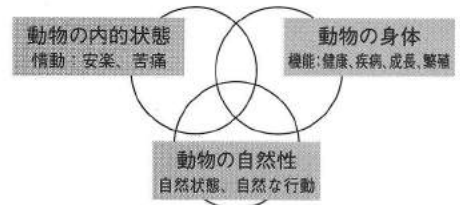


図2 動物福祉の3つの枠組。これらはそれぞれ独立したものではなく、重複する部分を持っている。(M. Appleby, 1999を改変)

まったく目を向けられずにいたわけでは決してない。たとえば動物実験における動物への福祉的配慮を向上するために、ラッセルとパーチは「3Rs」という考え方を1959年に提唱した。「3Rs」とは、

- 「Replacement: 代替」すなわち、生きた動物を用いずに実験を行う代替法の利用や開発
- 「Reduction: 削減」すなわち、実験技術の向上や統計解析法の発達による、実験に用いる動物の数の削減
- 「Refinement: 洗練」すなわち、麻酔法や鎮痛法の向上・開発による、動物に与える苦痛の低減

の3つの目標を指す。

動物実験を行う上で、利用する動物の数や与える苦痛を減らすことは、動物への福祉的配慮として非常に重要なものである。しかし、これはあくまで、動物実験を行う場面という非常に限定された状況での配慮でしかない。実験動物にも、実験に利用されるまでの生活があり、また実験により殺処置を受けなかったとすれば、実験の後の生活がある。これは、食物資源として利用される動物に対しても同じであり、“食べられる”としても食べられるまでの生活がある。私たちは動物を飼育したり動物と関わっていく上で、直接的な関わりを持つ場面だけではなく、動物が過ごす生活の質全体に対しても、科学的/客観的指標を持って十分目を向けなければならない。

先に述べたように、福祉は多様な要素を内包し、価値論的な判断を伴うため、科学的な視点から定義付けることは馴染みにくいものであった。一般に科学では、複雑な関係をそのままの状態^{なじ}で捉えることは難しく、より限定した枠組の中で捉える工夫をしなければならない。ましてや、哲学者ヒュームの「事実判断から価

値判断は導き出されない」といった言葉を持ちだすまでもなく、善し悪しといった価値的判断を行うことには、科学は非常に慎重にならざるを得ない。



20世紀の後半、特に80年代以降から急速に、動物の生活の質に目を向けた福祉的配慮への科学的アプローチが試みられるようになった。こうした作業の中で、動物の福祉に科学的アプローチをするための枠組の整理が進められた。

その1つとして、フレイザーとダンカン(1997)は次の3つの視点を提案した(図2)。1つ目は、「動物の身体の働きに注目し、健康、成長、繁殖といった生物学的機能から捉えようとする視点」である。2つ目は、「動物がいかに“自然”な状態にあるかに注目し、生活環境や動物が表出する行動の自然性から捉えようとする視点」である。3つ目は、「動物の主観的な経験に注目し、喜びや苦痛あるいは欲求や嗜好性から捉えようとする視点」である。

一方、福祉を評価する上での学問領域という観点からの整理もある(Snowdon, 1991)。身体の働きとして前に述べた健康や成長は、「獣医学的指標」と見なすことができる。病気・傷害の有無、栄養状態、清潔度、あるいは発達状態といったことをもとに、この指標は評価される。

また、繁殖すなわちどれだけの子孫を残すことができたか(繁殖成功率)は、ダーウィン主義に根差した「生物学的指標」とみなすことができる。この場合、単にメスが子供を生みさえすればよいのか、それとも、きちんと育て上げることができて評価されるのか、2つの考え方がある。私は、動物の福祉という観点からは、各個体の状態に目を向けることが必須と考え、育て上げることまでを評価の対象とすべきだと考える。生物学的指標の評価は、次世代に残す子供の数や繁殖



に関連した行動をもとに行うことができる。

最後に、より複雑な“本来”あるいは“主体的”な行動ないしは内的状態（心理的状态）に目を向ける「行動学・生態学的指標」が考えられる。これは、それぞれの種が持つ環境に対する要求を、生態学的・行動学的な理解に基づき、“本来の”あるいは“正常な”環境との関わりを評価しようというものである。

3つの視点、3つの指標のいずれにおいても、動物の身体状態のみならず心理状態へも、科学的・客観的に配慮するということの重要性を示している。現在の動物福祉に関する科学研究では、心理状態に対しどのように配慮し、また、より適切な心理状態をどのように確立するかということが重要な課題の1つになっている。

動物の「心理的幸福」とは

心理状態への配慮の必要性は、1985年に出されたアメリカの動物福祉法の修正条項において、「心理的幸福（psychological well-being）」という表現により明確に示された。ここでは対象が霊長類と限定されていたが、飼育環境は心理学的幸福を促進するものでなければならないと規定された。

心理的幸福は、動物の“本来”の行動様式を実現できている、すなわち、行動のレパートリーとその時間配分がその動物種にとって適切なものであり、また、主体的にそうした多様な行動を表現できる状態と定義できる。抑圧や虐待を受けない、苦痛を与えられないということも、心理的幸福の重要な要素だが、そうしたものは結果として動物の行動に何かしら影響を与える。したがって、動物の心理的幸福を評価するためには、行動パターン（行動レパートリーとその時間配分）とその自主性を見ることがことになる。

かつて、実験動物学者が実験動物のウサギの扱いに

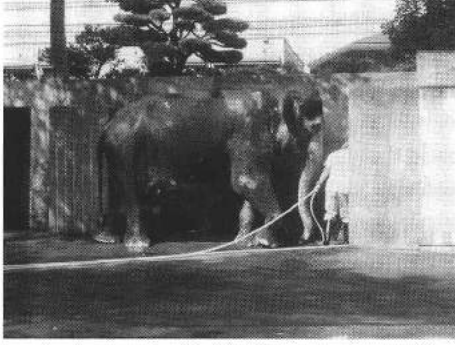
関し、“狭い”ケージで飼う効用を説明するのを聞いたことがある。その研究者は、実験に使われるウサギはひんぱんに処置を受けるために保定されなければならないので、広いケージで追い回されるよりは、短時間で効率よく捕まえられるほうが、ウサギに対するストレスは小さいと言っていた。さらに、狭いケージで飼育されているウサギを観察すると、じっと横になっている、すなわち“くつろいで”いる時間が多く、一般の人が思うほどには問題がないことを示していた。こうした理解は正しいのだろうか。



こうした動物の状態の捉え方を考える上で、重要な研究がある。セリグマン（1967）による「学習性無力感（learned helplessness）」に関するものである。この研究では、イヌに対し嫌な刺激として電気刺激が加えられ、それに対する反応が調べられた。イヌは、電気刺激が与えられた時、それを回避することができる場合は、当然それを回避した。しかし、小屋に閉じ込め回避できない状態で電気刺激を加えた場合は、最初は逃げ出すために暴れたり壁を引っかいたりするが、最終的にはじっとするようになってしまう。その後、こうした経験を学習したイヌに対し、回避できる条件で電気刺激を加えると、もはや回避はほとんど見られなくなっていた。

この結果に対し、イヌが電気刺激に慣れてしまったためだという解釈が考えられる。しかし、こうしたイヌは限界といえるほどの電気を流しても、反応に変化は見られなかった。これらのことから、電気刺激に慣れたというよりも、そうした「何をやってもむだ」ということをイヌは学習したと考えることができ、それは生活全般に影響を与えるものだった。

先のウサギの例は、こうしたイヌと同じ状態と考えられる。決してウサギは真の意味でくつろいでいたの



でも、そうした環境に馴染んでいたのでもなく、そうやるしかない状態に押し込まれたと解釈できるのである。さらに言えば、仮にそうした状況に馴染み、日が一歩動きもせずじっとしていたとしても、やはり動物として見た場合、適切な状態ではないだろう。動物の生活は本来、多様な行動レパートリーがある配分を持って構成されていると言え、休息しているかのように見えたとしても、それが過度に長い時間であれば、適切ではないと考えるべきである。たとえば、いつも寝てばかりいる動物園の動物を想像してもらえばよい。

イギリスでは、心理的幸福の基礎となる、動物の5つの事由が提唱されている。

- ① 飢えと渇きからの自由
- ② 不快や不適切な居住環境からの自由
- ③ 痛み、傷害、病気からの自由
- ④ 正常な行動を示す自由
- ⑤ 恐怖と苦悶からの自由

私たちは動物に対し、さまざまな利用の目的はあるとしても、これらの自由を可能な限り保証し心理的幸福を高める必要がある。心理的幸福を確立するためには、当事者である動物自身の要求や判断に耳を傾け、また、その要求に応える工夫をする必要がある。そのため具体的な方策として、環境エンリッチメントが考えられている。

環境エンリッチメントとは

環境エンリッチメントという言葉は、1980年代から使われるようになり、90年代に入り日本でも広く使われるようになってきた。この言葉は「飼育下における動物の生活環境を豊かにする」ということを指す。しかし、特に日本において、このことに関する十分な議論が進められてきておらず、豊かにすべき環境あるいは環境の豊かさの捉え方といった、具体的な中身とな

ると必ずしも明快なものではない。実際、混乱が見られる場合すらある。

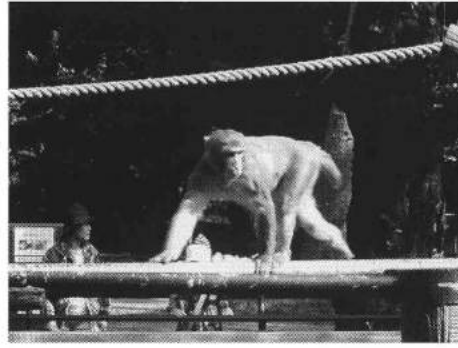
たとえば、かつて上野動物園などにあった「オサルの電車」のように、サルを運転台に拘束することは、“退屈”な生活に多少刺激を与えることになり、環境エンリッチメントとしての働きがあったと評価できるという捉え方を耳にしたことがある。多くの動物園において、動物は一日中特にするすることもなく“退屈”した生活を送っている場合が少なくない。こうした状況に比べて、電車の運転台に乗せるのも、さらには動物ショーに使用するのも、生活に刺激を与えることになり、つまりは生活を豊かにすることになるというのである。

こうした動物の利用は、それ自体を端から否定するものではないとしても、環境エンリッチメントの基本的な考え方からすると、まったく的外れと言わざるをえない。このことを明確にするために、まずは環境エンリッチメントの歴史的経緯を概観してみたい。



環境エンリッチメントの流れは、大きく分けて2つ考えられている (Young, 2003)。1つは、ハーゲンベックによって1907年にハンブルグ動物園で進められた、「生態展示」に端を発する流れである。もう一つは、類人猿の研究者だったヤーキス (1925) により主張された、「飼育環境において、動物の行動を積極的に引き出す工夫を取り入れるというアイデア」に端を発する流れである。

「生態展示」は自然主義的な発想に立ち、動物は本来の生息地にできる限り類似した生活環境で生活するのがもっともよい、という考え方である。動物は、内的な動機付けばかりではなく、外部からの刺激によっても多くの行動が引き出される。したがって飼育においても、本来の環境により近ければ、適切でかつ多様



な外的刺激によって本来のさまざまな行動が引き出され、動物の福祉は向上すると考えられた。

しかし、単純に生活環境の概観を自然に似せさえすれば、動物の福祉は向上するかという必ずしもそうではない。たとえば、野生では当然見られる捕食獣から逃げようとする行動を、飼育下においても引き起こすために、刺激すなわち捕食獣を提示することが、動物福祉を向上させるために必要とは一般に考えない。現在、こうした自然に似せるという流れは、動物の飼育環境の向上というよりは、ハーゲンベックのアイデアがそうだったように、観客への効果（野生の疑似体験）に重きを置いた動物園の展示技法として、重要視されている。

一方、「飼育環境において、動物の行動を積極的に引き出す工夫を取り入れるというアイデア」は、50年代にヘディガーにより進められたが、その後は70年代まで進展は見られなかった。80年代に入りマーコピッツ等に引き継がれ、その後、動物園以外における動物の飼育環境の改善としても広く用いられ現在に至っている。

マーコピッツは当初、行動を引き出す工夫という発想から、「行動工学 (behavioral engineering)」という表現を用い、目的とする行動を意図的に引き出す環境の構築を考えた。そこではたとえば、高いところを腕渡り (プラキエーション) するテナガザルに、活発に腕渡りをさせるために、腕渡りせずには取れない場所にエサを置くといった方法がとられた。

しかしこれは、ヒトがそうさせているだけに過ぎない可能性が強く、行動を管理しているという意味合いで理解される危険性があった。そこで、行動をより豊かに発現させるという考え方を明確にするため、呼び方を「行動エンリッチメント (behavioral enrichment)」と改めた。しかし、これでもまだ、ヒトが意図的に多

様な行動を引き出すに過ぎないという捉え方をされる可能性があるため、最終的には、現在の「環境エンリッチメント (environmental enrichment)」と改めた。

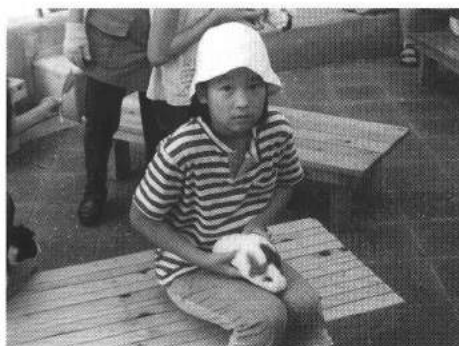
この「環境エンリッチメント」という表現で意図されている環境の豊かさとは、動物が必要とする環境が持つ機能を、できる限り持たせようということである。つまり、動物が環境に働きかける「要求行動 (appetitive behavior)」とそれに伴い動物が到達できる「完了行動 (consummatory behavior)」を結び付ける環境の機能を増強する、ということを書き表したものだ。

例えばものを食べる場合、食物を口に入れ飲み込む行為や栄養を摂取すること (完了行動) だけが、重要なのではなく、食物を探し出し食べられるように処理するといった、食物を得るまでのプロセス (要求行動) もまた必要なことだと考え、それを表現できる環境にするのである。飼育環境下でこうした機能を増やそうという試みが、動物園の動物に留まらず様々な動物を対象に現在進められている。



上述してきた「生態展示」と「飼育環境において、動物の行動を積極的に引き出す工夫を取り入れるというアイデア」——これら2つの出所の異なる発想ではともに、“本来”の動物の行動を発現できるよう、動物の保有する環境に対して多様な「機能を増強すること」が重要だと考えられている。すなわち、動物にとっての環境の「機能を増強すること」が、環境エンリッチメントの基本原則といえることができる。

“本来”とは、人為的な制限のない状態、すなわち基本的に野性状態を意味する。家畜や実験動物などのように、多くの世代をかけて品種改良されてきた動物は、野性状態とは大きくかけ離れてしまっているという指摘を受ける場合がある。しかし、原生種ないし近縁の野生種との比較から、品種改良による行動の変化



は、質的な変化ではなく量的な変化に過ぎないと多くの場合考えられる。

動物の持つさまざまな特性は、その動物種が生きてきた環境への適応として進化してきた。言い換えれば、動物は自らが適応してきた環境（進化的適応環境、environment of evolutionary adaptation）が生きていく上で重要である。行動においても、恒常性の維持が働き、進化的に獲得したそれぞれの種に適切な範囲の状態を要求するのである。したがって、野性状態をモデルにして行動パターン（行動のレパートリーと時間配分）を想定し、そうした行動の発現を可能にするような飼育環境の工夫が重要となる。

たとえばサルやネズミは、活動時間のかなりの割合を採食に関連した行動に費やす。先の考えに従うならば、飼育下においても同様に、採食時間の割合を増加させることが必要となる。しかし、こうした考え方に対し、反論を受ける場合がしばしばある。たとえば、野性で採食時間が長いのは食べるのに手間取っているだけであり、効率よく食べることができるのであれば、食物を探索したり処理したりすることを、動物は必要としないのではないかという指摘である。

これに関しては「ブレマックの原理」、すなわち、ブレマックが1962年に報告したラットへの実験による「強化関係の可逆性」が答えとなるだろう。彼が行った実験はこうである。まず、回転カゴに入れられたラットはカゴを回転させると報酬の水が与えられた。すると水をもらうために、ラットはカゴを回転させるようになった。反対に、留金をつけた回転カゴにラットを入れ、水を飲むと留金がはずれカゴを回転できるようにした。すると今度は、ラットはカゴを回転させるために水を飲むようになった。

私たちは、動物にとって食物は絶対的な報酬と考えがちである。しかし、この実験結果は、食物や水など

の報酬になる「もの」が絶対的に決まっているのではなく、あらゆる動物には、まったく自由にさせると自発的に決まる行動配分があって、それからの逸脱が生じると、逸脱を戻すということ自体が報酬となることを示している。その逸脱を戻すための行動は、結果として強化されることになる。事実、たとえばラットは求められる作業が過度でなければ、単純に与えられる食べ物よりも、自ら手に入れた食べ物を好むことが報告されている（Carder & Berkowitz, 1970）。



先に述べたように、環境エンリッチメントは、動物の側に立って彼らが必要とする環境の機能を増強することである。何をどうすればよいかは、ア・プリオリ（先験的）に決まっているものではなく、ヒトが一義的に決められるものではない。動物種によって必要とする機能は異なり、また多様である。こうした作業は、つねに野性状態をモデルにしながら、行動レパートリー、その時間配分、そして、そうした行動が主体的に選択されたものかといった観点から、個体の履歴も加味しながら進めなければならない。

参考文献

- Carder, B. & Berkowitz, K. (1970) Rats' preference for earned in comparison with free food. *Science*, 167, p1273-1274
- Duncan, I.J.H. & Fraser, D. (1997) Understanding animal welfare. In: *Animal Welfare* (eds.) Appleby, M.C. & Hughes, B.O. Cab International, p19-31
- Overmier, J.B. & Seligman, M.E.P. (1967) Effects of inescapable shock upon subsequent escape and avoidance responding. *Journal of Comparative and Physiological Psychology*, 63, p28-33
- Snowdon, C.T. (1991) Naturalistic environments and psychological well-being. In: *Through the Looking Glass* (eds.) Novak, M.A. & Petto, A.J. American Psychological Association, p103-115
- Young, R.J. (2003) *Environmental Enrichment for Captive Animals*. Blackwell Publishing

人獣共通感染症の主要な病原体 ——寄生虫についての興味を深めよう

目黒寄生虫館 からのメッセージ

トキソプラズマ・回虫^{こうちゅう}・鉤虫^{かこうちゅう}・鞭虫^{べんちゅう}・フィラリア・糸虫などの「内部寄生虫」、毛包虫・サシダニ・ツメダニ・マダニ・ノミなどの「外部寄生虫」——それらが引き起こす感染症に対する予防について、動物看護師は正しい知識を持たなければなりません。飼主に対して、ペットの日常の健康管理について説明する際にも、その理解度が問われます。

けれども、人獣共通感染症の主要な病原体と言える寄生虫については、なかなか興味のきっかけをつかみにくいのも事実です。

このたび、世界で唯一の寄生虫博物館である目黒寄生虫館理事・館長の内田明彦先生より、動物看護師の皆さんへ、「目黒寄生虫館への招待状」ともいべきメッセージをいただきました。

ぜひいちど目黒寄生虫館を訪ねて、寄生虫に関する豊富な資料展示を見て、体感して、興味・認識を深めて... その結果を毎日の看護業務に反映していただければ幸いです。



執筆者
うちだあきひこ
内田明彦

財団法人
目黒寄生虫館
理事・館長

麻布大学 環境保健学部
健康環境科学科
医動物学研究室 教授

〔略歴〕1978年、麻布獣医科大学大学院修了。獣医学博士。麻布大学助教授を経て現職。2000年より財団法人目黒寄生虫館館長を兼任。この間、中米のグアテマラ共和国、西アフリカのナイジェリア共和国、南米のパラグアイに計4年間、寄生虫症の研究指導のため赴任。さらに近年には、農林水産省と日本鯨類研究所からの依頼により、北西北太平洋に生息するミンククジラの寄生虫調査に赴く。専門は寄生虫学、なかでも人獣共通寄生虫症、衛生動物学（蚊、蝇、ゴキブリ、ネズミなど）。主な著書に、『医療技術者のための医動物学』（共著、講談社）、『獣医臨床寄生虫学』（文永堂出版）、『Progress of Medical Parasitology in Japan』（目黒寄生虫館）。

今日、わが国は衛生環境が完備しているのに、日本人の「清潔志向」の高まりとともに、日本からは感染症が消滅したように思われている。同じように、寄生虫もいなくなったと思っている人々が大部分である。

ところが、それほど簡単には消滅しなかったどころか、再興感染症として結核、病原性大腸菌O-157、回虫が増加している。一方では、新興感染症としてエイズ、エボラなど今まで以上に強力な病原体が出現して、われわれの生活を脅かしている。しかしキリストの復活ではないが、虫たちも息をひそめていたが、ついに番目となって私達の生活に忍び寄ってきている。今回はそうした寄生虫のうち、われわれ獣医師にも責任がある、動物を介する寄生虫たちを紹介し対策を考えたい。

第2次世界大戦直後の一時期、わが国には寄生虫が蔓延した。私が小学生の頃は、体に回虫などが寄生していたり当たり前であり、それぞれ回虫が感染していなければ白い眼で見られた(?)時代であった。当時の日本人の90%以上が寄生虫に感染していたと言われる。

しかし、トイレの水洗化や下水処理の完備に加えて、衛生環境の改善、衛生に対する知識の高まり（現代では異常なまでに潔癖症候群が多いが）、化学肥料の使用による下肥（人の糞尿を肥料にしたもの）の使用中止、全国的な寄生虫対策、フィラリア駆虫剤の普及といった目覚ましい薬剤開発によって、その後は激減した。よって一時期「寄生虫学は斜陽産業である」として、各大学医学部の寄生虫学教室の中には廃止されたところがある。

ところが最近、寄生虫が再度、頭をもたげ始めている。しかもリバイバルの再興の虫から、これまでは知られていなかった新興の寄生虫がぞくぞく登場している。

それではなぜ、いなくなったはずの虫が増えてきたのだろうか？ これにはいくつかの理由がある。その理由はどれも皆、言われてみれば納得できる事柄ばかりである。

●寄生虫学との出逢い

寄生虫というと、世間ではろくな言葉に使われない。先日も書店に、ある小説家が書いた「寄生虫」という単行本が出ていたので、さっそく買って読んでみると、案の定、社会に寄生して善良な市民を食物にする悪人をテーマにした物語であった。

ダニと寄生虫は同義語として使われており、少なくとも美語として使われることはまず間違ってもない。そんな社会の嫌われ者をどうして研究しているのかと、よく人に聞かれる。たまたま獣医学の大学に入ってしまった、そして卒論のため研究室を選ぶときになり、寄生虫学教室なら教授も優しいそうで、適当にサボっても大丈夫だろうと、かなりいい加減な気持ちで入室してしまったからである。

入室してから、東京・目黒にある目黒寄生虫館という世にも不思議な、当時は寄生虫のおぼけが出そうな、寄生虫だけを集めて研究している所を知ったので、怖いもの見たさに行ってみた。こうしたところは、現代の若者も当時の若者も同じである。

さすがに建物も寄生虫館にふさわしく、今にも生きた寄生虫が出て来そうな、幽霊屋敷ならぬ寄生虫屋敷であった。館長の亀谷了博士はもちろんのこと、研究員も“虫キチ”ばかりの集団で、話を聞いているうちに、成り行き上「こんなに面白いなら、日曜祭日に勉強に来ていいですか」と言ってしまった。これが、後で取り返しつかないことになろうとは本人も神様も知らなかった。

●そもそも寄生虫とは!?

ここで、少しでも寄生虫に興味をもっといただくために、寄生虫のことをご紹介しよう。寄生虫は「動物（人）体内外に寄生し、寄生された宿主に害を与える虫」と定義されている。私は毎年、春から始まる寄生虫学の最初の講義で、学生さん（学生と呼び捨てにしてはいけない。これからやって来る少子化に備えてお客様?）に対して、

「寄生虫とは君たちのことですよ」と言っている。

すると、「俺たちが寄生虫だと？ 寄生虫の知識はないが、それが諸悪の根源であることくらいは知っている。やくざの別名(街のダニ)や、「あいつは寄生虫みたいな奴だ」などと、ろくでもない意味にしか使われない言葉を、受験戦争に勝ち抜いて来た「点取り虫」いや「エリート集団」に対して使うとは、なんと失礼な。それでも教師か」という目で見ています。

そう、多くの学生さんは親の脛をかじっているのだ(すなわち脛に寄生しているのだ)。何かと理由をつけておこづかいをせびる... 気に入らないことがあれば、ふてくされる... しかし親(宿主)は、子供可愛さに騙されていると知りながらもお金を出す... そのくせ学生当人たちは、自分の親は理解がないと言いたい放題... (すべての学生さんとは言いません。寄生虫にも、宿主にほとんど害を与えないものもいるのです)

寄生虫は、宿主から食物をもらっているにもかかわらず、その恩人に対して腹痛・発熱や痛みを与える、もっとひどい場合には殺してしまう。しかし、宿主は殺されてはたまらないから殺虫剤を使用する...

しかし、あまり宿主にたかりすぎると、親が反旗を翻して小遣い停止さらには勘当となる。だから、寄生虫にとっての理想とは、「寄生していることが分からないような寄生」である。これこそが最も進化した寄生虫と言えるのだ。長さ10メートルもあるサナダ虫は、寄生していてもその人は分からない場合が多い...

このような話を、学生時代にいつも寄生虫館で聞かされるうちに、将来寄生虫で食べて行く外ないような錯覚に陥ってしまった。目黒寄生虫館とは、虫好きな若者が集まって成り立っていたような所であった...

それでは続いて、そんな目黒寄生虫館とは一体どのような博物館なのかを、皆さんにご紹介したい。

●世界で唯一の寄生虫博物館

当館は美術館などと異なり、寄生虫の恐ろしさと寄生虫に対する認識を深めてもらうための、世界で唯一の博物館である。したがって、創立以来一貫して入館料は徴収していない。一般の多くの方が当館を訪れて、寄生虫の恐ろしさを感じとり、同時に感染予防に関する知識を得てくださる。当館としては大変喜ばしいことであり、少しでも社会のお役に立てていると自負している。

加えて当館としては、**小動物臨床の最前線で日夜活躍しておられる動物看護師の皆様方にも、寄生虫に関する知識を、いっそう深めていただければと強く願うものである。**ぜひ当館にお気軽に立ち寄り、寄生虫症の恐ろしさとそれに対する予防についての知識を深められ、あわせて寄生虫の神秘性についても知っていただきたい。

当館の歴史

当館の創立者であり初代館長である医学博士・亀谷了は、長崎大学医学部を卒業後、旧満州国(現 中華人民共和国)の満州鉄道附属医学研究所に勤務した。当時は日本もそうであったが、満州国も同様に寄生虫症が猛威を振るっていた。亀谷博士は寄生虫症の患者を毎日診ているうちに、日本に帰国したら寄生虫の研究所を作ろうと心に決めたそうである。

敗戦となり帰国して、東京の目黒に内科・小児科の病院を開設し、1953(昭和28)年に私財を投入して目黒寄生虫館を設立した。当時は、バラック(粗造の仮家屋)よりいくらか気の利いた程度の建物であり、診療が終わると夜中まで、魚や車に轢かれた動物を拾っては解剖して寄生虫を集めたそうである。そうしているうちに理解ある獣医師に巡り会い、家畜の寄生虫を多数採取してくれるようになり、寄生虫の標本や文献も集まってきた。

1956(昭和31)年には新しい本館が完成し、バラック建ての研究所から移った。そして翌年には、文部大臣より研究成果が認められて財団法人の許可を受け、研究および教育・啓蒙を中心に活動することとなった。

小人数で構成される小さな研究所であったが、寄生虫学に興味をもつ学生や若い寄生虫研究者が毎日の様に入りしていた。この状態は現在でも引き継がれている。このようにして寄生虫館で育った学生たちは、現在でも寄生虫研究の分野で活躍している。

寄生虫館では、主に寄生虫の分類・形態学的な研究が盛んに行なわれた。いろいろな動物の寄生虫が採集・同定・分類され、所蔵標本として収集されている。他の研究機関の研究者からの標本の寄贈も多く、収蔵標本の一部をパネルの説明とともに展示・陳列し、博物館的な啓蒙活動も行っている。1964(昭和39)年秋には、日本寄生虫学会東日本支部大会を当館で開催し、関東甲信越地方の寄生虫学研究者が集まった。

1977(昭和52)年には展示が大幅に改装され、さらに1992(平成4)年には地下1階、地上6階のビルが新築され、それまでのものを基本としつつも、より近代感覚の展示となり、博物館的な様相も本格的なものとなった。

多くの寄生虫学者より、長年にわたって収集された標本や文献なども寄贈され、資料の充実は他に類を見ないものである。新種の記載に用いられた標本も多く、国内外からの貸出依頼に応じている。

創立者(初代館長)である亀谷了はこの間の活動に対して、保健文化賞、紫綬褒章、勲三等瑞宝賞が贈られた。さらに日本寄生虫学会からは桂田賞など数多くの受賞・叙勲が贈られた。そして館ともども有名となり、館が多くのメディアで紹介された。1992(平成4)年の新築・改装の頃からは、博物館ブームも手伝って入館者が増え、年間7万人以上が見学を訪れている。

1997(平成9)年には、亀谷了の高齢により、同じく寄生虫研究者である子息の亀谷俊也が第2代目館長となった。亀谷俊也は2000(平成12)年に病に倒れ、翌2001(平成13)年2月に志途中心にして逝去された。往年62歳であった。

2000(平成12)年以降、第3代目館長は、学生時代から寄生虫館に入りし当館の理事でもある内田明彦(麻布大学環境保健学部教授)が、大学と兼任で館長を務めている。当館は財団法人とはいえ、経済的には館だけの収入によって運営されている。以前は、亀谷了が経営する病院収入の大部分が、寄付という形で館の運営費に当てられていた。しかし、高齢のため病院を閉鎖してからは館の運営はきびしい点もある。

現在、入館料は無料であるが、一部の方々からは入館料を取るべきであるのご指摘がある。しかしながら創立者の亀谷了は、寄生虫の啓蒙のために寄生虫館を創設

したのでからと、当初から館を入場無料としてきた。この意志を受け継いで、これからも基本的には無料で行くつもりである。

当館の事業内容

当館は館長の下、研究系と事務系の職員で構成される。職員数は総計8名で、そのうち3名が獣医師である。以下の業務を行っている。

●研究関係

寄生虫の分類・形態学が主であるが、他の研究機関とも連携を取りながら、魚の寄生虫やクジラをはじめとする野生動物の寄生虫について幅広い研究を行っている。さらに数年前からは、若手研究員が麻布大学医動物学研究室と共同で、アニサキスやマンソン裂頭条虫の遺伝学的解析を行っている。これらの成果は、日本寄生虫学会、日本獣医学会、日本衛生動物学会、国際寄生虫学会において報告している。

さらに、近年2000(平成12)年には、わが国の寄生虫学を世界に知ってもらうために、わが国の主要な寄生虫研究者の協力を得て、日本学術振興会と日本寄生虫学会より一部出版助成金を得た上で、『日本における寄生虫学の研究』(第6、7巻)を出版した。また、2003(平成15)年と2004(平成16)年には、英文版『Progress of Medical Parasitology in Japan』(7、8巻)を出版した。どちらも世界各国の大学や研究所に配布している。

●標本・文献の収集

大学や研究所で寄生虫の研究をしていた研究者が退職する際に、それまで集められた寄生虫の標本や文献を譲り受け、それらを整理収集している。現在までに寄生虫標本は45,000点、文献や図書は60,000点に及び。

●異物鑑定

主に水産関係の会社や個人からの「食品などに見つかった寄生虫らしき異物の鑑定依頼」、あるいは「病院の臨床検査室からの鑑定依頼」が年間300件ほどあり、それに対応して回答を出している。

●研修・講演

これまでに、親子による寄生虫採取と虫の同定の研修を夏休み期間に行っている。2003(平成15)年からは、「子どもゆめ基金」(国立オリンピック記念青少年総合センター基金部)からの助成により、「神秘的な寄生虫を知ろう」というタイトルで、小・中・高校生を対象に、寄生虫に関する研修と講演会を行っている。また、JICA(国際協力事業団)を通して各国からの研修生へのアドバイスや一部研修を行っている。

●教育標本販売

昭和50年代、日本寄生虫学会の委託事業として教育用寄生虫標本の販売を行った。その際の経験を生かし、寄生虫標本が入手しづらくなった現在、医学・獣医学系の大学や看護・医学技術系の学校を対象に、各種虫卵、液浸標本、原虫の塗抹標本などを教育用として販売している(プレパラート(スライド)切片標本:単包虫症(ウマ)・多包虫症(コットンラット)・旋毛虫症(マウス)など、プレパラート(スライド)塗抹標本:トキソプラズマ(増殖型)・クリプトスポリジウム(卵嚢子)・犬糸状虫(マイクロフィラリア)など一各1,500円、ぎょう虫(虫卵)は500円、虫卵液浸(ホルマリン):マンソン住血吸虫卵・犬回虫卵・猫回虫卵・犬鉤虫卵・鼠鞭虫卵など一各10,000円)。なお今後は、動物看護学系向け教育用標本の販売も予定している。

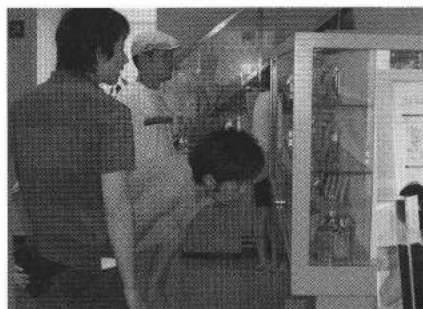
●ミュージアム・グッズ販売関係

館の収益事業として、入館者からの希望に応える意味からも、寄生虫柄のシャツ、寄生虫入りキーホルダー、絵はがきなどのオリジナル商品や、寄生虫に関する書籍を集めて販売している。

●その他

「はらのむし通信」という雑誌の発行、ぎょう虫検査や公園砂場の虫卵検査など公的機関からの依頼研究や、寄生虫に関する質問への対応などを広く行っている。

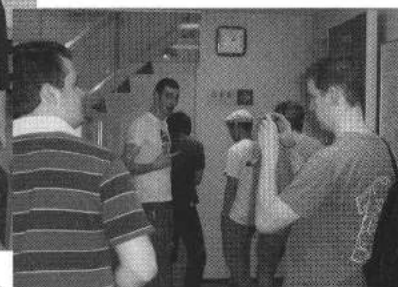
～写真で見る～
館内の様子



▲家族連れから若い層まで... にぎわう館内。この日は、海外からの若者グループもいた。

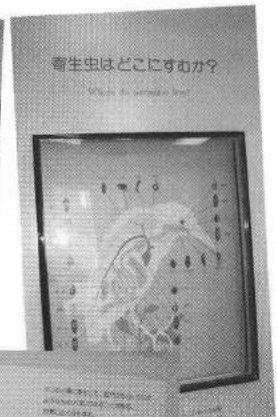
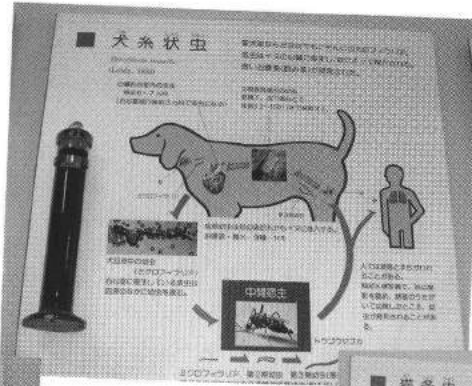


◀1階と2階に分かれて、豊富に展示されている。



次ページへ続く





▲ペットとなじみの深い多くの寄生虫についても、多くのパネルから知識を得ることができる。犬の心臓に寄生する「犬糸状虫（フィラリア）」、猫の小腸に寄生して、肛門から白いウジのようなものを出す「猫条虫」、他にも「マンソン裂頭条虫」「エキノコックス」などについて、一目じて学ぶことができる。

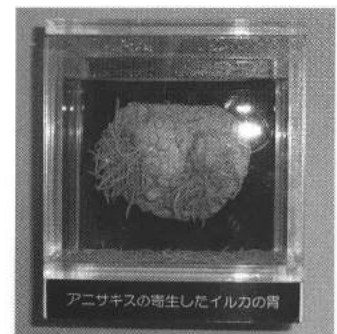


▲「日本海裂頭条虫」の成虫。全長8.8m！ 幼虫がいるマス寿司を食べたのが原因。3ヶ月後に一部が便と共に出てきて気がつく。駆虫薬を飲んで全虫体を排出。自覚症状なし。1986年のこと（日本）。

▶模型ではなく、ホルマリン液で保存されている寄生虫の実物を見ることができ。上から「フィラリア」「アニサキスの中間宿主であるオキアミ類、スルメイカ、サンマ」「マンソン裂頭条虫が寄生している二十日ネズミの内臓」



▶「アニサキス」の成虫はイルカやクジラに寄生している。日本人は、魚やイカ（イカは魚ではない）を生で食す機会が多いので感染例が多く、わが国では今でも年間1000例を超える。



◀直接塗抹法、浮遊法などの寄生虫検査に関する実習も、一般向けに随時行われている。希望者は問い合わせをされたい。

財団法人 目黒寄生虫館

TEL 03-3716-1264 FAX 03-3716-2322

開館時間：10:00～17:00

休 日：月曜日（月曜日が祝日の場合は翌火曜日）
年末年始（12月29日～1月4日）

入 館 料：無料

交 通：JR 目黒駅西口から徒歩15分、またはバスで大鳥神社前下車。

● 第13回 大会 ●

2004年6月13日(日)

東京・港区 慶應義塾大学 三田キャンパス



第13回大会が開催され、教育講演として、「寄生虫の基礎知識—人獣共通感染症のリスクを防ぐために—」「動物の超音波診断—超音波検査のしくみとその意義—」「急務とされる院内感染対策—動物病院で行うべきポイント—」の3題が行われました。

教育講演

「寄生虫の基礎知識—人獣共通感染症のリスクを防ぐために—」

内田明彦先生 (麻布大学 環境保健学部 健康環境科学科 医動物学研究室 教授、
財団法人目黒寄生虫館 理事・館長)

今日、わが国は衛生環境が完備しているので、日本人の「清潔志向」の高まりとともに、日本からは感染症が消滅したように思われている。同じように、寄生虫もいなくなったと思っている人々が大部分であろう。

ところが、それほど簡単には消滅しなかったどころか、再興感染症として結核、病原性大腸菌O-157、回虫が増加している。一方では、新興感染症としてエイズ、エボラなど今まで以上に強力な病原体が出現して、われわれの生活を脅かしている。

講演では、「海外での感染」「急増する輸入生鮮食料品からの感染」「動物の寄生虫のヒトへの感染」「高度医療に伴う寄生虫感染(日和見感染症)」「動物を介してヒトに感染する寄生虫」に関して、興味深い解説をお話いただいた。寄生虫が引き起こす感染症に対する予防と駆除について、動物看護師は正しい知識を持たねばならない。 90分

「動物の超音波診断—超音波検査のしくみとその意義—」

〈各装置のはたらきと検査前の準備方法〉
小山秀一先生 (日本獣医畜産大学 獣医学科
獣医内科学教室 講師)

超音波検査による診断は、診療分野を問わず日常診療に欠く

ことのできない検査方法の一つとなっている。その理由は、聴診器なみの簡便さで、その何百倍もの情報がリアルタイムに得られ、しかも無侵襲である点にある。しかし、このような大きな利点がある反面、物理的限界などに関係する欠点も存在する。

講演では初めに「基礎編」として、「音速と波長の関係」「音波の基本的伝搬特性」「超音波診断装置の仕組み」「超音波の生体内特性」「超音波診断装置の分解能」「ドプラ法の原理とその応用」について詳しく解説された。

後半では「心臓編」として、「心臓超音波検査の種類と特徴(断面法、Mモード法、ドプラ法)」と「検査の実際(動物の準備、保定および体位)」について、また「腹部編」として、「腹部超音波検査の概略」と前出同様の「検査の実際」について講義が行われた。 90分

「急務とされる院内感染対策—動物病院で行うべきポイント—」

〈滅菌と消毒について/院内感染対策の強化〉
渡辺隆之先生 (エム・ビー・ネットワーク)

院内感染の定義は、「病院における入院患者が原疾患とは別に新たに罹患した感染症、および医療従事者が病院内において罹患した感染症」もしくは「入院して3日目(48時間以上)以降に発症した感染症」である。

院内感染対策を行うためには、まず、滅菌と消毒についての正しい知識を持つことが最も大切である。講義では、滅菌と消毒の説明に加えて、動物看護師が動物病院でできることについて教授された。具体的には、「滅菌と消毒の違い」「滅菌と消毒と洗浄の関係」「滅菌・消毒の歴史」「滅菌法の種類(火炎滅菌法、乾熱滅菌法、高圧蒸気滅菌法など)」に関して解説された。

「モニタリング検査による院内各所の衛生状態の把握」「院内内外の清掃と消毒をきちんと行うこと」といった、すぐにできる対策についても説明が行われた。 45分

● 第16回 例会 ●

2004年8月7日(土)

東京・永田町 都市センターホテル 第1回 日本獣医内科学アカデミー総会と共催



第16回例会が開催され、学習発表(学生による発表)6題、一般演題(動物看護師らによる発表)5題の発表が行われました。教育講演は、「動物由来感染症のリスクをいかに抑えるか—感染症法改正のポイントと監視体制の最新動向—」「ペット産業と動物病院の経済動向」の2題が行われました。

学習発表 発表時間は各10分

「猫はなぜ涙をながすのか?」

寺崎裕美 (日本動物病院看護士学院 動物看護学科2年)

眼科疾患で涙を出す猫、それ以外の原因で涙を流す猫、一方、様々な感情により涙を流す人間。各々の涙を採取し成分を分析比較。

「ミルワームのカルシウム含量」

山口智子 (日本動物病院看護士学院 動物看護学科2年)

ミルワーム(ゴミムシダマシの幼虫)は、両生類や鳥類が好んで食べる。与えられる餌による、ミルワームのカルシウムの含有量変動を測定。

「セラビードッグ」

朝比奈史佳 (日本動物病院看護士学院 動物看護学科2年)
高齢者介護施設のうち、動物を飼育している所、ボランティア等が訪れる所、各々の長所と問題点を調査。

「地域別による飼い主のペットの見方の違い」

奥山大輔 (日本動物病院看護士学院 動物看護学科2年)
ペットに対する見方は地域により差があるのか。都内と地方で動物病院への来院者を対象に、飼育動機、飼育方法、動物観を調査。

「動物保健学別科について」

柏木 彩 (日本獣医畜産大学 動物保健学別科2年)

同科の講義や実習の内容、同大の動物医療センターにおける実習の様子などについて、在學生自身により詳しく報告。

「日本獣医畜産大学ケネルクラブから学ぶこと」

中村有佳（日本獣医畜産大学 動物保健学別科2年）

部員自らが子犬を育て、基本的なしつけや訓練を行い、最終的に出産も行う同クラブの、自主的・実践的な活動内容とその意義を紹介。

一般演題 発表時間は各10分

「動物同行避難訓練における問題点と課題」

池田潤子（NPO 法人アニイス・社）日本愛玩動物協会）

災害発生時の飼育動物の避難について飼主の不安は大きい。従来の避難訓練への飼育動物の同行避難も始められている。飼主らの対応方法や今後の様々な課題について報告。

「動物看護師による犬と猫の適切な食餌指導と管理について」

小松千江（新ゆりがおか動物病院）

動物看護師にとって、飼主への適切な食餌指導とその管理は大切な仕事である。食餌の安全性と特性を踏まえた上で、様々なデータをもとに行うが、そのポイントを整理して報告。

「臨床検査時における検体（血液・尿・便）の取り扱い方」

近藤亜紀（アリスどうぶつクリニック）

臨床検査が診断・治療に果たす役割は大きくなっている。動物看護師の役割も欠かせない。ここでは、臨床検査業務に入る前に最も大切な、各検体の取り扱い方について報告。

「犬の肛門周囲瘻の看護」

一内科治療を目的とした長期入院患者への看護のふりかえり」

横明日香（西谷獣医科病院）

肛門周囲瘻が悪化し、重度の侵襲と中期から末期の病変がみられる犬が、内科的治療と飼育管理のため長期入院をした。その際の看護方法の詳細を報告。

「成長期の長期入院時の看護」

一アカラス・真菌混合感染の患者の看護を行って」

西元博子（西谷獣医科病院）

子犬や子猫が長期間入院した場合は、細やかな観察と優しく愛情のこもった看護が、特に不可欠となる。しつけトレーニングを含む効果的な看護の実践例について、詳しく報告。

教育講演 各75分

「動物由来感染症のリスクをいかに抑えるか」

一感染症法改正のポイントと監視体制の最新動向」

中嶋建介先生（国立感染症研究所 国際協力室長）

動物が病原体を保有して人への感染源となる病気は、動物由来感染症、人獣共通感染症、ズーノーシスなどと呼ばれており、狂犬病、ペストをはじめ多数ある。昨年は、SARS（重症急性呼吸器症候群）の原因がハクビシンなどの野生動物ではないかと話題になり、さらに今年になって、ベトナムやタイなどの東南アジアの国々で鳥インフルエンザによる死亡者が発生し、世界的に動物に由来する感染症に注目が集まっている。

講演では、動物由来感染症の最近の話題が紹介され、リスクを抑えるためのわが国の行政の取り組みや、感染症法の改正（2003年末）に基づく新たな対策について、平易に解説された。

「ペット産業と動物病院の経済動向」

桜井富士朗先生（日本動物看護学会 副会長）

尾崎裕子先生（日本女子大学）

2001年度に行われた内閣府『国民生活選好度調査』では、「ペットも家族の一員である」を肯定する声が64.3%を占めた。実際にペットを飼育していない人々も含め、ペットは家族の一員であるという意識が、社会全体に広がっているといえる。ペットに対する意識の急速な変化に伴い、ペット関連産業も近



寺崎裕美さん

山口智子さん

朝比奈史佳さん

奥山大輔さん



柏木 彩さん

中村有佳さん

池田潤子さん

小松千江さん



近藤亜紀さん

横明日香さん

西元博子さん



中嶋建介先生



桜井富士朗先生(右)と尾崎裕子先生(左)

年大きく変動を遂げている。

講演では、ペット関連産業や動物病院に関する各種の最新データを紹介の上、これに対する詳細な分析、解説が行われた。特に、動物病院における女性全従業員の割合が、近年非常に高くなっているが、これは動物看護師の役割の、いっそうの高まりを示すものとして注目すべきと報告された。

《第16回例会の座長》 ご担当順

多川政弘先生（日本獣医畜産大学 獣医外科学教室 教授、動物保健学別科 別科長）

杉本恵子先生（南小岩ペットクリニック 院長）

牧田登之先生（元 山口大学農学部 部長）

永柄真子先生（アイムス・ジャパン株式会社 テクニカルサービス部）

小山秀一先生（日本獣医畜産大学 獣医内科学教室 講師）

佐藤 克先生（東京都獣医師会 危機管理室 バイオセキュリティ セクション長、佐藤獣医科）

小森伸昭先生（アニコム 理事長）

ありがとうございました

あなたが考える「動物看護」を教えてください！

看護とは、患者が生きるために使うエネルギー消費を、最適な状態にしてあげることだと考えられる。これを動物におきかえて考えてみたい。看護される動物とはペットなど、おもに人に飼われているものとする。

この場合、その動物の看護をすることは重要だが、飼主の希望も大切になってくる。すなわち、長生きさせることを優先させるか、楽に死ぬるようにしてあげるか、手術をしてまで治してあげる必要があるのか、などである。

ペットなどの飼育動物には、良くも悪くも“管理された生命”しか与えられていない。それを思うと、飼主の希望を優先させた対応の上での看護ということになるだろう。

次に、野生動物の看護について考えてみたい。野生動物を捉えるとき、私には、それが大きな哺乳動物だとしても、生態系の一部であるという思いを強くする。そのため、野生動物のうちの1頭だけの命を、様々な方法を駆使しても救うことはナンセンスにも思える。それこそ、その1頭の命の自然治癒力が、最大限に発揮できるような環境そのものを作ってあげることの方が、大切だろう。

ただしこれは、もし野生動物に看護を行うとすればの話である。私は必要に迫られたとき以外は、野生動物への看護は必要がないと思う。(2年生・御園佑子)

動物も人間と同じように命をもって生まれてきたのだから、病気になったら手術を施され、看護され、命が少しでも長くなるように努められるべきだと思う。

老犬や老猫のケアは、大変なことだと思う。しかし、動物看護は飼主として当然なことであり、できる限りのことをすべきであろう。

ケガを負って老人ホームに迷い込んだ1羽の鳥を、老人ホームの入居者らが看護することに決めたら、鳥がいるロビーに自然と足が向かうようになった。鳥を生かしてやるという励みができたので、鳥の動きを見て感情が豊かになり、老人ホームが明るくなった、という話を聞いたことがある。このように動物看護は、動物の命を救うだけでなく、人間のリハビリテーションにも効果があるのではないかと思う。

私はいま、動物看護学を学んでいるが、動物看護師の実際の仕事については、まだくわしく知らない。私が自分のペットを連れて行く動物病院では、獣医師の先生が1人で診てくださるので、動物看護師の実際の仕事ぶりを見ることができない。

動物看護師に求められるものとは何であろうか。飼主にとっても動物看護は大切と思われる。(2年生・楠目佳子)

看護をする動物について、深く知ることが大切だと思う。まだ動物を看護する立場にいない私は、現時点で、看護をする動物を目の前に差し出されても、きっと何もできずに、一定の距離をおいて眺めているだけだろう。その動物と関わりを持ちたいと思っても、いまの段階では何の知識・経験もないのに等しいため、ただ、とどまって右往左往してしまうだろう。

その動物が元気な時よりも病気の時の方が、動物から得られる情報は多いと思う。私たちは動物が病気の時の方が、その動物をより観察し、気持ちを読み取ろうという努力するからだ。

動物を看護することによって、彼らについてより深く知ることができ、結果として、どんな時にどんな場面で彼らと対峙しても、その場における最も適切な行動をとれるようになると思う。(2年生・杉山真知子)

私はまだ、本格的な動物看護の経験がないので、はっきりしたことは言えないが、自分の家の動物を看病している時に思ったのは、ただ一心に「元気を取り戻してほしい」という親心に近いものであった。必ず守ってあげるといった責任感をもって看護を行っていた。

特に、加齢によって足腰の弱ってしまった猫を世話した時には、猫への長年の御礼を含めた気持ちが大きかったように思う。

自分のできる限りの看護をしてあげた時には、満足できるのかもしれないが、私がいままでしてきた看護は足りないところだらけで、気持ちがさっぱりしない。

しかし、どうしてさっぱりできないのか、何が看護に足りなかったのかを考えて、これからの行動に生かしていくべきと思っている。動物看護は私に“よろこび”だけでなく、“さっぱりしない気持ち”と“考えさせられるということ”を与えてくれる。(2年生・横井 恵)

動物看護には、動物の病気やケガを治すことのみならず、動物にやすらぎを与えることも含まれると思う。人間と同じように動物も、病気やケガの時はおそらく不安で、自分の力ではどうにもならないであろう。その不安を取り除き、動物を、少しでも早く健康な状態に戻してあげることが必要だと思う。

また飼主にとって動物看護とは、動物との絆をより深めることであると思う。動物を看護することで、飼主は、動物は自分を頼っていると再認識し、動物への思いやりが増したり、これから先の、自分と動物との関わりを考えるきっかけにもなると思う。(2年生・根岸香緒里)



闘牛が意味するもの——スペイン

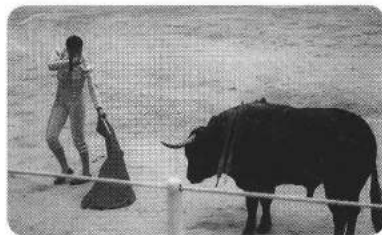
佐和子・コントレラス・中村 (在スペイン・グラナダ)



「闘牛」という言葉を聞くと、顔をしかめるか、苦笑いをする日本の方も多いようです。しかめっ面は「闘牛とは残酷な文化だから」との、苦笑いは「闘牛するのは野蛮な国だから」との意志表示でしょうか。闘牛に対して好奇心を示す方は少ないようです。

実際に闘牛を見に行った方々からは、「牛がかわいそう」「見ていられなくて途中で出てきた」という声をよく聞きます。「人間が牛を痛めつけて殺す」イメージから抜けきれなかったのでしょうか。でも、そうした懐疑的なイメージより、純粋な好奇心を介して闘牛を見ていただくと、より多くのものが見えてくると思うのです。

闘牛用の牛は、牧場で野生のように育てられることが必須です。広大な敷地に自由に放たれた状態で4～5年間育てられます。昔から闘牛用の牛は「野生で生まれて育ち、都会で死ぬ」と形容されてきました。牛肉用として「機械的に育てられ、機械的に殺される」ような牛の生き方とは決定的にちがいます。



18世紀に、有名な闘牛士ベドロ・ロメロが、闘牛の基本を打ち立てました。それは、次のようなものです——「闘牛では、まずあわてずにゆっくりと、こちら（闘牛士）が牛を見ること。次に、牛にこちらを見させること。その後、こちらが勝つこと」。闘牛は今日でも、この基本にのっとり、まるで儀式のように進行します。

闘牛士には「闘うためのスタイルやポーズ」が重視されます。闘牛士は布を華麗に振り、命を賭けて、まるで踊るようにこれを披露します。牛の動作に合わせての、闘牛士の体の反りの数々には、細かなポーズが決まっています。これが、闘牛をして芸術と言わしめる所以です。

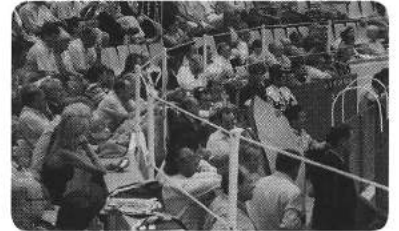
闘牛士と牛のお互いのポーズが美しく調和し、一枚の絵となり… 観客が待ってましたとばかりに「オーレ!!」とかけ声を発し… 音楽隊は一齐に闘牛ゆかりの曲を奏で出します… この呼吸の素晴らしさ！ これらのすべてが一体化した瞬間こそが、まさに闘牛そのものなのです。牛を殺すことは目的ではありません。

闘牛場に集う観客たちの様子も、また独特です。男性は、つば広の帽子を深くかぶり、目にサングラス、口には葉巻をくゆらしながら、渋くポーズをきめています。女性は、見事な刺繍を施したマントン（ショール）を肩に羽織り、小首を粋にのばして、耳に飾った花をひいきの闘牛士に投げる機会をうかがっています。

このように「存在感のある人たち」のことを、スペインでは「アルテ（芸術）がある人」と呼びます。彼らは、まるで観客

のプロのようです。「あの闘牛士は結婚したから、もう引退は近い」とか、闘牛士の心理状態などを話しています。

闘牛士に一喜一憂する観客の様子、音楽、葉巻の香り、鮮やかな美女の艶姿などに酔いしれつつ、闘牛士と牛のポーズを堪能する——これが闘牛の世界なのです。



そののち、「真実の瞬間」と呼ばれる時がやってきます。闘牛士が牛を倒す、すなわち、牛の死が決定されるか厳かな瞬間です。観客の喧騒がいっせいに息を潜めます。それは牛の死、そして時には闘牛士の死に立ち会うためです。生あるものは必ず死を迎える、この現実に向き合うためです。

闘牛士が、牛のとどめを一瞬にして刺すのに失敗するのは、大変な不名誉です。観客は断じてこれを許しません。下手くそな剣さばきのために、剣が「針の穴（牛の頸椎の間）」に入らず、死ぬに死ねない牛… 観客が「牛を死なせろ！」と叫ぶのは、早く死なせて楽にしてやれ、との慈悲の心からです。この時、その牛の牧場主は、怒りと悲しみの目をしながら、押し黙ったまま首を振っています。

一方、闘牛士は観客からの罵倒責めとなり、会場には座布団が乱れ飛びます。牛が好きで好きでしようがない、生涯「闘牛小僧」のような親爺連中がたくさんいて、彼らが、まるで拡声器でも使っているかのような罵声を、闘牛士に浴びせるのです。その多種多様の俗語には驚かされます。

動物に対する虐待を法律で取り締まる一方で、観衆の目前で生きた牛を殺す祭りを行う… スペイン人とは、ある意味で真直ななのでしょう。また彼らには、得てして感情表現のたいそう豊かな人が多いのですが、それは、人間が機械ではない証拠かもしれません。

スペインも少しずつ変わってきており、「闘牛離れ」も始まっています。現在スペインは、EU（European Union、欧州連合）諸国の一員として、国を挙げていっそうの経済発展へ向けて懸命です。

それに連れて、外国の人々があ然とするくらいの、スペインの人々のアクの強さが薄まってしまったようで、少し淋しく感じることもあります。しかし、少なくとも闘牛場だけは、それとはまだ無縁のようです。

闘牛——牛と牛とを戦わせる遊戯。牛合。徒歩または騎乗の闘牛士と牛との決死的闘技。はじめ尚武の気風を發揚させるために起り、ギリシア・ローマで行われたが、今はスペインの国技として知られる。

【広辞苑】より

書評



『動物看護学 総論・各論』

日本動物看護学会 編集・発行

日本動物看護学会・桜井富士朗副会長による本誌 Vol.7-2の会務報告によれば、『動物看護学 総論・各論』の2冊は、動物看護学の研究促進、動物看護学教育の充実と動物看護師の資質向上をはかるために、「動物看護学の基準教科書」として編集・出版されたものである。

その編集方針は、「全国的視野の認定試験の基礎となる総合的なカリキュラム内容を有する」「対象動物をコンパニオンアニマルだけに限定せず、あらゆる動物種を視野におき領域拡大を図る」「国内の執筆者により、わが国の現状に即した教科内容を有する」とされている。

通読してみて、この2冊が、上記の目的と編集方針をほぼ完全に具現化したものであるということを感じた。その点で、本書が大変優れた教科書であることは、すでに他の方々による書評でも絶賛されているので、詳しくは述べない。

*

一つだけ、これまでの書評で触れられていないが、本書のレイアウトやイラスト、「ですます」調で統一されたわかりやすい文体によって、本書が大変とつきやすい教科書になっていることを指摘しておきたい。学会の編集する資格試験の教科書としては、驚くほどフレンドリーであり、なおかつ広範で高度な内容水準を保っていることは稀有なことである。

本書は、動物看護学を学ぶ学生の教科書としてだけでなく、関連領域を学ぶ学生や動物関係職に就いている様々なプロフェSSIONナルにとっても、便利なハンドブックとして使用できる（私のゼミで動物心理学を学んでいる学部学生や大学院生にも、大変好評である）。本学会関係者以外にも広

よりよい動物看護の友として

中島定彦 (関西学院大学 文学部 総合心理科学科 助教授
—学習心理学・動物心理学・行動分析学—)

く知らせ、普及させるべき書物である。

*

以上のように大変すばらしい書物であるが、あえて注文をつける（希望する）とすれば、次の2点があげられる。

まず、対象動物をコンパニオンアニマルだけに限定しないことはよい編集方針であると思うが、動物病院に持ち込まれる犬猫の数を考慮すれば、これらの動物に関する記述は、もう少し詳しいほうが好ましいのではないだろうか？

たとえば、本書に従えば、犬の品種は400以上であるが、写真としては10品種が紹介されているだけである。犬種図鑑は小さな書店でも容易に入手できるものであり、「動物看護学の教科書」で犬種を網羅する必要はないにしても、その多様性を認識するためにも、写真紹介する犬種を増やすべきだと感じる。

動物看護師は動物だけでなく、その飼主とも触れ合う職業であることから、カウンセリングに関する基本知識も有していることが好ましい。また、同僚の動物看護師や獣医師などの職場での人間関係で、トラブルを抱えないようにするために、心理学の知識と解決法を知っておくとよいであろう。本書にはそうした事項がほとんど取り上げられておらず、これがあえて注文をつける第2点目である。

*

動物看護師は今後、社会的に注目される職業になっていくと予想されるが、その過程で、本書がさらにいっそう優れたものに改訂されていくことを期待したい。

投稿を終えて——執筆者からのメッセージ

意識レベル評価の院内統一を目指して—動物用CS考案の試み—(清水法子、杉崎香織、尾花礼子、松本美里、加藤美城子、橋本裕紀子、吉田沙耶子、新宮昌美、倉持三千恵、國宗義雄/王寺動物病院、まさき動物病院)

動物の意識レベルを観察し、院内の意思統一を図るのは難しいことですが、V-CSを考案し、日々の看護に役立てられたことは、動物看護師にとっても獣医療にとっても、一つの新しいスケールを得られたのではないかと実感しました。今後も看護技術レベルに磨きをかけ、現状に甘んじることなく邁進していきたいと思えます。今回、論文の執筆に際し、新たな知識と刺激を得ることができ、日々の活力となったことをうれしく思えます。そして、お世話になった関係者の皆様へ厚く御礼申し上げます。

動物看護師の役割の一つとしての、術前の酸素化の導入—7ヶ月の実施期間を終えて—(瀬戸晴代/西谷獣医科病院)

この論文発表の時点では、暴れる患者に対しては、無理には酸素化を行っていませんでしたが、現在ではそのような患者に対しても、より安全な麻酔導入を行うため、酸素テントを用いて術前の酸素化を行っています。今回取り上げさせていただいた麻酔管理を含め、年々動物病院において、動物看護師の役割というものが大きくなっていると思えます。その中で私自身も、“いま自分に何が出来るか”ということ日々考えながら、今後も動物看護師として成長していけたらと思っております。

悪性リンパ腫の患者における動物看護の検討(鈴木加奈子、井上五月、松本恵実、前島朱美、赤池久恵/赤池ペッククリニック)

今回の例会での発表とその後の論文執筆は、動物看護師として成長するための、とてもよい機会になりました。この経験を生かし、言葉という方法でコミュニケーションをとれない動物の気持ちを理解し、同時に、オーナーへのサポートを大切に動物看護をしていきたいと思えます。

院内衛生環境調査と対策—その5 静脈留置部位の細菌汚染に関する調査—(井上裕美子、広瀬雅子、川上早苗、剣持妙子、八十島利恵、湯本哲夫/湯本ペッククリニック)

私たちは5年間にわたり、『院内衛生環境調査と対策』というテーマで研究を行ってきました。最終的に最も重要なことは、「院内もスタッフも清潔を心がけること」だと思えます。当たり前のことですが、今後もスタッフ一人一人が自覚を持ち続けて行きたいと思っております。

院内教育方法を考える—初めて患者の情報収集をする者

の、動物看護への思いを探る—(西谷孝子/西谷獣医科病院)

私自身のライフワークとして、動物看護師の院内教育方法をテーマに掲げております。以前、私の看護研究で「看護記録の質」の検討をしたとき、質の高い記録を書く人の要因として、有位差が明らかになったのは、看護職の経験年数ではなく「看護研究の発表」の回数でした。そのことを踏まえ、当院ではスタッフに、年に1回の看護研究の発表を義務づけております。そのような環境の中で、日々成長していくスタッフの姿を見ることが出来ます。看護は、全人的な職業です。新人の頃の初々しい感性を失わずに、専門職業人としてのプライドを持って、人間的にも成長していただきたいです。ぜひ、看護を志されている方は、行っている看護をまとめてみてください。いまの自分が見えると思えます。

居心地の良い待合室作りをめざして(木村満知子、藤田理恵子、大谷美紀、佐藤亜也子、斉藤亜紀江、深井麗子、野原宏実、新井陽子、山田幸子、松沢ふみ、児矢野早紀、庄子さとみ、宮川則子、藤田桂一/フジタ動物病院)

今回、このような調査・発表・まとめを行ったことにより、日頃の受付での対応の大切さを再認識することができました。飼主の立場や考えを知り、要望にこたえられるような対応ができるように、これからも頑張っていきたいと思えます。

動物介在教育(AAE)の効果と今後の課題—幼稚園におけるAAEを中心として—(木場有紀、谷田 創/広島大学大学院 生物園科学研究科)

近年の犯罪の低年齢化、凶悪化に歯止めがかかる様子はありません。様々な要因が関与していることは言うまでもありませんが、幼児期の生き物との触れ合い体験も心の発達に大きな影響を及ぼします。惰性的飼育という現状から脱却して、「動物福祉の保障を前提とした幼児の心を育む動物介在教育」を発展させていくことが、問題解決の一助となるのではないのでしょうか。

コンパニオンアニマル(犬)喪失後の飼主の心理過程—犬の喪失原因別にみた、飼主の喪失感情—(濱野佐代子/白百合女子大学大学院 文学研究科)

飼主さんとコンパニオンアニマルの愛着が深いほど、ペットロスによる悲しみは大きいと思えます。しかし飼主さんたちは、悲しみだけでなく喪失から「得たもの」についても語っていました。これからも、飼主さんたちの声をもとに、「人とコンパニオンアニマルの愛着と喪失」についての研究を積み重ねていきたいと思えます。

〈お知らせ〉

より良い動物看護の方法、たとえば、臨床知識に関する学習や研究、飼主や院内スタッフとのコミュニケーションについての検討、トリミング業務の活用などについて、毎日の業務の中で問題意識として強く感じていることや、すでに工夫して実践していることが、きっと、どなたにもあるのではないのでしょうか。

ぜひ、それらを体系づけてまとめて、例会や学会誌の場で積極的に発表してませんか？ あなたの自身の成果は発表を通じて、会員ひいては全国の動物看護師の皆さんのとても大きな参考、励ましとなります。

決して楽な作業ではありません。しかし発表者ご自身が認識を深め、さらに前進されるための素晴らしい機会になると思えます。

発表形式および執筆方法につきましては、学会事務局までお問合せください。どのようなことでもよいお問い合わせ先です。郵便、お電話、またe-mailでのお問合せもお受けしております(連絡先は、この会誌の最終ページにございます)。

わが国の動物看護学を作るのは、動物看護師の皆さん自身です。皆さんのご応募を心からお待ちしております。



ネコと暮らせばー下町獣医の育猫手帳ー

野澤延行 著 220ページ 700円＋税
集英社新書 (集英社 tel.03-3230-6393)

猫は本来外で暮らす動物です。しかし近年、特に都会では、地域が共有する空間や住宅などの事情から、猫の室内飼いが推奨され、ともすればその本性や習性が抑えられがちです。本書には、お互いに自立心の強い猫と人が、共に生きるための具体策がたくさん書か

れています。なお野良猫は、自然保護の立場からは、生態系を乱す移入種に含まれてしまうそうです。

〈主な目次〉

縁あって猫の飼主となる／猫には猫の秘密がある／猫を室内で飼う／野良猫とのつきあい方／猫と暮らすということ (高齢の猫、災害時の避難、ペットとの別れ)／猫の食事 (猫は魚好き?)／猫の健康 (応急処置)／猫の家庭医学 (感染症、皮膚疾患、外耳炎、乳腺腫瘍、口腔疾患、神経疾患、寄生虫病、他)



家族ペットーやすらぐ相手は、あなただけー

山田昌弘 著 202ページ 1400円＋税
サンマーク出版 (tel.03-5272-3166)

日本の家族とは、戦前は家業維持のための労働力、戦後～高度成長期は「豊かな生活に向けて努力しあう、かけがいのない関係」であった。そしてバブル崩壊の90年代以降は、社会の厳しさから逃れるために「心のやすらぎや絆」を家族に求めたが、現実の家族は高す

ぎる期待にこたえられない。最近のペットとは、まさに「理想の家族の投影先」ではないか——と本書は考察します。著者は東京学芸大学教授で、家族社会学が専門。一般書なので平易。

〈主な目次〉

家族ペットが日本を変える?／家族ペット論の提唱／家族ペットに求めるもの／インタビュー・家族ペットと暮らす人々／家族の中のペットの「位置」／家族ペットが日本を救う



くらしの法律相談 No.19

ペットの法律知識とQ&A (改訂版)

木ノ元直樹・古笛恵子 編著 244ページ 2000円＋税
法学書院 (tel.03-3943-1721)

環境省は今年1月に、獣医学・法学・ペット販売関係者を含む委員会を設置し、2000年12月に施行された「動物の愛護及び管理に関する法律」(動物愛護法または動愛法) 見直しのための検討を始めています。さて、

こうした動向とは別に、飼主さんから日頃持ちかけられる様々な相談事に対して、法律の裏付けがあるアドバイスができれば喜ばれることでしょう。本書にはこうしたQ&A79例がやさしく解説されていて便利です。

〈主な目次〉

飼えるペットの数に制限はあるか／ペットの毛を刈ったり、ペットに服を着せたりすることは自由か／ペットは自由に売り買いできるか／ペットの美容院の責任問題／獣医療過誤訴訟と判例紹介



第6回日本臨床獣医学フォーラム

年次大会 2004 | 学ぼうとする熱意

2004年9月18～20日 (土～月) 東京都千代田区・ホテルニューオータニ



今大会のVTフォーラムは計26セッション (各60分) が行われた。ここでは3セッションの講義概要を報告する。

「歯周病は顎の骨がとける病気：歯周病は痛い？」 奥田綾子先生 (Vettec Dentistry) 口内の痛みの原因となる顎骨、歯、粘膜の3領域の構造解説も交えながら、歯周病 (すなわち歯槽膿漏) の病態発生についての講義が進められた。粘膜の疼痛 (歯肉炎、口腔粘膜の炎症、激痛を伴う慢性潰瘍性歯肉口内炎)、粘膜と顎骨の疼痛 (若年性歯周炎)、顎骨の疼痛 (根尖性歯周炎)、口鼻瘻管の閉鎖 (歯周疾患による口鼻)、歯周疾患や破折歯から生じた根尖周囲病巣など、多くの貴重な所見スライドを基に解説が進められた。

歯周病の影響は顎、顔面、全身から胎児にまで及ぶ。これを防ぐための口腔内衛生管理のポイントとしては、「好きな事をする前にちょっと歯を見せてもらう習慣をつける」「最も汚れている上の歯の外側を磨くには、口を閉じて行うとよい」「歯周病になりやすい犬種への注意：ミニチュアシュナイザー、マルチーズ、アメリカンコッカースパニエル」な

どが示された。歯は自然に抜けず、病気になって抜ける。従って適切に抜かねばならないことを再認識した。

「高齢犬・猫の栄養学」 永柄貴子先生 (アイムス・ジャパン株) 高齢の犬猫における身体学的変化は、免疫力の低下、ボディコンディションの変化、腸機能の低下、変性性関節疾患、歯周疾患の増加において顕著である。講義では、これらに対して「適切な栄養学的サポート」が可能であることが、詳しく解説された。

「免疫力の低下」ではビタミンEやベータカロテンの補給が、T細胞やB細胞を活性化して免疫反応を改善すること、「ボディコンディションの変化」では蛋白質の量と質、L-カルチニン、クロム、低脂肪が有効であること、「腸機能の低下」における適度な発酵性の線維質の有用性、「変性性関節疾患」における体重管理と栄養調節の必要性、が述べられた。

また「歯周疾患の増加」では、海外データから成犬の85%以上がこれを有していたこと、飼主によるデンタルケアのいっそうの普及が望まれることに触れられていた。

「気持ちよい受付対応、診察室に迎えたら、入院中の気遣いをみんなで考えよ

う) 山村穂積先生 (北川動物病院院長)

接遇における基本事項として以下の3点が挙げられた——「礼儀や動物の様子を知る意味からも、来院時の適切な挨拶」「初診者へは速やかにかつ細やかな誘導。「紹介が飛び込みか」に適した対応」「再診者へは挨拶に加えた二言三言で、より深い関係作り」。そして何より飼主さん、他の来院者、院内関係者の全員に対する平等な対応が大切とされた。

待合室におられる飼主さんに対しては「一人ぼっちから感じる不安感を、会話によって除いてあげる」、診察室に迎えたら「否定形で話さない。動物は敏感なので「痛いけどがまんしてよ!」とあおらずに、「ほーら痛くないよ」と言って紛らわして瞬時に処置する」などの具体的なポイントが多く指摘された。

忙しい中での配慮は難しいものだが、自分の仕事への誇りと相手を思う気持ちさえあれば、色々工夫できると感じた。

会場では、当学会員の動物看護師の方々とも多くお話しできた。病院の休日にも熱心に参加される姿には頭が下がる。こうした勉強会は、業務の肉付けとなる様々な知識を増やす絶好の機会と思う。ぜひ、日本動物看護学会の大会や例会へも、よりいっそうの積極的な参加を待っています。今後は講義内容への動物看護師の皆さんからの意見や注文を、ぜひ活発に寄せてほしいと思います。(上野)

平成16年度 動物看護研究助成金事業（アニコム助成金） 発足のお知らせ

日本動物看護学会では、動物看護学についての体系的教科書『動物看護学（総論・各論）』の発行や「動物看護師資格認定試験」の実施など、動物看護師育成のための各種事業を積極的に行って参りました。そしてこのたび、動物看護学のいっそうの発展を促すべく「動物看護研究助成金事業」を発足させます。

この助成金は、動物看護師の皆様が自発的に行っておられる研究会や学会などに対して、運営費用などの一部を学会側で負担し、その研究活動を支援することを目的としています。

動物看護師向けのセミナーや講習会は、当学会主催のものをはじめ数多く催されていますが、地方在住のため、または勤務上の都合などの理由からこれらに参加できず、学習の機会を失っている方も多いためです。

この助成金事業とは、こうした皆様が、地元の動物看護

師の方々同士で自主的に集い、動物看護師としてのスキルアップをするための勉強会・学習会を行うことを、支援するものです。

毎日の看護業務は大変お忙しいことと思いますが、この制度を利用して資金面での助成を得て、まずは小さな規模からでもよいので、こうした場を作られてはいかがでしょうか。日々学習を続けて、動物看護のエキスパートをめざしましょう。

日本動物看護学会 会長 今道友則

※この事業は、アニコム（動物健保）からの助成金援助協力を得て実現いたしました。当学会の活動全般ならびに、当学会による「動物看護師の生涯学習の推進」の趣旨にご賛同をいただきましたアニコムの小森伸昭理事長に、厚く御礼申し上げます。

平成16年度 動物看護研究助成金事業（アニコム助成金）募集要項

1. 主旨

この助成金は、動物看護学の発展を図るため、日本動物看護学会（以下「学会」）が必要と認めた研究会に対して交付するものである。

2. 募集期間

2004年11月1日（月）～

2005年2月28日（月）17時必着

3. 助成対象研究会開催期間

研究会の開催は下記の期間内に行うこと。

2004年11月15日（月）～2005年3月31日（木）

4. 助成対象研究会内容（分野）

動物看護学全般。その他、学会が認めた内容。

5. 助成対象経費

会場費、交通費、謝礼金、機材費、他の経費。

6. 助成対象者

代表発起人は本会認定の動物看護師で学会員*であること。参加者は5名以上で、そのうち学会員*が2名以上含まれること。*学会員とは、会費を滞納していない本学会一般会員。

7. 助成金額

1 研究会につき20,000円。*平成16年度研究助成金予算枠は200,000円（10研究会）とする。

8. 「申請から助成金受取まで」の流れ

① 申請書の提出

所定の書式に従う申請書類を下記事務局宛に郵送にて提出してください。*申請書類は学会事務局より郵送します。

② 交付決定の通知

審査の上、書面にて交付決定を代表発起人宛に通知し、30日以内に指定の銀行口座へ振り込みます。*振り込み手数料は学会で負担します。

③ 報告書

研究会終了後10日以内に、所定の書式に従う報告書および会計報告書を、学会事務局宛に郵送にて提出。

9. その他

① 助成を受けた研究会の実施報告は、当学会の学会誌・ニュースレターおよびホームページなどに掲載されます。またアニコムの機関誌・ホームページなどに掲載されることがあります。

② この研究会への参加は、当学会の「動物看護師」資格認定者に対する「学習ポイント」の対象になります。

〔お問合せ先・提出先〕

〒104-0032 東京都中央区八丁堀3-9-8

新京橋第一長岡ビル5F

日本動物看護学会 研究助成金係

TEL 03-3537-6920

FAX 03-3537-6921

第4回「動物看護師資格認定試験」のお知らせ（主催：日本動物看護学会）

試験要項

試験日時 2005年3月13日（日）

試験開催地 仙台、東京、名古屋、大阪、福岡（予定）

願書請求

2004年12月中旬より（予定）

- FAX または郵便で申込受付（必要事項：住所、氏名、電話番号、必要部数）。
- 願書請求料1,000円が必要となります。

出願期間

2005年2月上旬～下旬（予定）。郵便受付となります。

受験資格

受験資格1【新卒者もしくは既卒者対象】

- ①文部科学省の定める高等学校を卒業し（もしくは、それと同等以上の学力があると認められ）、動物看護専門教育機関において、2年以上の専門教育課程を修了した者（修了見込みの者）。
- ②その他、①に相当すると日本動物看護学会が認める者。

受験資格2【現職者対象——移行措置のための試験】

動物看護に関わる実務経験が4年以上の者。ただし実務経験4年間は、以下の1～3によって取り扱うことができる。

1. 動物看護専門教育機関1年制を卒業した場合には、就業年数3年以上の者
2. 動物看護専門教育機関2年制を卒業した場合には、就業年数2年以上の者
3. 動物看護専門教育機関3年制を卒業した場合には、就業年数1年以上の者

受験料

筆記および実地試験 15,000円

実地試験のみ 10,000円 ←当学会による「補習教育講座」修了者に限る

- 認定試験合格者は、資格登録料10,000円が必要となります。また、2年ごとの更新時に資格更新料（会員10,000円、非会員20,000円）が必要となります。

受験科目

1. 筆記試験
本会が発行する教科書『動物看護学（総論・各論）』に準拠した内容を出題範囲とする。
2. 実地試験
動物看護法および臨床検査法など動物看護に関わる業務全般について、写真およびビデオ等により出題する。

最新情報は随時、学会ホームページへも掲載いたしますのでご確認ください。

または、学会事務局までお問合せください。

（主催）日本動物看護学会

東京都中央区八丁堀3-9-8 新京橋第一長岡ビル5階

TEL. 03-3537-6920 FAX. 03-3537-6921 <http://www.jsan.org> jsan_info@jsan.org（Eメール）

日本動物看護学会規約

第I章 総則

1. この学会は、日本動物看護学会と称する。
2. この学会は、動物看護に関する研究を中心として、関連する諸領域相互の情報交換の場を設け、この分野における研究の進展を図ることを目的とする。
3. 前述の目的を達成するため、次の事業を行う。
 - ① 動物看護師の諸問題についての事業
 - ② 会員の研究発表、シンポジウム、ワークショップ等の開催
 - ③ 学会誌などの発行
 - ④ 目的を達成するために必要なその他の事業

第II章 会員

1. この学会への参加はこの分野に従事する者および関心を有する者とする。
2. この学会の会員は、正会員および賛助会員とする。
3. 正会員は、この学会の主旨に賛同し、会費を納付する個人とする。ただし2ヵ年度分以上滞納の場合は退会とみなす。
4. 賛助会員はこの学会の目的事業を賛助し、賛助会費を納付する者とする。
5. 会員は学会の主催する研究発表会などに参加し、この学会の発表する出版物などの優先的配布を受けることができる。

第III章 役員および会議

1. この学会には次の役員をおく。
会長（1名）・副会長（3名以内）・監事（2名）・事務局長（1名）・理事（若干名）
2. 理事および監事は、総会において正会員の中から選任される。
3. 会長、副会長、事務局長は理事の互選により選出される。
4. 会長は、この学会を代表し、会務を総理する。会長に事故ある時は、副会長がその職務を代行する。
5. 理事は、総会の承認を受けて決定される。
6. 理事は、理事会を組織して会長を補佐し、この学会の運営に当たる。
7. 理事は、互選により事務局長を選出し、事務局長は事務局幹事を任命し、運営の実務を司る。
8. 役員任期は2ヵ年とし再任を妨げない。
9. この学会には、評議員若干名をおく。
10. 評議員は総会において正会員の中から選任され、第III章の規定が準用される。
11. 学会活動に功績のあった会員を、顧問とすることができる。顧問は理事会が推薦し、総会において決定される。
12. 通常総会は、毎会計年度終了2ヵ月以内に会長が招集する。
13. 臨時総会は、会長または理事会が必要と認めるとき、いつでも招集できる。
14. 理事会は随時会長が招集する。

第IV章 会計

1. この学会の経費は、会費その他の収入をもってこれに当てる。
2. この学会の会計年度は4月1日に始まり3月31日に終わる。
3. 理事会は、毎会計年度の収支決算を通常総会に報告し、承認を受けなければならない。

付 則

1. この学会の会費は、年額理事6,000円、正会員3,000円、賛助会員一口30,000円以上とする。
2. この定款は1995年12月9日より施行する。
3. この定款の変更は総会の議決による。
4. この学会の議決は出席者の過半数の賛成をもってする。
5. この学会の事務局を東京都千代田区猿楽町2-6-3におく。

注) 2003年8月より右記に移転：東京都中央区八丁堀3-9-8 新京橋第一長岡ビル5階

1995年12月9日制定

1997年11月29日改正

1999年6月6日改正

【役員】(敬称略・順不同)

会 長	今道 友則 (日本獣医畜産大学名誉教授)	
副 会 長	桜井富士朗 (桜井動物病院)	
	廣田 順子 (アリスどうぶつクリニック)	
	渡辺 茂 (慶應義塾大学)	
事 務 局 担当理事	柴野 悟 (動物病院モルム)	
事務局長	村中 志朗 (広尾動物病院)	
理 事	大城 朋子 (四街道動物病院)	大和田一雄 (山形大学)
	小杉正太郎 (早稲田大学)	高橋 和明 (日本獣医畜産大学)
	田中 吉春 (㈱アイビーテック)	和 秀雄 (広島国際大学)
	幅田 慶子 (センターヴィル動物病院)	長田 久雄 (桜美林大学)
	林 良博 (東京大学)	秋葉 亮子 (あいち動物病院)
	若尾 義人 (麻布大学)	中俣由紀子 (かしま動物病院)
	酒井 健夫 (日本大学)	牧田 登之 (元 山口大学)
	村中 志朗 (広尾動物病院)	小松 千江 (新ゆりがおか動物病院)

【監 事】(敬称略・順不同)

竹内 吉夫 (看護編集者) 高見澤重昭 (弁護士)

【評議員】(敬称略・順不同)

植松一良(昭島動物病院) 佐久間明美(編集者) 岡ノ谷一夫(千葉大学) 清水誠(まこと動物病院) 内野富弥(動物エムイーリサーチセンター) 仲間一雄(元 日本医科大学) 青木信夫(㈱エイシス) 白井玲子(白井犬猫病院) 石原絵里(白百合女子大学) 斎藤徹(日本獣医畜産大学) 信永利馬(東北大学) 紺野耕(元 日本獣医畜産大学) 小方宗次(麻布大学) 辻弘一(辻動物病院・東京都獣医師会) 富沢保浩(実験動物技術師) 朝田則子(看護師) 戸塚耕二(明和学園短期大学) 森裕司(東京大学) 伊藤勇夫(千葉大学) 青木香代子(青木動物病院) 高倉はるか(相川動物医療センター・帝京科学大学) 山崎由美子(理化学研究所) 種子康太郎(聖徳大学) 甲田菜穂子(関西福祉科学大学) / 以降は第10回定時総会(04.6.13)にて選出——
ニュースレター vol.20にて既報済 加藤清雄(酪農学園大学) 椿志郎(北里大学) 金山喜一(日本大学) 高橋英司(帝京科学大学) 坂田省吾(広島大学) 杉山尚子(山脇学園短期大学) 安藤孝敏(横浜国立大学) 石橋晃(日本科学飼料協会) 佐藤克(佐藤獣医科) 渡辺隆之(エム・ビー・ネットワーク) 島田真美(ペットフードラボ) 金児恵(東京大学大学院) 赤池久恵(赤池ペットクリニック) 池田千佳子 三嶋淳子(日本動物看護学会事務局) 谷茂岡良佳(財日本動物愛護協会) 中井江梨子(どうぶつ眼科 アイベット) 西谷孝子(西谷獣医科病院) 金川里津(入江動物病院) 草山太一(昭和大学)

【投稿規定】

(1997年11月1日施行)

(2002年9月10日改正)

日本動物看護学会 会誌

『Animal Nursing (アニマル・ナーシング)』

(Journal of Japanese Society of Animal Nursing)

1. 投稿論文は動物看護領域に関する未発表の英文の Full Paper (原著)、Note (短報)、Review article (総説)、および和文の原著、総説、技術講座、資料、論文紹介、トピック等とする。
2. 著者または共著者は会員、非会員を問わない、また投稿料は無料とする。
3. すべての投稿論文は編集委員または編集委員会が委嘱した論文審査員が審査し、編集委員会が採否を決定する。編集委員会は原稿の訂正を求めたり返却したりする場合がある。動物の福祉面に問題のある論文は採択しない。
4. 原著論文の構成は各分野の慣習に従うが、要約 (Summary)・序文 (Introduction)・材料と方法 (Material&Method)・結果 (Result)・考察 (Discussion)・引用文献 (Reference) から成ることが望ましい。
5. 要約は欧文 (または和文) とし、150語前後で内容を簡潔にまとめ、3～5語の Key Word をつける。原著論文以外の報文も、欧文表題を必ず付け、欧文要約があることが望ましい。
6. 和文原稿は新仮名遣いとし、なるべく当用漢字を用い、外来語と生物の和名は片仮名とする。原稿はパソコンまたはワープロを用いて A 4 判用紙に作成する。手書きの場合は A 4 判横書き原稿用紙を用いる。欧文原稿は厚手のタイプ用紙にダブルスペースでタイプし、左端 2.5cm あける。
7. 文献は本文に引用したものに限り、アルファベット順に記載する。個々の文献の記載例を下に掲げる。
〔雑誌〕 著者名 (発行年次) 表題名, 掲載誌名, 巻数: 最初の頁-最後の頁: 発行所.
例 1) 赤池久恵 (2001) 糖尿病の犬と飼い主への関わりを通して看護指導の意義を考える, アニマル・ナーシング, 7: 4-19: 日本動物看護学会.
2) Dennis, R (1997) Veterinary Diagnostic Imaging: into a new era, Veterinary Nursing, 12: 12-13: J. B. V. N. A.
〔書籍〕 著者名 (発行年次) 書名: 最初の頁-最後の頁: 発行所.
例 1) 熊倉正樹ほか (2002) 動物看護学各論: 50-51: 日本動物看護学会.
2) Paul W. Pratt (1994) Medical, Surgical and Anesthetic Nursing for Veterinary Technicians: 259-342: American Veterinary Publications, Inc., Goleta.
8. 図および表の番号は「Fig. 3, Table. 2」または「図3、表2」のようにする。図と表は本文原稿とは別にして、挿入希望箇所を本文原稿中に指定する。図が手書きの場合には黒インクを用い、白地用紙あるいは青罫のグラフ用紙を用いる。
9. 上記以外で執筆中の詳細は、執筆者に配布される執筆要綱による。
10. 著者校正は初校までとする。原則として誤植の訂正に限り、新たな文章やデータを付け加えることはできない。また、原稿、原図などは、著者に返却される。
11. 投稿論文については、カラー印刷に要する費用は著者の負担とする。
12. 別刷論文は1編につき50部まで無料、それ以上は著者の負担とする。
13. 本誌に掲載された論文の著作権は、日本動物看護学会に属する。

※詳しいことは、学会事務局 (編集担当) までお問い合わせください。ご相談を承ります。

■ 編集後記 ■

待望の平成16年度第1号会誌が完成しました。本会認定の動物看護師資格が昨年9月に誕生してから、1年が経過しました。

本年2月の池袋サンシャインシティ（第15回例会、日本獣医臨床病理学会と共催）、3月の第2回動物看護師資格認定試験、6月の慶応義塾大学（第13回大会、第10回総会）、8月の都市センターホテル（第16回例会、日本獣医内科学アカデミー総会と共催）と中級教育講座（本会認定の動物看護師資格者を対象）の開催、9月の第3回動物看護師資格認定試験と、息つく暇ないスケジュールをこなしながら、本会は着実に成長を

続けております。

この間の動物看護師の、一般演題における発表・質疑応答の内容の急速な充実ぶりには、目をみはるものがあります。新生動物看護師がいよいよ主体的に行動を開始し、動物看護学のレベルを全体的に押し上げています。本会が準備する例会・大会などのあらゆる場は、まもなく動物看護師の自主企画であふれかえることとなります。学会誌も同様に、投稿原稿であふれて掲載待ちになるくらいの活況を期待しています。

このたびの新潟県中越地震にて被災された皆様に、
(F.S.)
心よりお見舞いを申し上げます。

日本動物看護学会編集委員会

■編集長 桜井富士朗（桜井動物病院・帝京科学大学）

■副編集長 甲田菜穂子（関西福祉科学大学）

■編集委員 太田能之（日本獣医畜産大学）

草山太一（昭和大学）

栗野 悟（動物病院モルム）

小松千江（新ゆりがおか動物病院）

高倉はるか（相川動物医療センター・帝京科学大学）

竹内吉夫（看護編集者）

種市康太郎（聖徳大学）

中俣由紀子（かしま動物病院）

牧田登之（元 山口大学）

村中志朗（広尾動物病院）

D T P：日引さつき、伊原英治、寺尾征枝

学会事務局：北村哲雄、吉田健一
メンドーザ取子、船木生子
三嶋淳子、上野 純（編集担当）

（五十音順）

日本動物看護学会 会誌

Animal Nursing (アニマル・ナーシング) Vol.9 No.1 (第9巻 第1号)

2004年11月15日 第1刷発行

定価 2,000円 (税込)

本誌の購読料は会費に含めて徴収しています。

編集 日本動物看護学会編集委員会

発行人 今道友則

発行 日本動物看護学会 (会長 今道友則)

〒101-0032 東京都中央区八丁堀3丁目9番8号

新京橋第一長岡ビル5階

TEL 03-3537-6920 FAX 03-3537-6921

e-mail jsan_info@jsan.org

ホームページ <http://www.jsan.org>

D T P制作 株式会社アグレ

印刷 松澤印刷株式会社

学会の最新情報は、
左記のホームページでも
随時お知らせしております。

本誌の内容を無断で複写・複製・転載することを禁じます。

表2

大日本製薬株式会社

巻末・表3

株式会社 インターズー

目次裏

日本ペットフード株式会社

表4

日本ヒルズ・コルゲート株式会社

巻末

イソップ薬品株式会社

アイムス・ジャパン株式会社

森久保薬品株式会社

武田シェリング・プラウ アニマルヘルス株式会社

有限会社 友愛メディカル

バイエル メディカル株式会社

アニコム

深大寺動物霊園

マスターフーズ リミテッド

誠にありがとうございます。

開業獣医師と 共に歩む

Aesop



動物用医薬品の総合商社
イソップ薬品株式会社

〒174-0041 東京都板橋区舟渡2-6-20
電話 東京03(5994)2711番代 FAX03(5994)2714番
〈フリーダイヤル〉0120-203130番

犬・猫の栄養学で世界のリーダーを目指すプレミアムペットフード



ユーカヌバ
Eukanuba

IAMS
アイムス

ユーカヌバ・ペテリナリーダイエット

Eukanuba
VETERINARY DIETS

先生方のペイシエントのために



毎日の健康管理をサポートするサプリメントです。

病気に負けない体作りや、病中・病後、加齢や疲労による体力低下など、さまざまな時にどうぞ。

ROYAL-POWER 30ml×10本

ペットだって疲れてる・・・

ビタミンC・ビタミンB群・コラーゲン・ローヤルゼリー等を配合した、ペットのための栄養飲料です。

ウサギやフェレット・小鳥・ハムスター等にもどうぞ。

体力回復や栄養補給に、そのまま飲むだけでなく、

水や食餌に混ぜるなど、

毎日あげても安全です。

ドライフードにかけて

軟らかくすると、

喜びます。

様々な場面でお使い

いただけます。



細胞を構成するアミノ酸が注目されています。

天然シルクアミノ酸は、体内への吸収率が95%以上という優れた機能性食品です。

6歳以上の小型犬(5kg以下)に、

特にオススメです。

1日1包(小型犬の場合)を

餌にかけても、水に溶いても。

元気ができるので、

効果がすぐに分かります。



300mg×30包

動物用天然シルクアミノ酸

M 森久保薬品株式会社

〒243-8531 神奈川県厚木市栄町1-18-17

TEL: 046-222-2333 FAX: 046-222-1266 (営業本部)

東京: 042(564)2381

埼玉: 042(968)0881

群馬: 027(230)3322

つくば: 0296(43)1661

神奈川: 046(221)0620

山梨: 055(224)5278

成田: 0476(40)5811

茂原: 0475(24)1613

栃木: 028(661)9581

茨城: 029(241)3131

三郷: 048(948)2112

シクロスポリン0.2%眼軟膏

オプティミューン[®]眼軟膏

Optimmune[®] Ophthalmic Ointment

愛犬に潤いのまなざしを…

ドライアイに朗報です!

- 犬のドライアイ(乾性角結膜炎)の症状を改善します。
- 特に涙液産生量の増加に優れた効果をします。



オプティミューン眼軟膏

プロポフォール1%製剤

ラピノベット[®]

Rapinovet[®]

犬と猫の安全で速やかな全身麻酔の導入に

- プロポフォールを1%含有する静脈注射用全身麻酔薬です。
- 犬と猫の吸収麻酔による全身麻酔時の、速やかで質の高い麻酔導入を可能にします。
- 有効成分の速やかな分布、代謝、排泄と低い蓄積性が特徴です。



ラピノベット



武田シリング・プラウ アニマルヘルス株式会社 コンパニオンアニマル事業部
東京都千代田区三番町5-7 TEL 03-3511-2032 FAX 03-3511-2541

Welch Allyn
米国 ウェルチアリン社

優れた品質と性能で定評の米国ウェルチアリン社から
BIO 双眼倒像鏡125型

◇倒像検査のメリット

- ・広範囲に眼底が観察できますので、患畜が動いても追従が容易です。
- ・直像検査のように患畜と至近距離で接しませんので、相手に必要以上の恐怖感・ストレスを与えず、事故も少なくなります。
- ・散瞳が不十分な小瞳孔状態でも楽に眼底の観察が行えます。



- 病院設備一式
- 眼科診断器具

- ドイツ U-TECH ブランド外科手術器具輸入発売元
- スイス HUCOブランド眼科手術器具輸入発売元

- ウェルチアリン社製品販売代理店

有限会社 友愛メディカル
〒333-0815 埼玉県川口市北原台2-6-22
グランベルデ北原台407
TEL:048-291-0655 FAX:048-298-5886

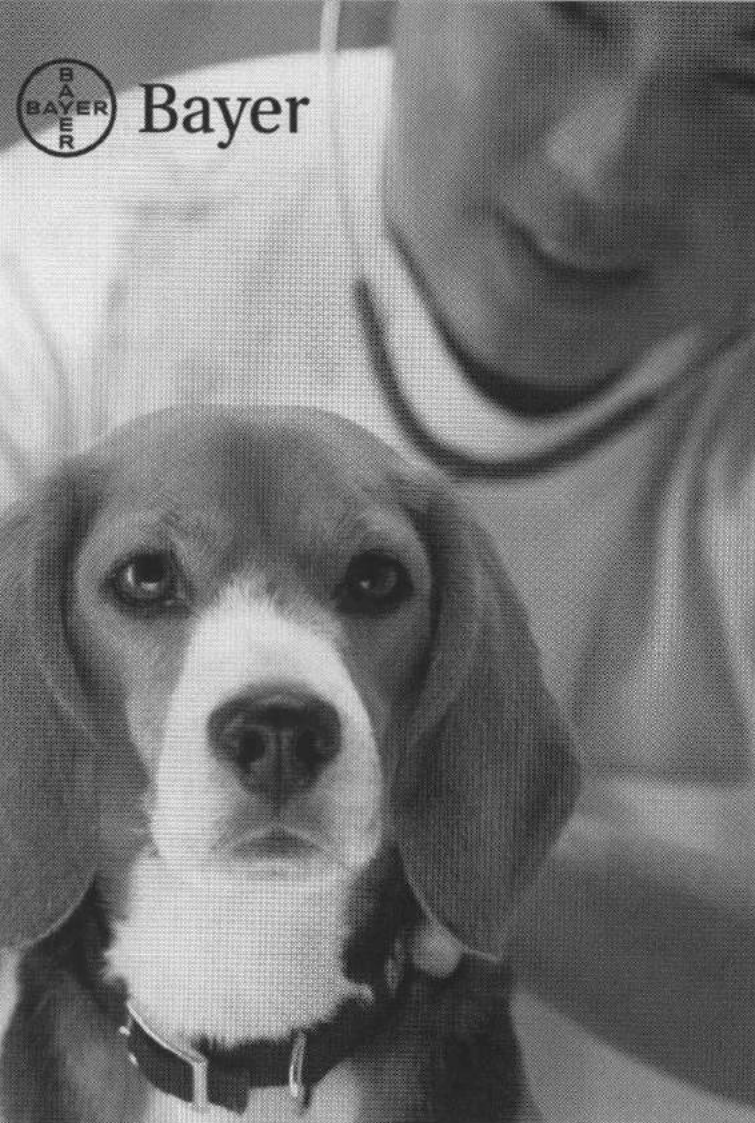
U-TECH手術器具販売代理店

- 中京地区 (有)メディカル技研
TEL:0568-52-0138
- 九州地区 (有)徳島医療器
TEL:092-596-6562

- 愛知県春日井市白山町3-19-15
FAX:0568-52-0757
- 福岡県大野城市上大利829-10
FAX:092-596-8525



Bayer



獣医さんは、知っています。
「人獣共通感染症」から、
ペットとあなたを守る方法を。

Z.C.

Zoonosis Control [ズーノーシス・コントロール]

人とペットが、もっといい関係であるために。

いま大きな関心を集めている

「人獣共通感染症 Zoonosis (ズーノーシス)」は、
正しい知識を身につければ、予防することが可能です。

いま、ペットから人に感染する病気「人獣共通感染症」が世間を騒がせていますが、そのなかには「動物病院で予防できるもの」があります。たとえば、ペットに寄生している「ノミ」や「マダニ」、あるいは回虫やエキノコックスといった「おなかの虫」が原因となるズーノーシスは、「正しい知識」を身につけ、日頃から「定期的にペットの虫を駆除」するなど「衛生的に飼育」することで、未然に防ぐことができるのです。まずは、動物病院にご相談ください。世界140カ国で確かな信頼を得ている私たち〈バイエル〉は、人とペットのもっといい関係を目指して、獣医さんとともに「ズーノーシス・コントロール (Z.C.)」を応援しています。

Z.C. [ズーノーシス・コントロール]に関するお問い合わせは、
0120-12-6471 [10:00~17:00 (土日祝休み)]
www.zc-info.com

anicom receptor

アニコムレセプター

どうぶつ健保のアニコムが監修した
使いやすいカルテ管理ソフト

動物病院の先生の声がカタチになりました!



こんな機能が欲しかった!
分かりやすい!
低価格!

全国約2500 (2004年9月現在) の健保制度対応病院
の先生方からのお声を基に作成したオリジナル。信
頼と実績をカタチにしました。ぜひお試しください。



飼主さま・患者さま・
診療情報の保存と検索



予防の記録と
連動するDME印刷



各種証明書・報告書印刷



お会計
請求書・明細書・領収書印刷



受付・待合管理



予約管理

ご費用は
年間 **¥30,000** から

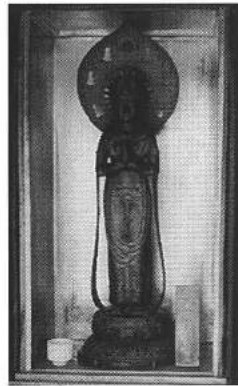
詳しい情報は <http://www.ani-com.com/> 動物病院サポート ▶ アニコムレセプター

ご質問・資料
のご請求は anicomreceptor@ani-com.com
TEL : 03-3565-8256 FAX : 03-3565-8269

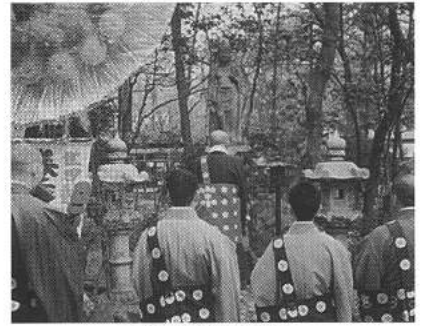




彼岸大法要



御本尊十二支観音像



鳥獣観音像



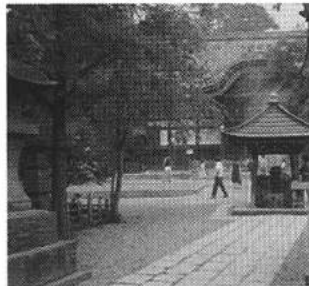
里親さがし



万霊塔納骨堂



霊園受付



深大寺



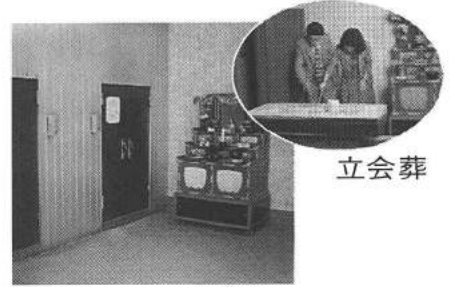
魚霊祭



合同納骨所



個別霊座

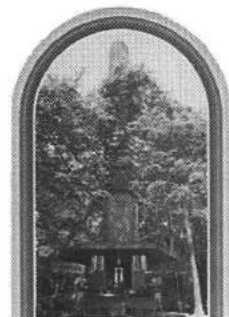


火葬場

立会葬

43年の歴史と実績

緑に囲まれたペットの霊園



万霊塔

お迎え専用車・火葬場(火葬炉3基)
合同火葬・個別火葬・立合火葬
納骨堂(合同・個別)・(ご返骨も可)
春秋大法要・盂蘭盆会
畜霊大祭 等の年中供養

もしもの時は まずお電話下さい

《365日無休》

世界動物友の会

深大寺動物霊園

フリーダイヤル ^{ニャンワン ゴクヨオ} 0120-21-5940

〒182-0017 東京都調布市深大寺元町5-11-3(深大寺境内)

もっとおいしい

食事療法食があってもいい。

私たちはそう考えました。



ウォルサムと、ロイヤルカナンがひとつになりました。

このたび、ペットフードとペットケアの基準を世界に発信するウォルサムと、優れた製品開発力を持ち、犬・猫の動物としての生体を徹底して研究しているロイヤルカナンが統合されました。この結果、ペットがよりおいしく食べてくれる療法食を、従来製品に比べ、さらにきめ細やかなラインアップでお届けすることができるようになりました。獣医師の皆様、ペットオーナーの皆様、そして、大切なペットのために。私たちは、サポートを続けることをお約束いたします。新ラインアップ



犬用
ウェイトコントロール



犬用
低分子プロテイン



犬用
消化器サポート(ファイバー)



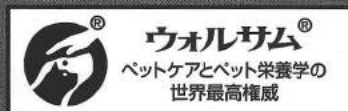
猫用
糖コントロール



猫用
低分子プロテイン



猫用
消化器サポート





アニマルスペシャリストのための
ワークマガジン「月刊 アス」

animal
specialist



現場で役立つ実践的な情報が満載

- 「飼い主さんのため動物のため、より知識を深めたい」
- 「一生の仕事として誇りをもって働きたい」
- 「アニマルスペシャリストの横のつながりを広げたい！」

そんな読者の皆さんの要望に「as」がお応えします！

動物看護に必要な学習情報を<知識>と<実践>を意識した2本立てで展開

基礎獣医学から飼い主さんの心のケア、クレーン対応法などのコミュニケーションスキルまで、多角的な視点で動物看護師に必要な知識、技術をフォローします。またトリング記事にも対応。イラストや写真を多用して分かりやすく読みやすいデザインで！

読者間の<交流>を「as」が積極的にバックアップ！

悩み相談や読者間の意見交換の場を誌面に反映。また、動物看護師同士の「横のつながり」を提供することを目的にas CLUB会員を募り、活動中。会員情報を掲載するページなども設け、読者間の結びつきを大切にします。

セミナー・学会情報をいち早くお届け。求人情報の件数の多さにも注目

獣医療界などのタイムリーなニュースや新製品情報、セミナー・学会などの勉強会情報をいち早くお届けします。また求人情報の件数も業界トップ！

レベルアップ、社会的地位向上をバックアップする企画も満載

動物看護師、トリマー・グルーマーの職業の安定と社会的地位の向上を応援するため、関連企画や記事を掲載します。また、動物看護関連資格試験の受験情報や対策も掲載します。

A4判 88頁 毎月10日発行

一冊定価 1,600円

定期購読

- 6カ月（計6冊） 7,000円
★毎号買うより2,600円もおトク！
- 1年（計12冊） 12,000円
★毎号買うより7,200円もおトク！
- 2年（計24冊） 22,000円
★毎号買うより16,400円もおトク！

動物看護師が修得するべき標準的な知識・技術を提示 動物看護学【総論・各論】



- 動物看護学の学問的基礎が、わかりやすく身につく。
- 総論と各論から成り、各分野を系統立てて学習できる。



動物看護学【総論】主要目次

- 第1章 動物看護概論
- 第2章 動物看護における業務と技術
カラー写真 看護の対象動物
- 第3章 看護の対象動物
- 第4章 動物看護学研究法
- 第5章 関連法規
資料

動物看護学【総論】

日本動物看護学会教科書編集委員会 編
B5判並製 326頁 2色刷 定価 10,290円



動物看護学【各論】主要目次

- 第1章 解剖生理学 第2章 内科看護学
- 第3章 外科看護学 第4章 薬理学
- 第5章 感染病学 第6章 繁殖と遺伝
- 第7章 動物心理学・動物行動学
- 第8章 動物栄養学
- 第9章 動物看護学公衆衛生学
- 第10章 動物看護師のための輸液
- 第11章 動物看護師の放射線学

動物看護学【各論】

日本動物看護学会教科書編集委員会 編
B5判並製 318頁 2色刷 定価 10,290円

発行：日本動物看護学会 発売：(株)インターズー

as の好評連載が本になりました!!

as ムック Let's 院内業務!

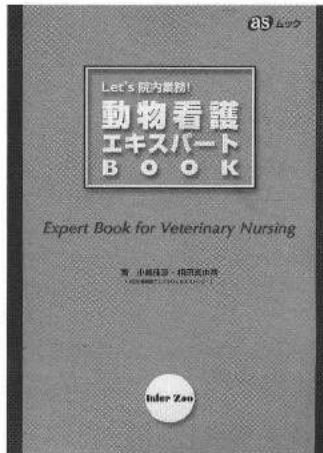
動物看護 エキスパートBOOK

★動物病院での仕事を分かりやすく分類し、
それぞれに的を射たポイント解説と
多くの写真で院内業務のすべてをレクチャー。

10月下旬
ついに発刊!

★as好評企画「今さら聞けないシリーズ」製品一覧データ集付録

新人動物看護師からベテラン動物看護師まで、動物病院で働く動物看護師が獣医療に携わるスタッフの一人として、どのように行動したらいいのか、どのようにレベルアップを図っていったらいいのか、実際に使われているマニュアルに基づいて書かれています。そのため、ルーチン・ワークに慣れ、これからよりレベルの高い動物看護を目指す方には最適の一冊です。また、動物病院の日常業務を知りたい看護学校学生やこれから看護学校を受験される方にも読んでおいていただきたい一冊です。さらに、新人動物看護師研修にも絶好の一冊となるでしょう。



こんな方にオススメ

- よりレベルの高い看護を目指す動物看護師さんに
 - 動物病院業務を詳しく知りたい動物看護学校の学生さんに
- 頼れる一冊!!!

著 小嶋佳彦・相田真由美
(小島動物病院アニマルウェルネスセンター)

A4判 約160頁 並製本
定価 6,300円(税込)

新刊特価 5,980円(税込)
※2005年1月末まで

主な内容

基礎編

- 第1章 動物看護師の皆さんへ**
はじめに/動物看護師として、社会の一員としての心がけ/新人動物看護師の皆さんへ/新スタッフを迎える、動物看護師へのアドバイス/出勤から受付開始までの動物看護師の仕事/仕事の七つ道具/動物看護師としての身だしなみ
- 第2章 受付業務のポイント**
受付での対応法/新規の飼い主さんと再来院の飼い主さんへの対応/問診のテクニック/クレームの対応/飼い主さんを気遣い、仲よくなるう/受付での目配り、気配り、思いやり
- 第3章 診察室での対応のポイント**
診察室での対応法/診察室での動物の対応と、飼い主さんへの気配り
- 第4章 会計時のポイント**
会計(受付)での対応法/薬の準備と説明
- 第5章 電話対応のポイント**
電話対応の基本/毎日の電話対応
- 第6章 臨床検査のポイント**
臨床検査の手順と注意事項/動物の状態をみながら検査を行うことが大切
- 第7章 保定のポイントとテクニック**
保定の手順と注意事項/採血時の保定/目的に応じた基本的保定法/動物看護師の保定の技術とテクニック

実践編

- 第8章 トータルケアのポイント**
予防接種/フィラリア予防とノミ・マダニの防除/不妊・去勢/食事管理とデンタルケア/しつけとグルーミング、定期健康検査/マイクロチップ/鍼灸治療/ペットロス~動物を亡くした飼い主さんの悲しみ/より高いレベルのトータルケアを目指して
- 第9章 動物病院における公衆衛生**
感染症の基本事項/人と動物の共通感染症について/消毒と滅菌/環境管理のコントロール/動物病院での主な衛生管理のポイント/動物看護師としての役割
- 第10章 入院動物のケアポイント~入院から退院まで~**
毎日の看護のポイント/症状や年齢にあったケア/毎日のケアを通して

第11章 手術準備と術中・術後の看護

手術当日までの対応/術前の対応/術中の対応/術後の看護/術後の管理/手術のアシスタントとしての心構え/救命救急と応急処置

第12章 新生子の看護~誕生から離乳まで~

新生子の看護/子犬・子猫の成長/孤子新生子の看護/離乳

第13章 スキンケアとグルーミング

代表的な皮膚の病気/全身の手入れ方法/動物病院で行うグルーミングの重要性

第14章 食事と栄養

栄養素の働き/消化と吸収について/栄養バランスのとれた食事の与え方

第15章 ライフステージにあわせた食事と健康管理

ライフステージにあわせた食事/食事と健康管理

第16章 ウサギとハムスター、小型の鳥類の基礎知識と看護

ウサギ/ハムスター/小型の鳥類/来院時の対応/学校飼育動物

第17章 野生傷病鳥獣への対応と看護

野生動物の対応と看護のポイント/野生傷病鳥獣保護収容事業にかかわって/野生傷病鳥獣保護の問題点

第18章 目指せ! スーパーVT

院内コミュニケーションについて/オリジナリティーのある動物病院づくり/目指せ! スーパーVT

特別編

Additional article コンパニオンアニマルのための繁殖学

はじめに/犬の繁殖生理(犬の繁殖データ)/猫の繁殖生理(猫の繁殖データ)/犬の自然交尾と性行動/犬の人工授精とその考え方/妊娠と分娩診断/分娩(正常分娩)/難産と帝王切開/コンパニオンアニマルの遺伝性疾患とその繁殖管理/卵巣・子宮摘出術(不妊手術)と精巣摘出術(去勢手術)/最後に

参考文献

巻末付録

主な院内業務関連製品一覧

関連テーマ:フィラリア症/ワクチン/ノミ・マダニ/口腔ケア/アレルギー/肥満/狂大病/眼科疾患/犬猫の関節炎/犬の陥尿/犬猫の尿石症/下痢/内部寄生虫/薬浴/外耳炎





猫の体重減量、糖尿病の食事管理に新たな選択肢
プリスクリプション・ダイエット®

<猫用> **m/d**TM
— 猫の代謝を変化させます —

<猫用>m/dは、「低炭水化物」「高蛋白質」の栄養組成により、猫のエネルギー代謝を変化させます。臨床試験¹⁾では<猫用>m/dを給与した体重過剰の猫において、平均25%の体重減量がみられました。また、糖尿病の猫の食事管理に役立つことが別の臨床試験²⁾により示されています。猫の体重減量や糖尿病の食事管理に<猫用>m/dをお試しください。

1) Clinical Study on canned formula.
Schoenherr WD. Effect of a low-fat, high fiber food versus a high-protein, low carbohydrate food on weight loss in obese cats.
Unpublished data. Hill's Science & Technology Center, Topeka, KS, 2003.

2) Data on file, Hill's Pet Nutrition, Inc.



販売元：
大日本製薬株式会社
アニマルサイエンス部
〒541-0045 大阪市中央区道修町2-6-8

輸入元：
日本ヒルズ・コルゲート株式会社
〒135-0016 東京都江東区東陽3-7-13

獣医師専用の食事療法情報テレホン
0120-211-317

ヒルズ・ホームページ <http://www.hills.co.jp>



中ヒルズ・ホームページに獣医師専用サイト“Hill's Vet's Site”を開設しています。ご覧いただく際には、IDとパスワードが必要となりますので、ヒルズ・ファックスサービス事務局（☎0120-105-466）へお問い合わせください。